

添付資料

『バルバロス・ハイレッディン遠征記』全訳

訳：藤巻晋也

【正編部】

■ 壮麗王スルタン・スレイマンの命により回想録を書き始めた

(p9) ある日、セリムの息子スルタン・スレイマンとお会いした時に、スルタンは私に以下の様に命令した。

「お前と兄のオルッチはどのようにしてミディッリ (Midilli) の島から出て来て、アルジェを征服したのか？お前たちは今までに海や陸でどんな風な遠征を行ったのか？全ての出来事を過不足のない言葉で一冊の本にしてください。本が完成したらその複製を私の宝庫に収めるために持ってきてください。」

この命を受け、私は多くの海戦において友であった当時の書家達のうとからムラディ (Muradi) を呼んだ。彼にスルタンの勅令のことを話した。私たちは直ちに仕事に取り掛かった。私が語り、ムラディが記した。

■ 父ヤクブ・アーのミディッリ定住と母との結婚

征服王メフメットは、ミディッリを異教徒の手から奪うと、トルコ人の島への定住を命じた。最初に定住した人々の中に父もいた。父ヤクブ・アーは、シパーヒー (sipahi) の息子であり、父もまたシパーヒーであった。セラニック (Selanik) 周辺の Vardar Yenicesi には封建領土があった。父がミディッリに移ると、征服王スルタン・メフメットの命令で (p10) 父にその島でティマールが与えられた。こうして新たな生活に至った父は島の住民の一人の娘と結婚した。父はハンサムで勇敢な男だった。母は彼に 4 人の息子を産んだ。イスハックは 4 人兄弟の長男だった。次にオルッチ、この私フズル、最後にイルヤスが生まれた。神は全員に長寿、沢山の戦闘、そして勝利の才能を与えてくださった。

兄イスハックはミディッリの城に住んだ。兄オルッチと私は航海の虜になった。オルッチ・レイス是一只の船を手に入れ、それで商売をするために海に出た。私も 18 人漕ぎの舟を手に入れた。まずはセラニックとアールボズへ行ってきた。ミディッリに商品を持ってきて売った。しかし兄オルッチはこの近距離の航海に満足しなかった。彼はダマスカスのトラブルスへ行くことを望んだ。ある日、4 兄イルヤスと共にトラブルスへ行くためにミディッリを発った。

■ オルッチがロードスの異教徒に捕らえられ幾年か捕虜となった

兄オルッチはダマスカスのトラブルスにはたどり着けなかった。道中ロードスの船と遭遇したのだ。大規模な戦闘となった。弟のイルヤスは戦死した。安らかに眠りたまへ！異教徒の船が戦闘に勝利した。オルッチ・レイスを船ともども捕らえた。鎖でつないでロー

ドス島に連れて行った。この件がミディッリに伝えられると、私はひどく悲しんだ。私は血の涙を流した。しかしすぐにオルッチを救い出す方法を考え始めた。

キングという名の異教徒の商人がいて、私の友であった。彼はロードス島と交易していた。キングに私の船を与えて、私はボドルムにやって来た。私はこう言った。

「友情が今日明らかになる。君に 18000 アクチェ渡す。兄オルッチを救うために私に力を貸してくれ。君はロードスへ行き、刑務所を探ってくれ。私は君をボドルムで待つ。」

キングは「喜んで。」と言ってロードスに向かった。彼はそこでオルッチを見つけて会った。彼はオルッチにこう言った。

(p11)「弟のフズル・ハイレッディンが君を心配して祈っている。彼は君が異教徒の捕虜になったことをとても悲しんでいて、夜も泣いている。君の所へ私を送った。今君の弟はボドルムにいる。いい知らせを待っている。」

オルッチはキングからこうした話を聞くと嬉し泣きしてこう言った。

「直ちにフズルによろしく伝えてくれ。お前が何の目的で島へやってきたのかを他の異教徒と **sırtındaki gömlek** に聞かれないように。最初にめぐってくるチャンスで再び会おう。」

オルッチにはロードスにサントウルルオールという知り合いがいた。彼は有名な異教徒であった。島にやってきてオルッチと会い、様子を尋ねた。オルッチはサントウルルオールにこう言った。

「このロードス騎士団は私をフズルには売らない。おそらく君に売るだろう。私を島から出してくれ。その後君に借りを返そう。」

サントウルルオールは言った。

「君の指令を肝に銘じた。売りに出されるのならば君を買おう。しかし、私が直接申し込んで君を買いたいと望めば怪しむだろう。最良の策は君が町へ降りる日に私の店の前を通るのだ。だが気をつけろ、店のほうは見えていけない。私と君が知り合いであるように悟られるな。君が通った時、私は偶然君を見る。とても気に入ったと言って、騎士達に君を私に売るように頼むのだ。」

オルッチはこの話を聞くと、解放されたかのように喜んだ。捕虜の生活はそれほどつらかったのだ。数日たったある日サントウルルオールは、ロードスの船長達とともに彼の店の前に座って話していた。彼はあたかも仕事に取り掛かるかのようにして、店の前を通ったオルッチを見た。

近くの船長にこう言った。

「そこを通った捕虜は誰のものですか？ 私はいつもここを通るのを目にしている。彼は賢く仕事をしている。もし所有者が捕虜を売のだったら私が買うのに。」

(p12)これに対して船長たちのある者が言った。

「私が所有者だが、ほしければ売ろう。」

「そうか、いくらですか？」

「高いぞ！」

「ふむ、私は金貨 800 枚を持っている。」

だが、売買取引になる前にお流れになった。騎士達はオルッチが名の通った商人であることを教えられていたのだった。

「彼の弟はフズル・ハイレッディンで、ボドルムにいたといていた。彼は兄のために金貨 1 万枚を払う準備がある。金貨 1 万枚が与えられる捕虜を金貨 800 枚で売られるものかね？」

彼はサントウルルオール金を返してオルッチを取り戻した。騎士たちはオルッチの真の値打ちをキングから聞いたようだ。キングはフズル・レイスが与えた 18000 アクチェをごまかすように、私がオルッチを救うことを騎士達に教えたのだった。

このためロードスの人々はオルッチを地下の刑務所に拘留した。そうすれば私にチャンスがあっても救出できない。かねてから多くの虐待を始めた。手、足、そして首にまで鎖をつけた。だが死なない程度にパンは与えていた。オルッチはこの状態にこれ以上耐えられなかった。彼は閉じ込められている刑務所の司令官との面会を望んだ。司令官の前にでた。司令官は

「何しに来た？」と言った。

「私にこんなにも虐待を加える目的は何ですか？」

「トルコ人よ、教えてやろう。金貨 800 枚を払って逃げようとするとうどうなるのかを。お前の弟フズル・レイスは財産と共にあなたを救うためにボドルムで待っている。このことを知らないと思ったか？それともお前は私を馬鹿だと思っているのか？」

「私を解放するのにいくらほしいのですか？」

「お前はいくら払うのだ？自分をいくらだと思おう？言ってみろ。」

(p13) 「私は自分を価値あるものとして、全ルメーリに大麦、アナドルにポケットマネーを与えて、金貨 100000 枚を払おう。」

「この愚か者！お前はおかしいことを言い続けていろ、結末がどうなるか。」

オルッチが馬鹿にしたことに怒った司令官は彼に今までよりも酷い扱いをするために刑務所長に命令を与えた。オルッチはこの状況に恐怖した。彼はある日刑務所で一人泣いた。

「ああ神よ、一人残されたものへの救いはあなたからだ。神よ、預言者の名に懸けてこの哀れな私を救いたまへ。私を早く異教徒の虐待から救ってください！」と祈りを捧げた。

その晩、オルッチは祈り続けて力尽き、粘土の床に下りて眠った。夢の中で光り輝く一人の老人が姿を現した。

「オルッチよ、安心しろ。イスラムのために行われる虐待に耐えるのだ。嘆くな。近いうちに救われるだろう。」

オルッチはこの夢に大層喜んだ。刑務所での不安が消えた。気が楽になった。その晩、ロードス中の船長が召集され、オルッチについて話し合った。その会議で船長の一人が言った。

「海の仕事は不安定だ。今オルッチに起きたことは明日には私たちに起こりうる。このト

ルコ人にひどい虐待を加えることは正しいことではない。」

このため、オルッチの牢からの解放が決定された。ある船の漕ぎ手にした。オルッチはガレー船の奴隷漕手となった。しかし彼はこう言った。

「地下で行う虐待に比べれば海の上で船を漕がされることは神の恩恵だ。神よ、恩恵に感謝します。私は地上を見た。」

■ オルッチがロードス騎士団の船から逃れ、救出される

(p14)当時、¹皇子コルクットは、アンタルヤにいた。そこで知事をしていた。なんと毎年ロードスから 100 人奴隷を買って開放することを習慣としていた。その年も彼はカプチュバシュ (kapçıbaş) をロードスに派遣した。ロードス島の人々は 100 人の奴隷を解放してカプチュバシュに引き渡した。行われた説明によると、奴隷たちは一隻のロードスの船によってアンタルヤ岸に連れ出されるはずだった。全能なる神の知恵と、トルコ人奴隷の輸送のためにオルッチが漕がされている舟が選ばれた。オルッチはとても価値がある奴隷だったために、ロードスの人々は彼を解放される 100 人のトルコ人の中に加えなかった。

オルッチは快活な男であった。彼はあらゆる言葉に精通していた。特にギリシャ語を前例のない形で話した。しばしば船にやってくるロードスの船長達と談笑した。ある日この船長達がオルッチにこう言った。

「トルコ人よ、お前は言語に精通しているな。特にギリシャ語をすばらしく良く知っている。お前はイスラムの信仰で何を得た？我々の宗教に改宗しなさい。我々の中でお前とその名は、評判の男となるだろう。」

オルッチはこう答えた。

「愚か者どもよ。誰もが自分の宗教が一番合うのだ。ムハンマドの上にいる聖人がいるだろうか？私がそれを信じられるだろうか？・・・・・・」

オルッチが漕手をしている船に一人の司祭がいた。彼はこう言った。

■ オルッチに用心する必要がある

(p15)このオルッチは人々が言うよりも用心しなさい。彼とはあまり多く会話してはいけない。彼は読み書きができるようだ。彼のムスリムとしての知識は私のキリスト教徒としての知識以上だ。甘く見ないように。あなた方全員をまっ逆さまにするほど無慈悲なのだから。

ロードスの船は、アンタルヤ付近の無人の場所へ接近した。皇子コルクットのカプチュバシュと 100 人の奴隷がここに出されて残された。その晩は逆風が吹いていた。(そのため)活動せずに朝を待つことに決まった。船の小船を降ろして、魚を取るために浮かべられた。

¹ ベヤジット二世の三男でヤブズの兄弟。トルコ人の航海を広範囲で擁護したことで有名。

この時、大チャンスが発生した。オルッチは小船に近寄らなかった。遠いところで海岸に錨を下ろした。オルッチはこの幸運を戦利品ととらえた。何も見えなかった。どこも真っ暗で暴風域にあった。錨は役に立たなかった。「神の名の下に！」と言って海へ飛び込んだ。長い間泳いで岸へたどり着いた。無事に着いた。顔を地面に擦り付けて神に祈った。通り出ると、あるトルコ人の村にやってきた。両側を見ていたときにある老女とであった。「息子よ、お前は困難な道から来たようだ。来なさい。今夜は私の客人となりなさい。」と言った。

老女はオルッチを家に連れて行った。オルッチの所へ食べ物を持ってきた。食事を摂って、着替えた。

オルッチはその村で 10 日過ごした。村人達は毎晩オルッチを招待するために喧嘩した。

ロードスの人々はというと、朝になってオルッチの漕ぎ座が空になっているのを見つけた。彼が逃げたのを知った。「私たちはロードス島にどの面を下げて帰る？」と狼狽し始めた。だが、オルッチを見つけることはできなかった。不安の中ロードス島に帰った。船の司祭はオルッチが魔術を知っていて、そのために逃げたといった。

オルッチは老女に別れを告げて、村を離れた。彼はミディッリに行きたかったのだ。3 日(p16)間でアンタルヤにやってきた。アンタルヤにはアリ・レイスという名の艦隊提督がいた。彼はイスケンデリエとアンタルヤ間の仕事、つまり商売をしていた。彼はオルッチの名声を聞いていた。

「よく来たよく来た、息子よ。船は私のものではなく、君のものだ。」と言ってオルッチを迎えた。

こうしてオルッチはアリの船の二代目船長となった。

この時私は、ボドルムで待つ希望を捨て、ミディッリへと戻っていた。兄オルッチはイスケンデリエに着くと、そこからミディッリに手紙をよこした。オルッチは自分の冒険を説明した。私は兄が助かって心の底から嬉しかった。

■ 兄オルッチがエジプトの太守の庇護下に入る

兄オルッチの名声はエジプトの太守も耳にしていた。太守はオルッチを呼び、御前に通して、奉仕を促した。太守の命令はインド側に艦隊を派遣することだった。オルッチをこの艦隊のセラスケル (serasker) に任命して、アダナ知事への勅令を書いた。イスケンデルン湾のパヤス港に 40 隻の船を造るのに十分な材木を送ったことを知らせた。アダナ県知事は、木材を準備した。パヤスに送った。オルッチはこれらを持ってエジプトに行くために出発した。16 隻の船でパヤスにやってきた。

ロードスの人々は、オルッチがエジプトの太守のセラスケルとなったことを知り、チャンスを待っていた。兄がパヤスに来ることを知ると、大艦隊で制圧した。オルッチは危機的状况を説明した。全ての船の船首が浅瀬に乗り上げて、陸に留まった。水兵たちを拾っ

(p17)で内陸に退散した。水兵は散り散りになって国土に行った。兄は再びアンタルヤにやって来た。アンタルヤでは 18 人掛けの船を作らせた。ロードス島の海岸を制圧した。彼は異教徒に慈悲を与えなかった。ロードス騎士団とロードス島の支配者はこう言った。

「オルッチという名の海賊が出現した。彼の下には 18 隻の船がある。飛ぶ鳥を支配している。彼は私たちの財産を奪い、私たちの国を焼く。何度私たちの息子達を奴隷にしてシリアのトラブルスに送って、市場で売ったことか。彼の影響で私たちは海に出られなかった。私はあなた方に彼を地下牢から出さない様に言ったが、あなた方は聞き入れなかった上、彼を漕ぎ手としてつないだ。今すぐに来て、恨みを晴らすのだ。」

ロードスの人々は、5、6 隻の快速船をオルッチの追跡に従えさせた。トルコ人の海賊を、あらゆる港、部族から探し始めた。最終的にある港で押さえた。船を焼き払った。オルッチは水兵たちに救われて、逃げた。彼は再びアンタルヤに戻った。オルッチの船はロードス港に持っていかれて、人々に展示された。だが、オルッチが奴隷にされてロードスに送られなかったことはロードス島の支配者を大いに怒らせた。

「船はオルッチのものであるが、彼は船の中にいない！」と怒り怒鳴った。

オルッチがアンタルヤに戻った時、時のスルタン・バヤジッド二世の息子コルクットが、アンタルヤからマニサにかけて活動していた。コルクットにはテケ（アンタルヤ）県のほかにサルンハン（マニサ）の県が与えられた。コルクットには「ピヤーレ・ベイ」という名の金庫番がいた。以前オルッチはこのピヤーレ・ベイに一人のフランス人の男を贈ったことがあった。2 人に間には友情があった。今オルッチの下にこの様な状況が訪れ、船を失うと、ピヤーレ・ベイは皇子コルクットに状況を説明した。

「オルッチは私たちの戦士である。昼夜異教徒たちと戦い、幾度も勝利を収めた。今、彼は船を失った。スルタンよ、必要なのです。どうか戦士に一隻の船を施したまへ。」と言った。

(p18)皇子コルクットは、オルッチの名声を耳にしていた。要望を喜んで聞き入れた。彼は兄・オルッチを御前に呼んだ。面談した。大いに歓迎し、恩恵を与えた。

「直ちに取り掛かるといい、お達者で。私はお前を船のないままにはしない。悲しむことはない。」と労った。

コルクットは直ちにイズミルのカドウ（kadi）に指令を書いた。

「私の勅令が着たら直ちに、オルッチに、頼んだような最高品質の船を作らせなさい。私たちの海を通る異教徒たちと戦っても構わない。恨みをはらせ。我々の王朝を神の慈悲とともに思い出すのだ。」

ピヤーレ・ベイはイズミルの関税長官に手紙を書いた。

「オルッチは現世と来世の友である。あなた方のところに来たら、援助を欠かさぬように。22 人掛けの船が作られたことを確認して、すぐにオルッチに譲渡するように。船の装備のためのあらゆる出費は皇子コルクットの支払いとせよ。」

オルッチはイズミルにやってきた。すぐに彼に 2 隻の船が与えられた。一隻は皇子コル

クト個人への贈り物。もう一隻はピヤーレ・ベイの所持品であった。それもオルッチの管轄下におかれた。オルッチは船を装備し、水兵を集めた。そしてフォチャにやって来た。

オルッチの船は 24 人漕ぎで、ピヤーレ・ベイの船は 22 人漕ぎであった。この 2 隻は 3 ヶ月半の間に建造され、装備もつけられた。オルッチはフォチャの港に錨を降ろした。オルッチはフォチャからマニサにやってきた。そしてピヤーレ・ベイの屋敷に降り立った。ここで 3 日間客人となった。3 日後、皇子コルクットの御前に出た。オルッチは手にキスをした。皇子コルクットは大変な好意を示した。コルクットは言った。

「神よ、お前にあらゆることにおいて勝利を。」

(p19)オルッチはマニサで皇子コルクットとピヤーレ・ベイにお暇を告げた。そしてフォチャに戻った。その晩は祈り、礼拝した。

翌日、急いで錨を上げさせた。

数日後、海上で 2 隻のヴェネツィア船に遭遇した。2 隻ともオルッチに拿捕された。船には金貨 24000 枚があった。この金などの品が戦利品に取られた。多くの水兵が金持ちになった。なぜ彼らが金持ちになったかといえば、オスマン朝皇子コルクットの祈りを受けたためであった。スルタンの祈りを受けた結果利益を得た。スルタンの呪いを受けるものは次から次に悲劇にあうのだ。

オルッチはこの戦闘をプルヤ海岸 (Pulya) で行った。彼はそこからルメーリの海岸にやってきた。アールボズ島 (Ağrıboz) の外海でさらに 3 隻のヴェネツィア船と遭遇した。ヴェネツィア人の異教徒どもは、オルッチの船を見ると砲火を浴びせた。オルッチは水兵たちを巧みな言葉で勇気付けた。彼らはヴェネツィア船に接近した。両側から放たれた砲弾は海を地獄に変えた。

船は次々と接岸した。水兵たちは異教徒の船に乗り込んだ。最終的にヴェネツィア船は拿捕された。285 人のヴェネツィア人が捕虜にされた。120 人ほどのヴェネツィア人が死んだ。

敵船の品は、オルッチの船に移された。船が満杯になると、亀のようにゆっくりになって、進めなかった。彼らは軽快にミディッリにやって来た。私、フズル・ハイレッディンは兄イスハックと共に兄オルッチを港で出迎えた。親戚一同も一緒に来ていた。オルッチにキスをして、抱擁した。オルッチがミディッリから離れて何年もたっていた。これほど長い間お互いに悼みあっていたのだ。

オルッチは、ミディッリからイズミルに行き、恩人の皇子コルクットと同胞のピヤーレ・ベイに会うことを決めた。だが、ちょうどこの頃ミディッリにある知らせがやってきた。それによると、スルタン・セリムが王位についたらしい。そして、皇子コルクットとは敵同士になつたらしい。皇子コルクットは必要以上に怖がって逃亡したらしい。オルッチは (p20)この知らせを受けると、とても悲しんだ。長兄イスハックはオルッチにこう言った。

「今やこの状況は変わった。この冬はイスケンデリエで越冬しろ。何が起きているかわかるか？お前の品は皇子コルクットの施し品である。そのためお前には害があるだろ

う。」

オルッチは引き止めた甲斐なく全員に別れを告げた。ミディッリから出発した。ケルペ島 (Kerpe) の外洋で 7 隻の船を拿捕した。イスケンデリエにやって来た。エジプトの支配者は、オルッチ、ヤフヤ・レイスと一緒に 7 隻の戦利品が船によりイスケンデリエにやってきた報を受けた。オルッチはエジプトの支配者と会うことが憂鬱だった。彼が与えた船をパヤスでロードスの人々に奪われていたために、萎縮していたのだ。彼に許しを請うために、戦利品の中から上等な部分を分けて、4 人の女奴隷と 4 人の奴隷を選んだ。エジプトの支配者はオルッチと仲間たちを泊めた。兄オルッチにこう言った。

「オルッチ・レイスよ、お前を許そう。神は許しを請う僕を好む。実際私の 16 隻の船をお前は焼かせた。だが、お前の中から一人の水兵の鼻を切ることもなかった。全員助かって、異教徒たちには一人の捕虜もやらなかった。戦闘状況にあつては、あらゆることがありうるのだ。お前が戻って、私のところへ来ないことには怒っていた。だが、今お前を許した。安心せよ。私は今一度お前のことが気に入った。」

このように述べて彼はオルッチを大歓迎した。オルッチが持ってきた贈り物以上の贈り物を与えた。オルッチは許されたのだ。カイロからイスケンデリエへと戻った。スルタンはイスケンデリエの知事に命令書を書いていた。知事は兄と水兵たちを持て成した。いくらかの喜びとともに時が過ぎた。春がやってきた。オルッチはスルタンに手紙を出して航海に出る許可を求めた。許可が下りた。兄はキプロス外洋に向かって漕ぎ出した。その頃、5 隻のヴェネツィア船を拿捕した。そこから西に行った。チュニスの海岸のジェルベ島 (Cerbe) へとやってきた。戦利品をジェルベの人々に売った。どの水兵にも一人当たり 25zira のヴェネツィア産ラシャ、4 丁の銃、4 兆の拳銃と、1715 枚の金貨を振舞った。オルッチはイスケンデリエに行く一隻の船を見つけた。もっとも高価なものの中から、ラ (p21) シャ、銃、拳銃と 12-13 歳の捕虜の少年を割いた。エジプトの太守に送った。太守はこう言った。

「世界に神の恩恵を気にして、善良をしる男がいるのならばそれはオルッチ・レイスである。」

こうして、彼は兄に祈った。

この間に muhabet bir iken bin oldu. 兄はジェルベの海で私掠を続けた。5-10 隻の船をさらに拿捕した。

■ 思うに世界は私のものとなった

故郷の様子を見てみよう。スルタン・セリムが即位すると、彼の兄弟コルクットとの間に不和が生じた。スルタン・セリムはコルクットの下に兵を送った。至る所を探したが、皇子コルクットを見つけられなかった。その時、カプタン・パシャはイスケンデルのパシヤであった。勇敢で残虐な男であった。

Akdeniz ‘e çıkıp derya üzere ik イブヌル・カーディ ürekli bir kayak gezdirmezdi。「彼は皇子コルクットの家来である。」といて船長たちを厳しく弾圧した。私はこれを聞くと、ミディッリを去る決意をした。一隻の船に小麦を積んで、急いでダマスカスのトラブルスに行った。小麦を黒い大麦と交換してプレヴェザにやって来た。ここで大麦を売った。少数の雌馬と騾馬を買った。プレヴェザの対岸のアヤマブリ島 (Ayamavri) へ錨を下ろした。港に停泊中の 24 人がけの美しい船を目にした。私は興奮した。質問をして、わかった。フェタフという名のトルコ人の船であったようだ。フェタフ船長は最近死んで、相続人たちが船を売るといってここに運んだらしい。私はこの船の虜であった。相続人が何を望もうとも、私は与えるつもりだった。ついに²6kese アクチャの金貨で折り合いがついた。船を買った。思うに、世界は私のものとなった。私は新しい船を見つけたのだ。別の船も買った。私地中海を北から南へ、隅々まで渡った。ジェルブ島にやって来た。兄オルッチと会った。二人の兄弟が「どこへ行こうか？」と考えているときにチュヌスに行くことが決ま(p22)った。私たちは「人生の最後は死である。こうなったら航海の道に専念しようではないか。」と言った。

私、オルッチ、そしてヤフヤ・レイスは一人ずつ一隻の船に乗り込んでチュニスにやって来た。チュニスの太守の所へ出て行った。贈り物を贈った。私たちはこう言った。

「私たちにあなたの国の一部を与えてください。私たちの船をそこで保護します。正しい道へ航海します。私たちが得た戦利品はチュニスの市場で売ります。ムスリムの役に立ち、商人は潤うでしょう。³あなたにも私たちの戦利品のうち 7 分の 1 の分け前を与えます。」

チュニスのスルタンは

「とても道理に適ったことを言う者達だ。よく来た。お前たちは喜びをもたらした。領土はお前たちのものだ。」と言った。

■ お前の戦いが成功するように！

スルタンは私たちにハルクル・バード港を与えた。私たちはその港で越冬した。春にはそこから海に開放された。私たちは 5 隻の船を持っていた。

最も軽快だったのは私の船だった。

私たちは Sardunya 港に着いた。一隻の海賊船を拿捕した。船内の 150 人の異教徒を捕虜とした。

ちょうどこの時、水平線に一隻の船が見え、神のおかげで、ブルサのケシシュ山ほどの大きさだった。私たちの船の一隻の船長はデリ・メフメットであった。とても勇敢な若者であった。彼は私の右腕だった。彼は私たちにこういった。

「船長達は許可と命令を下してください。私が行ってこの船の巨人を捕らえて見せます。」

² 500 クルシュ相当

³

私はデリ・メフメットの情熱を守るための許可を与えた。だが、彼の船は敵船のそばに(p23)ハシバミの皮のように残っていた。私たちはメフメットの後についていった。敵船に近づいた。中には誰一人生きたものがいなかった。私たちは船へ出た。出入り口にまで小麦を積み込んだ。デリ・メフメットに声をかけた。

「神のおかげだ。」と私たちは言った。

翌朝さらに二隻の船を捕らえた。

そのうちの一隻には、蜂蜜、オリーブ、チーズがあった。もう一隻はジェノヴァ人の船だった。鉄が蓄えてあった。山のような戦利品とともに大砲や小銃を鳴らしながらチュニスにやってきた。船全体が満足していた。スルタンへの割り当てを別にした。貧しい人々にもたくさん施しをした。たくさん祈った。

■ 異教徒たちが恐れ始める

その冬、私たちは再びチュニスに渡った。春が来ると航海乗り出した。13日でモラ(Mora)のアナポリ港(Anapoli)の外までやってきた。スペインに行く大きな異教徒の船と遭遇した。中には3-400人の海兵がいた。金で刺繍した彼らの軍旗をはためかせて、大砲を放った。私たちは7回敵船に接近しようとした。7回目で近づいた。即座に戦闘になった。だが、私たちは敵船を拿捕した。150人の仲間が戦死した。86人の水兵が負傷した。私たちが知ったところによると、異教徒の船には525人の人がいた。これらのうち183人を捕虜にした。残りは死んだ。中にはスペインの大きな国の領主もいた。さらにもう一隻を拿捕してチュニスにやって来た。オルッチは負傷していた。チュニスで治療を受け、休んでいた。戦利品の中には70-80羽のオウムと、20羽の鷹がいた。これらをチュニスの太守に与えた。この航海の後、私たちの名は全ての異教徒の国へ知れ渡った。私たちを消し去るために異教徒たちは連合した。彼らはこう言った。

(p24)「オルッチとフズル・ハイレッディンの名においてはオスマン朝が現れる。このキリスト教徒の敵の蛇が竜に変わる前に叩き潰そう。彼らの名を地上から消し去ろう。今、私たちがチャンスを与えるならば、当然このトルコ人は私たちに厄介なことをたくさんするだろう。」

スペインの異教徒たちはこの方法で10隻の完全なるガレー船を整備した。彼らの目標は私たちを捕らえることだった。だが、彼らがやってくる前に私たちは海に出た。ジェノヴァに行きたかったのだ。逆風のせいでアルジェ岸に着いた。ベジャーイエという、アルジェの城の前で錨を下ろした。10隻のスペインのガレー船も私たちをジェノヴァ側で見つけられずに、ベジャーイエにやって来た。海岸での戦闘を受けることは非常に危険であった。私たちは直ちに海に出た。異教徒のガレー船は私たちが逃げたのだと思って、私たちの背後に下がった。十分に海に出ると、兄オルッチはすぐに戻ってガレー船の接近を命令した。こうして予期していなかった敵はとても驚いた。激しい戦いだった。すぐにガレー船の司

令官へと接近した。大型のガレー船とその他の 3 隻を捕らえると、ほかの船は逃げた。彼らはベジャージェの城に避難した。オルッチ・レイスは、城の下に入ってガレー船を捕らえたがった。私は阻止したかった。兄の命令は危険だったからである。心配だったのはこれである。私たちが捕らえた 4 隻のガレー船と共にチュニスに戻ろう。6 隻はそのまま残そう。

■ 4 隻が 14 隻となった

だが、とても大胆な兄オルッチは私の言うことを聞かなかった。攻撃することに決めた。しかしベジャージェの城には大勢のスペイン人異教徒がいた。6 隻のガレー船のスペイン人は彼らの船を空にして、城中の仲間たちと合流した。兄は城に攻撃した。私たちは海岸に出た。城からは私たちの上に雨のような砲弾と銃の弾丸が降ってきていた。60 人の戦死者と、同じくらいの負傷者をもたらした。多分私たちは落城させることができただろう。だが、戦闘の最も激しい時に、兄の右腕に銃弾が命中した。敵はこれを見た。彼らは城から (p25) 出て、乗組員たちを攻撃した。私は兄が重症を負ったことを酷く悲しんだ。この恨みによって 300－400 人の乗組員たちと共に私は異教徒たちとへこの様に挑み始めて、神に呪われたもの達を kira kira 城内まで押し戻した。300 人の異教徒を殺した。150 人を捕虜とした。

これ以上城の前に留まっていることは適切ではなかった。兄オルッチは傷の酷さのせいで失神してしまった。私は水兵を集めて船に乗せた。異教徒達は城から私たちの船に銃弾を降らせていた。しかし、神のお陰で一発も命中しなかった。14 隻の船でチュニスへ戻った。オルッチの傷を外科医たちは喜んで手当てし、包帯した。だが、不安は日に日に増大した。全ての外科医たちが召集されて私のところへやってきた。

「もしあなたの兄の腕を切らなければ、結末は恐ろしいことになる。その後は私たちにも分からない。」と言った。

チュニスの人々は私たちが 4 席の船で航海に出て、14 隻の船で戻ったのを見ると一層喜んだ。しかし、オルッチ・レイスの腕の状況に全てのムスリムが泣いた。私は外科医にこう言った。

「兄オルッチの腕を誰が救おうとも、その者を天秤の椅子に座らせよう。もうひとつの椅子には金を置いて褒美を取らす。よければ気に入った 10 人の奴隷も与えよう。」

■ 兄オルッチの腕が切断される

外科医たちが再び召集された。診察した。しかし、兄の腕を切断する以外の手立ては見つけられなかった。私は許可した。兄の腕を犠牲にして、切断させた。手当てをした。私はしゃくりをあげながら大声で泣いた。兄はこう言った。

「どうしてそんなにおいおい泣いているのだ？神意はこの様であった。何ができるだろうか？ありがたいことに私は腕を聖戦で失ったのだ。この幸福で私は十分だ。」

(p26)その冬兄オルッチは完全に健康になった。次の春とともに心が躍ると、私達は 8 隻の船で航海に出た。スペイン岸に着いた。イベリア半島の湾にやって来た。イベリア半島ではグラナダ という名の町がスペインの異教徒の手に再び落ちていた。そこは以前ムスリムの都市であった。スペイン人たちはムスリムたちに熱心に虐待や弾圧を行っていた。とても残酷な異教徒たちである。多くのムスリムが地下に小モスクを建てて、維持していた。スペイン人異教徒たちは全てのモスクを焼き、破壊した。どこかでコーランを唱読するもの、断食を行うもの、礼拝を行うムスリムを見ると、その者の家族もろとも拷問にかけて、生きたまま焼いた。多くの船に一杯のムスリムを私たちは異教徒の手から救った。彼らをアルジェ、チュニスに送った。

イベリア半島の El-Meriye 港近郊にいる際に、7 隻の異教徒の船を見た。そのうちの一隻に追いつき、捕らえた。風は逆風だった。ほかの船は逃げた。捕らえた船は帆船で、インドからの品を運んでいた。私たちはそこからミノルカ島にやってきた。ある村に入った。チュニスからの出発以来 50－60 日が経過していた。ミノルカ島へと出向いて、島内に入った。200 名ほどの pürsilah 異教徒たちに出会った。彼らは泉の上に座り、子羊を串刺しにして回し、bade を飲んでいた。その多くは有頂天になっていた。5－6 群れの子羊を私たちは得た。彼らは異教徒の司令官を私たちのところへよこした。私は彼らがどこに行っただのかを聞いた。司令官はこう言った。

「セニョール。私たちはあなた方がミノルタで行ったことを知っていた。スペインからは私たちのところに 10 隻のガレー船がやって来た。私たちもガレー船が来て、あなた方を攻撃したら、陸から彼らを支援するはずだった。」

これを知ると捕虜たちに二人ずつ足かせをして、船に配置した。ミノルカから出発した。ジェノヴァへの道をとった。4 隻の船と遭遇して、それらも拿捕した。私の名は全ての異教徒の国々に知れ渡った。

コルシカ島での航海の後、兄とともに私たちはミディッリ島へとやって来た。私たちは 7 隻の船を待っていた。「愛国心は信仰心から生じる」というアラブの格言は正しかったよう (p27)だ。故郷にたどり着くと、活きが良い同志を見つけた。全ての親戚や友人たちがやって来た。彼らは状況や近況について尋ねた。7 日 7 晩釜を炊かせて、島中の貧しいものたちに振舞った。割礼をしていない子供たちには割礼をさせた。夫の無い娘たちには結婚させた。気持ちを楽にするために盛大な宴を催した。新しい服を割いて寄付した。家々を回って孤児たちを見つけさせた。夫を失った妻たち、働くほど力の無い老人たち、不具者達、病気の者たちを喜ばせた。Herkeşin hatırcağını okşadık。イスラム戦士の乗組員たちのベルトをソーセージの様に金を取り巻いた。1 アクチャの品に 5 アクチャを受けて売った。そうすれば島の商人たちは儲かって祝福する。ミディッリの人々は私たちの力に、大きな歓待と親切心を示した。沢山の食べ物、果物を運んだ。

「あなたは戦士でいらっしゃる。食べてください。お達者で。」とお願いした。

■ 私たちの海への情熱はあらゆる情熱を越える

私たちの望みは島で越冬することだった。親戚一同に戦利品を振舞った。兄イスハックには沢山の品々とヴェネツィア金貨を与えた。神聖な祈りを行った。ただ、兄オルッチの腕がなくなってしまったのを見ると、非常に悲しんだ。一時オルッチはミディッリに定住して結婚し、多くの子供を持つことを望んだ。だが、この望みはすぐにあきらめた。なぜならば、海への情熱はあらゆる情熱を凌駕したのだ。海を他のものに置き換えることはできない。ある朝、彼はこう言った

「兄弟たちよ、昨晚私は喜ばしい夢を見た。ロードス島で牢にいる時に私の夢に入ってきて、救出の吉報をもたらした白髪の男が、「オルッチよ」といって西に顔を向けた。神よ、お前には西での多くの戦い、偉大な名誉と尊厳が運命づいた！」

ミディッリへは多くの船が往来した。船長たちは船を漕がすための奴隷を探した。私はある船長にこう言った。

「私には 827 人の漕ぎ手がいる。あなた方に売ろう。」

(p28) こうして異教徒たちをオスマン朝の商人の船長たちに打った。幾人かは金貨 500 枚で、幾人かは金貨 300 枚で、幾人かはそれ以下のアクチャで与えた。売った奴隷の税金は私が払った。私は港の指揮官の権限を示した。イスラムのワクフに寄付した。

こうして得たアクチャの半分は消えた。残り半分は兄イスハックと分割した。だが、私たちは金を溜め込むことは好まなかった。儲けの全てを船の改装に費やした。残りは水兵たちに分配した。水兵全員に金貨 90 枚、船長たちには 195 枚を与えた。

水兵たちは飲食のために自分たちのお金は出費できなかった。全ての船で大釜を煮ていて、週に 2 回は肉が出されたからだ。だが、水兵たちはしばしば自分たちの懐の金で食べ、船の料理は好まなかった。水兵たちには冬の間故郷に買えることを許した。アナトリアやルメーリ近郊のものたちが帰った。故郷が遠いものたちは私たちと一緒にミディッリ、で越冬した。この冬の間ミディッリの造船所に 3 隻の船を発注した。1 隻は 25 人漕ぎ、もう 1 隻も 25 人漕ぎになる予定だった。こうして、次の春には私たちの船は 10 隻となった。新しい船のうち 1 隻には私が、もう一隻にはオルッチが乗った。新しい船を神の恩恵によって美しく装飾した。春が近づいてきた時にアナトリアとルメーリで私たちの名声と評判を聞きつけた勇敢な若者たちが群がってミディッリに来始めた。彼らは水兵に登録してもらえるように懇願した。私たちは目にかかった船乗りの若者たちを採用した。私たちは兄イスハックの手に口付けをして、親戚や友人たちに別れを告げ、海に出た。すばらしい季節だった。

■ 貧者たちが私たちの航海に期待している

私たちは道中で 15－16 隻の船を拿捕した。よい船は私たちの船と並べ、よくない船は沈めた。拿捕した船のうちの 5 隻は小麦、2 隻はオリーブオイル、1 隻は象牙が積んであった。他の船にも様々な品が積んであった。その全ての船から計 479 人の女奴隷と、無数の奴隷を得た。私たちは 17 隻の船でチュニスのハルクル・バード港に入った。ミディッリから離れてから 29 日目になっていた。港は私たちを見るためにやってきた人たちで一杯になっていた。大砲を鳴らして人々に挨拶した。

(p29)チュニスの人々が私たちをこれほど好きだった反面、多くの人たちは私たちがもう二度とこの海にやってこないのではないかと心配した。特に貧しい人々が私たちの航海に期待していて、私たちが来る日を指折りしていた。貧しく、必要とする人々に小麦を無料で配布した。他の戦利品は売った。チュニスのスルタンの割り当ても分けて送った。太守への割り当てはヴェネツィアのドゥカート金貨 5000 枚、2 人の処女の女奴隷、4 人のジェノヴァ人奴隷を当てた。娘と少年たちは 15－16 歳で大変美しかった。もし私がこれらを金で売っていたならば大金を得ただろう。チュニスの太守は私たちにすばらしく着飾った馬を贈った。私たちは兄オルッチとともにこの馬に乗って宮廷に出向いた。太守は私たちにこう言った。

「あなた方は私たちの国へ名誉をもたらした。神よ二つの世界において誇らしくあるように！」

太守の前から退出する前に彼らは兄と私の背に一着ずつ毛皮を着せて賞賛した。私たちの家来の水兵たちにも褒美を取らせた。

私たちはチュニスで越冬した。再び春がやってきた。12 隻の船で好ましい時に海に出た。シチリアのある城を制圧した。デリ・メフメット・レイスは、港に停泊している船を捕らえた。船は砂糖を満載していて、650 の木箱分あった。私はデリ・メフメット・レイスにこの品をチュニスに送る任を命じた。翌日、私たちの運はさらに開けた。私たちは 4 隻の船を得たのだが、そのうちの 2 隻はラシャを積んでいたのだった。1 隻は並べた丸太で一杯だった。フランスに運搬中だったのだ。4 隻目の船からは鉛、火薬、弾丸が出てきた。要するに 4 隻はすばらしい戦利品だった。

33 日後、私たちはチュニスに戻った。こんなに沢山のラシャを手に入れたので、船では足で踏む床板にまでラシャを轆いた。全船の分け前に47.5 カンタル相当の砂糖、12 巻のラシャ、125 巻の生地を分配した。私たちが手にした帆柱をスルタン・セリムに送ることに決(p30)めた。柱と一緒に 200 人の奴隷も選んだ。これらをムヒッディン・ピーリー・レイスがイスタンブールのスルタン・セリムに届ける予定だった。ムヒッディン・ピーリー・レイスは、故ケマル・レイスの甥であった。上品で博識な私たちの友人でもあった。王の宮廷でどのように振舞う必要があるのかを良く心得ていた。縁起が良い時に、ピーリー・レイスをチュニスからイスタンブールへと航海に出した。

⁴ 1 カンタル＝44 オッカ

■ スルタンに感謝されて二つの世界で聖徒となった

ムヒッディン・ピーリー・レイスは、6 隻の船でチュニスから出発して 21 日目にイスタンブルに到着した。サライブルヌの前で投錨した。大砲を鳴らしてわれらが王、スルタン・セリムに挨拶した。スルタン・セリムはピーリー・レイスを御前に通した。私が書いた手紙を自ら読むという恩恵を与えた。スルタンは兄オルッチ・レイスと私の聖戦に満足した。ありがたいお手を打って私たちと水兵たちに祈った。

「偉大なる神よ、この世と来世でわが僕オルッチとハイレッディンが誇らしくあるように、剣は鋭く、敵を倒し、海と陸での戦闘に勝つように。常に彼らが勝利するように！」

こうして私たちはスルタンに感謝された。私たちは 2 つの世界を愛した。同胞のピーリー・レイスはスルタンから大きな信頼を得た。⁵10 ケセアクチャの褒美ももらった。ピーリー・レイスの背に着物が着せられた。セリムは私たちからの贈り物を自ら受け取り、**teker taker bakmak suretiyle lutfunu esirgemedi**。……。更にはピーリー・レイスの船に夏の離宮に接岸することを命令したので、現在までどんな船も宮廷の岸へ接岸することは **artık sırtımız yere gelmezdi**。ピーリー・レイスは私たちからの贈り物を 200 人の奴隷異教徒の背に積み、見事な一隊を編成した。200 人の乗組員も金刺繍入りの服で正装して、岸 (p31)に出た。スルタンにデモンストレーションを行った。スルタン・セリムは、水兵全員に金貨 50 枚を与えた。イスタンブルに滞在したものたちの食料と住居の保障を命じた。ムヒッディン・レイスのために別の邸宅を割り当てられた。

スルタン・セリムは船を造船所に移動するように命じた。私たちの船はそこで油を塗られて、欠損部分と欠陥部が修繕され、軍備品が装備された。さらにスルタンの命によって、27 人漕ぎの 2 隻のガレー船が造られ始めた。スルタン・セリムはこのガレー船のうち 1 隻を私に、もう 1 隻を兄オルッチ・レイスに施すことにした。ガレー船の船尾は金の星で金箔が施された。看板にはすばらしい大砲がすえられた。鑄造所から出てきたこれらの大砲は光り輝いていた。ピーリー・レイスは大臣たちも訪問した。私たちからの贈り物をお贈りした。数日中にスルタン・セリムは再びピーリー・レイスを呼び、御前に通した。2 本のダイヤ握りの剣を与えた。**Her biri birer Rum haracı ederdi**。さらに着物、羽冠を与えた。

「レイスよ、私は与えたガレー船のうち 1 隻はハイレッディン・ベイが、もう一隻にはオルッチ・ベイが乗るように。羽冠のひとつはハイレッディン・ベイ、もうひとつはオルッチ・ベイに渡すように。剣のうち一本はハイレッディン・ベイ、もう一本はオルッチ・ベイが帯刀するように。すべての贈り物はスルタンに気に入られた。このように言うように。お前をアッラーにゆだねた。お前たちが勝利するように。Duam berakatım sizinle biledir。何にせよ、必要あるならば私の下に届けるように。」

ピーリー・レイスはスルタンの手紙をもらった。彼は 3 度口付けをして、頭に置いた。7

⁵ 1 ケセ=500 クルシュ

回お辞儀をして挨拶した。スルタン・セリムの神聖な手に口付けして、お暇した。この世の王の御前からすっかり穏やかに、心地よく、望ましく、満ち足りた気分で退出した。彼はスルタン・セリムが私に施したガレー船に乗った。もう一隻のガレー船は後ろに従えた。8 隻の船とともにサライブルヌでスルタンに挨拶した。スルタン・セリムは夏の離宮から私たちの船を眺めていた。この世の王都であるイスタンブルから離れた。チュニスに向かって出発した。

(p32)ピーリー・レイスがイスタンブルにいた時、私と兄は 10 隻の船で海に出た。ジブラルタル海峡、つまり地中海のはしに行き、イベリア半島にたどり着き、宗教上の同胞の一部をさらに救い出して連れてきていた。だが、この時アルジェのベジャール・エの都から大使がやってきた。

「私たちを救ってくれるのならば、あなた方は聖戦の戦士たちの一人になる。スペインの異教徒の圧迫によって私たちは礼拝も、子供たちへのコーラン教育もできなかった。……私たちの件はあなた方の助け次第です。偉大なる神は私たちをあなた方にゆだねた。私たちの王都に来てください。早く私たちを異教徒の弊害から救出してください。」

すべてベジャール・エのために私たちは出発するはずだった。見たところ、ピーリー・レイス (p33) が 8 隻の船でチュニスの海にやって来た。すぐに彼を私たちの船に呼んだ。興奮しながらイスタンブルの状況を探ねた。さらにピーリー・レイスが乗ってきたガレー船を見ると、どうしていいか分からなかった。それほど美しく見事なガレー船だった。スルタンのお恵みということが分かった。私の心は喜びで一杯になった。セリム陛下の神聖なスルタンの手紙を読むと、喜びの気持ちが増した。私の目は涙で一杯になった。スルタンの手紙に 7 回口付けをして頭に置いた。神に感謝の意を捧げた。こうして有力なスルタンの僕であることを神に感謝した。兄オルッチはスルタンが彼に与えたガレー船を見ると、喜びに浸った。この偉大な船を所有できたことについての神の恩恵に祈りを捧げた。

スルタン・セリムはチュニスの太守にも一通のスルタンの手紙を送っていた。スルタンの手紙は私が持って行って、太守に渡した。チュニスの太守はこの世の王の勅令所に 7 回口付けをして頭に置いた後、あけて読んだ。スルタンは以下のように命じた。

「チュニスの太守よ、この私の勅令書が着くことにおいて **mucubince amel eyleyip zinhar hılafından hazenedesin**。私の僕、オルッチとハイレッディン・ベイへのあらゆる援助を惜しんではいけない。」

全てのチュニスの指導者たちが集められた。太守の御前でピーリー・レイスがスルタン・セリムの剣を私の腰につけて、彼が持ってきた着物を私の背に着せた。決意式典となった。シェイフたちは礼拝を行った。この世の王、スルタン・セリムの力を褒め称えた。太守を見ると、……。

「お前と兄オルッチの道は船長の道である。幸せであるように！」

この時以来、ねたみから陰口が始まった。もはや私たちは保護のない無力な海賊ではなかった。この世の王が気に入った僕であるのだ。私たちから逃げ始めた。彼らの国と国土

をスルタン・セリムのものにしてしまうと恐れたのだ。

■ 敵船を追い払った

翌日私と兄オルッチ・レイスはスルタンの施しである新しい船に乗った。27 人漕ぎの舟に 16 門の大砲があった。12 隻の船で海にでた。1 隻の船を拿捕した。中には 25 人の異教徒がいた。船は油と蜜、ロウを積んでいた。漕ぎ手はイベリア半島のムスリム同胞の 4 尾人だった。全員を救出した。デリ・メフメット・レイスの船を一杯にしてチュニスに送った。私はデリ・メフメット・レイスが好きだった。彼は若く、恐れ知らずの男だった。15－20 人の異教徒たちの中に単独で残されても戦い、勝利した。

こうしてアルジェのベジャーイエ港にやってきた。私には 2033 人の快活な水兵、10 隻のガレー船、150 門の大砲、幾千もの漕ぎ手がいた。ベジャーイエの城はスペインの異教徒の手にあった。戦闘を始めた。戦闘は 3 時間半続いた。異教徒の多くが死んだ。この勝利を聞いた 2 万人のアラブ人がベジャーイエにやってきた。彼らは私たちを援助したが、戦闘の状況はよく知らなかった。城に残った一握りの異教徒は私たちに対して 29 日間抵抗した。私たちは町を占領した。包囲する大砲がなかったので城に大きな傷はつけられなかった(p34)た。ミノルカ島から私たちの下に異教徒たちがやってきていることを耳にした。私たちはベジャイルを残してジジェッリに引いた。だが、ミノルカから来る急援軍の進路を見張った。ついに水平線に 10 隻の大きなガレー船を見た。武器を満載していた。ベジャーイエを救出に来たのだった。兄オルッチはこう言った。

「これは私たちへの神の恵みだ。」

水兵は全員口々に預言者への祈りを唱えながら敵船に攻撃した。激しい戦闘だった。10 隻の船を拿捕した。異教徒のうち生き残った 78 人を捕らえて漕ぎ座に繋いだ。

■ スペインとの戦争

10 隻のスペイン船に十字旗を掲げて 500 人の乗組員とともに乗り込んだ。ベジャーイエに舵を取った。ベジャーイエの城にいるスペイン人異教徒は、ミノルカから 10 隻の船が救援に来るのを待っていた。私たちを遠くから見ると、クリスチャンの同胞と勘違いし、とんがり帽子を空に投げて喜びの印を示した。こうして祭りと歓喜の中にある城に接近した。異教徒たちは城門を開け、救援にきた船を出迎えるために海岸に散った。即座に私は乗組員たちを海岸に出した。「アッラー、アッラー」という声が大きく響き渡ると、異教徒たちは崩れ落ちた。私たちは城を占領した。スペイン人たちは「Mayna Sinyor！」と叫んで慈悲を願った。均衡の国々から来た全てのシェイフと kaaidler は私の主権を認めた。こうして私と兄を指揮官に置いた。私は兄オルッチに会うためにジジェッリに戻った。兄オルッチは私の目に口付けをして、私を祝福した。なぜならば、ベジャーイエは極めて重要な城

であったのだ。城では 800 樽の火薬と世界の戦利品を得た。私は特に火薬が気に入った。なぜならば、私たちの火薬は少なくなっていたのだ。チュニスの太守もすでに私たちに火薬(p35)を提供していなかった。私が見たところ、チュニスの太守は私たちに対して日に日に不親切になっている。私たちは自分たちで何とかすることに決めた。このため、異国に私たちのための国家を創ることが必要となった。

スペインでは、私たちがベジャーイエを征服した報を開くと、異教徒は大混乱になって、みな絶望と喪の海に沈んだ。⁶スペイン王カルロスは、すぐにベジャーイエをトルコ人から奪って、スペイン人捕虜を救い出せと命令した。他方、ベジャーイエ国の国民たちを見ると、トルコ人たちは異教徒たちを墮落させることに長けていた。極めて公平で、アッラーを恐れる国であった。私と兄がアルジェのジジェッリにいる時、国の沢山の都市から代表団がやってきた。これらのうち最も重要なのは国の首都であるアルジェからやってきた代表団であった。スペイン人の弾圧に辟易していたアルジェの人々は、私たちの救援を望んでいた。兄オルッチは 500 人の乗組員とともにアルジェに向かって出発した。私をジジェッリに残した。

兄オルッチがアルジェを征服した頃、私もジジェッリから旅立って、チュニスに行った。チュニスの太守はもはや私たちに完全に敵意を示していた。だが、私を 10 隻の船とともに見ると、恐れをなした。外面上は親切であった。Vafır özürler sizinle diledir。

「私たちムスリムの戦いにあなたはどのようにして火薬を送らないのですか？」と私は言った。

「私はあなた方が私の火薬を望んでいるとの報は受けていない。私の部下が知らせなかったのだ。その部下を処罰することにしよう。」

彼は実際に部下を処罰した。だが、この件の原因は全く別の違うことだった。しかしながら、私はそのことを太守に面と向かっては追求しなかった。信頼して聞き入れた。私は太守と並んでチュニスをめぐった後、港に戻った。私の横には長兄イスハック・レイス、ムスリフッディン・レイス、コルドール・レイス、デリ・メフメット・レイスと他の有名な船長たちがいた。私は東地中海、つまりキプロス側に進んで狩を楽しみ、その後アルジェに戻るために船長たちに命令を下した。私は兄イスハック・ベイとともにアルジェに戻った。船長たちは 1 隻の船で東に漕ぎ出した。しばらく後にキプロスとエジプトの間でスルタンの艦隊と遭遇した。乗組員たちは感極まった。というのも、トルコ艦隊が海面を覆っていたのだ。ムスリフッディン・レイスはすぐに艦隊に接近した。海軍提督ジャフェル・ベイの前に出た。スルタン・セリムの海軍提督はこう言った。

「スルタンはエジプト遠征に出ている。私たちからの連絡はなかったか？ どうしてスルタンの艦隊に参加しに来なかった？」

ムスリフッディン・レイスは大変に頭の切れる男であったのでこう言った

「役人の方々よ、断言しますがスルタンへの奉仕を無視したわけではないのです。私たち

⁶ スペイン王でありドイツ皇帝カール。バルバロス兄弟の最大の敵、ライバルになる。

は異なる気候のところでした。知らせは来なかったです。もし使いを一人よこしていたならば、あなた方の命令は私たちに直ちに届いたでしょう。国家への奉仕は私たちの海における最大の善行であります。」

海軍提督はムスリフッディン・レイスのこの賢い発言に大層喜んだ。

「あなたに神のご加護を。」と言った。

ムスリフッディン・レイスは、7 隻の船でスルタンの艦隊の後に続いた。⁷全船一緒にイスケンデリエ港に入った。この時スルタン・セリムはエジプトを遠征中でカイロにいた。艦隊がやって来たことを聞くと直ちにこの港に入って、スルタンの艦隊を視察した。この時、ムスリフッディン・レイスに好意を示して、大勢の兵士、大砲、武器を与えた。これらを得たムスリフッディン・レイスはアルジェに戻った。

■ オルッチ・レイスの勝利

(p37)ムスリフッディン・レイスはエジプト遠征を 2 ヶ月半続けた。兄オルッチ・レイスは船の帰還とスルタン・セリムが送った兵士と大砲を見ると、一層喜んだ。兄オルッチがアルジェにいた時に私はジジェリにいた。兄はアルジェの大部分を手にしていて。海岸で多くの城を占有していたスペイン人たちはうろたえた。彼らは 40 隻の船を準備した。チュニスのハルクル・バード港にやってきて投錨した。しかし私たちの誰をも発見できず、骨折り損で戻っていった。そしてアルジェ港にやってきた。彼らの目的はアルジェの最大の都市であるこの港を兄オルッチから奪うことだった。

兄オルッチは *hamiyet kuşandığını dört elle kuşandı*。朝まで頭を地面に擦り付けたままだった。神に支援と勝利を祈った。朝の太陽が昇った時に乗組員たちを集めた。アラブ、ベルベリ、イベリア半島から来た多くの兵士がいた。だがこれらはトルコ人兵士の様には戦いを知らず、圧迫されると敵から後ずさりしてしまった。全体では 5, 6 千人の兵士がいた。敵は海岸に 1 万人近い兵士を動員して、40 隻の船にも兵士がいた。

兄オルッチは軍旗を城の塔に立てさせた。異教徒へ攻撃する準備をした。夜、暗くなると 3, 4 千人の兵士とともにアルジェの城の門から密かに出た。山を迂回してスペイン人たちの背後に降りた。暴風の吹き荒れる真っ暗な夜だった。即座に、偉大なる神は戦う僕たちを援助した。スペイン人異教徒たちは暴風と暗闇の恐怖の中において、オルッチ・レイスの動きを知ることができなかった。戦士オルッチは突如敵に攻撃を仕掛けた。異教徒たちは何かが飛び出してくるまで油断しきっていた。全員剣で切りつけられた。一方ではガチョウの卵大の雹が降っていた。スペイン人たちは混乱してお互いにののしりあい始め、船の中にいるだけの兵士を陸に注いだ。2、3 万人の兵士がいた。しかし彼らは闇で周囲が見えなかった。オルッチ・レイスは敵の全体を制圧し続けていた。激しい戦闘だった。最後 (p38)に敵は隠れた。夜明けから朝にかけて城から 2000 人の兵士が更に出てきた。ある側

⁷ 1517 年 3 月 15 日

から彼らはスペイン人たちに向かって刀をふるい始めた。異教徒たちは完全に敗れた。残ったものたちは完全に捕虜にされた。オルッチ・レイスは捕虜を数えた。2700 人の異教徒が捕虜となっていた。こちら側から出た戦死者は 300 人程であった。全員儀式で埋葬された。イスラムの戦士が勝利したのだ。トルコ旗を掲げた。⁸最大の異教徒の国であるスペインは、兄オルッチに打ち負かされた。カルロス王は面目を失った。偉大なる神よ、異教徒の顔を常に暗いものにしていて下さい。Amin, bi- hürmeti seyyidi'l- Mürselin !

兄オルッチは大勝利を手紙で私に知らせた。私が勝利の報を受けた時、隣にはイスハックもいた。私たちは 10 隻の船で海に出る準備をした。アルジェにいる兄オルッチを援助しに行った。しかし、その必要はなかった。私たちは地中海に出て 16 隻の異教徒の船を拿捕した。これらは火薬、鉛、材木、タール、油、米、小麦を積んだ船だった。海に出て 29 日目に戻ってジジェリ港に停泊した。船 1 隻に満載の小麦を貧者に分け与えた。兄オルッチから一通の手紙が来た。裏切り者のアラブ人のシェイフを捕らえるための指令だった。直ちに 500 人の乗組員たちとともに山に登った。200 人の異教徒たちを捕らえた。首を切らせた。代わりに他のシェイフを任命した。20 隻あまりの船で海に出た。頃合にベジャイル港に入った。兄オルッチと会った。長兄イスハック・ベイも私たちと一緒にいた。長いこと楽しい会話をした。こうして冬を過ごした。

次の春がやってきて、辺りはチューリップが咲き乱れた。船は港から出て行って、海上で活動を始めた。アルジェの国にはテネス (Tenés) という都市があって、あるアラブ人首 (p39) 長の政権が続いていた。しかし、この政権は不和を欠かすことがなく、次々に血が流されていて、住民たちは怯えていた。スペインの異教徒はこの町にも干渉していた。兄オルッチ。ベイはこの町も統治下に置きたがっていた。この時スペイン王カルロスはテネスに 10 隻の船を派遣していた。彼はテネスの首長を保護し、まさにムスリムの民を苦しめていた。テネスの都にはスルタンの保護を受けるスペイン部隊がいた。彼らは住民の身包みをはぎ、価値があれば何でも船に積んでスペインに送っていた。

イスハックとオルッチ・レイスは、アルジェの都に留まった。私は 12 隻の船でデリス (Delis) へやって来た。港には 4 席のスペイン船が停泊していた。私たちを見ると、賢いものは撤退した。船を残して籠城した。私たちは彼らの船の大砲、銃を手に入れた。こうして混乱している時に食料も持たずに逃亡し始めたのだ。15000 人の乗組員とともに上陸した。私は城の前に行った。激しい抵抗と戦闘を予想していたが、城門が開かれていることを知った。幾百人かのムスリムが私たちを出迎えた。

「よくいらっしやいました！スペインの異教徒どもは彼らと同盟していた私たちのベイとともに夜の間に城から出て行った。多分 1 万人いた。みなベイの家来たちだった。都に残

⁸ 1517 年 9 月 30 日アルジェの勝利。この戦争でドン・ディエゴ・デ・ヴェラの総指揮下の 40 隻の軍艦、140 隻の輸送船と 15000 人の陸の兵士によって構成されたスペインの大軍は、オルッチ・レイスに大敗した。スペインはヨーロッパ最大の陸と海の国だった。

ったものはアルジェの国であなたと兄のスルタン・オルッチ以外の統治知らないものどもです。」

この報告を受けると直ちに 2 千人の戦士を送り出した。逃げたものたちの追跡に派遣したのだ。戦士たちは 2 日目に逃亡者たちを捕らえた。神意を得て、攻撃した。神の愛により、こう大声で叫んだ。

「異教徒どもよ、どこへ行くのだ？」

「私たちがお前たちのためには救いの手を持ち合わせていないことを知らないのか？」

銃撃の後は剣と半月刀に頼った。銃撃のよって雀のように倒れた敵は剣や半月刀には頼らなかった。350 人の異教徒が捕虜にされた。こちら側でも 70－80 人が死んだ。Tanrı makamlarını Cennet eyle!

(p40)私は乗組員たちをテネス城の前で出迎えた。戦死した同胞たちを悼んだ。私たちは勝利を祝った。しばらくはペリスに留まった。一番の新入りも 500 枚の金貨を手に入れた。私たちの戦利品は竿ばかり 150 杯分の唐辛子、75 杯分のシナモン、25 万 1 千アルシュンの生地、同じだけの絹糸と絹、竿ばかり 400 杯分の蜜、600 杯分の蜜ロウ、1000 玉の毛織物、多くの軍事品があった。私はテネスにいくらかの水を残した。折を見て 16 隻の戦艦で海に出た。私たちはアルジェにやって来た。オルッチとイスハック・レイスと抱き合った。戦士オルッチ・ベイはこのように祝い、祈った。

「お前の戦いはすばらしかった！」

テネスから逃げたトレムセンの太守の甥だった。私たちが与えた教訓は十分ではなかった。

「スペイン王よ、ご機嫌いかがですか。Benim ahımı bu Türkler'de komaz！」という風に話したことが耳に入った。

私たちは、この男からイスラムの愛が生じたことを知った。思うに、スペインの異教徒はアルジェの都を私たちから奪う力があり、そのために彼がアルジェの太守をするはずだった。これは幻とともに終わった。しばらくして私は、トレムセンの太守の甥が周囲に集まったアラブ人とスペイン人とともに再びテネスの町を手中にしたことを知った。スペイン人異教徒の弾圧と弊害から私たちが救ったテネスの人々は再びベイとして彼を受け入れた。

兄オルッチはこの知らせを聞いて激怒した。幸せな気分だった人々は興奮した。オルッチは今回こそ自ら出向いて敵に身分をわきまえさせたがった。アルジェのウラマーを集めた。

「皆さん、我々の最大の敵であるスペインの異教徒たちと一緒にあってムスリムに攻撃し、スペイン王に宣誓し、私たちの忠告に不誠実な対応をしたテネスのベイの結末はどうなるか？イスラムのこの件における教えはどうなっているか？」

(p41)全てのウラマーが口を揃えて言った。

「ムスリムとして義務があり、彼の命と財産は保障されない。」

そしてこれをフェトバとして書いて、兄オルッチに渡した。オルッチ・レイスは私と長

男イスハックに別れを告げた。彼はアルジェからテネスに行った。Tenes ahalisi baktı ki gaziler reisi yaklaşır, hal yamandır。トレムセンの太守の甥であるベイたちを縛って、オルッチ・レイスに引き渡した。

■ 裏切り者の首を切った

「あなたは王で、私たちは僕です。私たちは謝罪し、あなたは許すのです！」と彼らは言った。

更にこのようにして200人もの人々が話した。兄オルッチはとても哀れみ深い男だった。彼は賛辞を嫌って、施しと恩寵を好む、心豊かな戦士であった。テネスの人々を助けた。ベイたちを自分の前に連れてこさせた。

「おい、下劣な奴よ！お前の不道德な心は人々に目撃され、耳にされたこのうちに入っているのか？私についてお前は「私はあんな海賊は気にかけていない。私はスペイン王の臣民なのだ。」と言ったそうだな。やい、神に呪われし者よ、お前が従っている王が大勢のムスリムを剣で切りつけ、イベリア半島に苦しみを与えたことをお前は知らないのか？私たちは海賊ではない。ありがたいことに、聖戦の戦士なのだ。私たちは信仰の道で戦うのだ。」

そして、直ちに死刑執行人に指図して反逆者の首を切らせた。さらに幾人かのアラブ人を自分の前に呼びつけた。

「この神に呪われたものは、あなたのところに来る時には縛ってつれてこなくてはならなかった。私に齒向かったものにこうしたことをすることは愚かなことではない。あなたは私に太守として宣誓をしていないのか？あなたはこの宣誓をどう曲げるのか？」

オルッチは彼らの首も切らせた。テネスの人々については、結末は情け深かった。彼らは全員オルッチ・レイスに忠誠の誓いをした。それ以外の者は彼の統治を認めることを宣誓した。兄オルッチは全ての反乱がトレムセンから起きていることを知っていた。トレム(p41)センはアルジェ国の最も西にあって、モロッコ国境に近い大きな町だった。とても大きな王朝がそこで統治を続けていた。

■ オルッチ・レイスの戦死

だが、このトレムセンの太守もスペイン人異教徒の手によって力が弱っていた。国民はスペイン人と、太守の両方から迫害を受けた。長い間トレムセンの人々はアルジェにやってきてオルッチの邸宅内でひれ伏し、正義を望んでいた。兄オルッチはトレムセンを取ることを決めていた。しかしトレムセンとても遠かった。彼はモロッコのすぐ近くにいたのだ。陸にいたのだ。船まではいけなかった。スルタンにはスペインとアラブ人の大勢の知人がいた。トレムセンの都はアルジェ最大の都市だった。これらを征服するのは困難な仕事だった。だが、トレムセンを征服しない限りはアルジェの国の静寂と平安は得られなか

った。ちょうどこの時にアルジェの民衆が立ち上がった。太守は逃げ出した。民衆はオルッチに代表団を送って、彼を太守として認めることを知らせた。オルッチ・レイスは大喜びした。こうして戦うことなく一国を手に入れたことに喜んだ。

トレムセンがオルッチを太守に認めたことは、スペインに大きな混乱を沸き起こさせた。スペインのアフリカにおける最高司令官はバフランの都に住んでいた。バフランはアルジェの西にある、スペインと向かい合う大きな港であった。とても強固な城があった。長年兵士がこの城を守っていた。トレムセンはバフランのスペイン人たちの監視と弾圧下にあった。兄オルッチはトレムセンを支配すると、バフランとの全ての関係を切ることを命じた。バフランのスペイン人の司令官は多くの兵士を持っていた、しかし、またもやスペインからの救助を期待した。兄オルッチはトレムセンで越冬することにした。彼の下には4千人の兵士がいた。だが、冬の間中アルジェのように新しく征服された城を無人のままに(p43)しておくことは承知しなかった。彼がアルジェの都を失うのならば、それはアルジェ国全てを失うということだった。彼は 300 人の兵士をアルジェに送った。⁹彼自身は 1000 人の兵士とともにトレムセンに留まっていた。

兄の目標は、春にトレムセンからバフランまで進軍することだった。兄がトレムセンにいた時、私はアルジェにいた。3000 人の水兵がやってきた。¹⁰兄は彼らとともに私に 150yuk アクチェも送った。

オルッチはとトレムセンにおいてはスペイン人だけではなく、都から逃げた太守の脅威下にもあった。

太守の周囲には大勢の略奪者が集まった。彼らは好機と見たのであった。一方ではバフランのスペイン人異教徒に度々手紙を書いて、救いを求めている

「私はトルコ人海賊のお世話になった。1 アクチェとして彼らから救い出せなかった。私たちの王の力と偉大さは一体どこにあるのだろうか？三人の偉大な海賊のたぐいには及ばないでしょう？」と言った。

バフランの司令官はトレムセンの太守に金貨 2 万枚を送った。大勢の兵士を集めたと言った。春には彼もバフランから出て、スペインとアラブ人の兵士がトレムセンの兄に向かって進軍する予定だった。トレムセンの太守は様々な約束によってベルベリから 2 万人の兵を集めた。バフランにも向かった。彼らの先頭にはバフランの司令官がいた。彼は大層自尊心の高い威張り腐った畜生であった。兄オルッチはこれ程の力には明らかに抵抗の可(p44)能性がなかった。都市が空になると、城に逃げた。異教徒がトレムセンの都に入り、思いも寄らぬ背徳好意を行った。城も包囲され始めた。

私はアルジェの都にいた。トレムセンで民衆が悪い状況に陥ったことを知った。1000 人

⁹ トレムセン - アルジェ間の距離は 450 k m。バフランはトレムセンから 100 k m 北東にある。

¹⁰ 今日の購買力換算で 1 億 8000 万ドル程度

の水兵と 2000 人のアラブ人騎士を備えた。私は兄イスハックからの命令を兵士に下した。2, 3 日の行程を一日でこなしてオルッチ・レイスの救出に到達するのだと言った。イスケンデルの部下もイスハック・レイスとともにいた。兄オルッチは兄イスハックの到着を知ると、しばらく後に合流するためにトレムセンの城から出た。城はトレムセンのスルタンの手中に落ちた。オルッチ・レイスとイスハックは合流した。兄オルッチはトレムセンを再び取るための手立てを考え始めた。トレムセンのスルタンは長年の間王朝支配を続けている王朝の最後の統治者であった。彼は一時アルジェ全土を統治していた。兄オルッチはこうした一つの王朝の王位と王冠を奪うことは望まなかった。スペイン人たちは協力せず、私たちの崇高な支配を受け入れることが条件だった。この条件を受け入れない場合には、私たちはスルタンに王位喪失を強要した。

兄オルッチは 2000 人の水兵とともに再びトレムセン戦線にやって来た。10000 人以上のスペイン人とアラブ人に向かって出撃して、3 時間半の間激しい戦闘を行った。剣は赤い血に染まった。異教徒の多くは最後の酒を飲んだ。だが、300－400 人は生き残った。全員捕虜にされてアルジェに送られた。

スペイン王カルロスは、バフランの知事に勅令を出した。

「もしもお前の首が必要ならば、オルッチ・レイス以外の全てのトルコ人の首を切れ。オルッチ・レイスは生きたままスペインに送りなさい。私こそが彼をどのような死でもって殺すのかを知っているの。」と言っていた。

王のこの勅令のためにバフランの知事は 3－4 万人で兄オルッチに向かって進軍した。まる 3 ヶ月戦った。だが、兄は降服しなかった。知事は司令官たちを招集してこう言った。

「このトルコ人はかなり信心深い国民であり、死んでも降参しない。この城の前でいつま(p45)で待つことができるか？こちらへ来い。トルコ人に大使を派遣しよう。彼らが武器を持って城を明け渡して行くように。だが、食料が尽きたならば、これを受け入れる。まだ尽きていなければ、最後の一人が死ぬまで彼らは武器を捨てぬ！」

翌朝、スペインの使節がオルッチ・レイスの前に出た。兄オルッチは水兵たちにこのように命じた。

「あきれてものも言えない。使節の言うことを聞いてみる。」

水兵たちは言った。

「何としても生きることです。死ぬよりましだ。あなたは私より良く知っている。」

オルッチは死路を受け渡すことに同意した。異教徒たちは凄く喜んだ。しかし、目標が彼であったので、異教徒たちは城からオルッチたちが出てくると剣を振るって一握りのトルコ人を殺した。約束を守る心積もりは微塵もなかった。何故ならば、トルコ人たちを生かしたことを知ったならば、カルロス王はバフランの知事となる卑劣間の首を切らせたはずだから。

オルッチ・レイスは、大勢の負傷者と貧乏人、何日も眠らずに武装を解いた一握りの水兵とともに城から出て行った。一日行程も行く前に後ろから大勢の異教徒が追いついた。

「お前たちの武器を私たちに渡せ。無事に出て行くので十分だろう？」

オルッチ・レイスはこう言った。

「武器を渡すよりは死のほうがましだ。死が何であれ、私は恐れぬ。人は一度は死ぬ。しかし名は残るのだ。」

希望のない戦いが始まった。水兵たちは逃げ、異教徒たちが追跡した。異教徒が追いつくと、兄オルッチは戦いを仕掛けたが、一戦ごとに数名の水兵が戦死していった。実際、水兵は全部で 340 人いた。ついにオルッチ・レイスはある川に差し掛かった。水兵の半分が橋を越えなかった時にスペイン人が追いついた。橋を落とそうと準備していた兄は、水兵の叫び声に耐えられなかった。彼は水兵全員を父が子供を愛すのと同じように愛していた(p46)た。彼は引き返した。Askerlik ve tedbir onu icap ettirirdi ki, オルッチよ、あなたの傍らにいる水兵とともにアルジェに戻ろう。その後に戻ってきて仲間の恨みを晴らそう。だが、オルッチ・レイスに向かって水兵たちは懇願した。

「¹¹Baba よ、baba は何が可能でも、息子たちの剣の下に残り逃げてください。」

オルッチ・レイスは死を後ろに向かって渡った。異教徒たちが海に飛び込み、剣が揺れ始めた。だが、水兵たちは弱っていて、何人かは剣を持つ力もなかった。アフリカの燃え盛る日であった。乾燥した唇はパリパリに裂けていた。

オルッチ・レイスにはおそらく大勢が一斉に切りつけた。兄は戦死した。彼の神聖な頭は切り取られて、スペイン王に送られた。長兄イスハックも数ヶ月前に Kal'aul kila で戦死していた。私は 4 人兄弟だったが、3 人の戦死を間の当たりにした。神意が何であれ、偉大なる神は私にだけ戦死の運命を命じなかった。つまり、兄弟たちは私よりも幸せな神の僕なのであった。神よ、3 人に冥福を！ Amin, bi- hürmeti seyyidi'l- Mürselin !

兄の戦死の報がアルジェに届いた時、私はすでにある目的のために人生を決意していた。それは兄の道を進み、アフリカと地中海を異教徒たちにとって居心地悪くすることだった。この目標以外に、兄の後私の人生に重要なことは何が残っているのだろうか？だが、弱さを見せる時ではなかった。泣く時間すらなかった。私たちはアフリカで一握りのトルコ人をたちまちに排除できた。私は沢山の地位を得た。しかし敵の町ではアルジェの町まで行く兵士は見つけられなかった。その冬は準備で終わった。寝る間際まで何かしらしていたので、兄のことは頭に上らなかった。だが、私の夢に入ると、沢山の心配事が沸きおき、それを忘れるために私は仕事に忙殺された。全ての船を集めて、武器弾薬を吟味して刷新した。スペイン人異教徒はこう言っていた。

「神に感謝せよ。私たちは害悪の拡大から救われたのだ。今、害悪の縮小を視野に入れて(p47)早急に仕事を完遂しようではないか。そうすれば蛇が大きくなって竜が私たちを殺すだろう。」

スペイン王カルロスから使者がやって来た。彼は私にこう言った

¹¹ 共和制の時代までトルコ海兵は将校を”beybaba”と呼んでいて、この様に呼ぶのが伝統的であった。60 歳のある海兵卒と、口ひげを生やした少尉をこう呼んだ。

「お前の兄は死んだ。異教徒たちの幾多の剣で切りつけられて、手足をもぎ取られた。兄がいなければ、お前が誰であろうとも、キリスト教徒の最も有力な統治者たる私へお前は反抗するだろうか？何か行うことに希望が持てるだろうか？船と水兵をつれてアルジェから出て行け。もう二度とアフリカに足を踏み入れるな。これは私の最後の恩恵である。近いうちに私が海一杯の船を派遣することは確実だ。お前をそこで見つけて捕らえたならば、結末は恐ろしいことになるぞ！」

私はアルジェのスルタンだった。仮に私が偉大なるスルトンの無用な僕で、単純なベイレルベイであったとしても、ヨーロッパにおける私の名前は「アルジェの王」であった。スペイン王が私にこのような伝言をしたことははなはだ身分をわきまぬことだった。極めて重要な手紙を書いて王に送った。王は返事を受けると、アルジェに海に列を成した艦隊でやって来た。兵士が上陸した。ところが私は十分に冬の備えをしていて、このような事態を想定していた。スペイン人は多大な損失をこうむった。2 万人以上の異教徒が寒さで弱った。700－800 人は「Mayna Sinyor!」と言って私たちに降伏した。残りは船に飛び乗った。名誉が傷つき、恥をかいて早々に立ち去って行った。アフリカではトルコ人の名声が高まり、私たちの名はヨーロッパ中に知れ渡った。アルジェでは計 13000 人の異教徒の捕虜が集まった。これらのうちの 24 人は、西ヨーロッパ人が「海軍将校」と言っている偉い船長であった。彼らを捕らえるのも一大事であった。彼らは一度鎖をはずして逃げようとしたが、何とか捕らえた。彼らを激しく殴りつけた。捕虜のうち 300 人が死んだ。

スルタン・セリムの手紙に名を硬貨に刻印させて式典を行わせた。私の目標はこれであった。つまりは全アフリカの王以外の名は硬貨に刻印させないのだ。アフリカでのアラブ人最大の統治者はモロッコのスルタンだった。モロッコのスルタンを制圧せずには、アフリカでのトルコ人の支配を完成させる可能性はなかった。ある日、アルジェでアフリカのアラブ人エミールの何人かを私の前に通した。私は彼らにこう言った

「この世の王たるスルタン・セリムは、今、同時に預言者のカリフでもある。あなたが何であれ、同時にイスラムの国王たるこの世の王を差し置いてモロッコの太守の名の下に儀式を行って硬貨を刻印できるのか？さあ、スルトンの名を刻印するのだ。お前たちの未来、成功、国はこの道にあるのだ。さもなければ、この道から外れた哀れ者たちである！」

スルタン・セリムに、信用できるものたちの中からハジュ・ヒュセイン・アーを送ったか？ヒュセイン・アーは、21 日間の航海の後この世の真珠、イスタンブルについた。海岸の別荘でスルタン・セリムに受け入れられた。彼に粗品を贈った。この贈り物は 20 人の西ヨーロッパ人の男奴隷によって運ばれた。スルタンはこの贈り物にわざわざ身をかがめて喜んだ。彼はヒュセイン・アーに着物を着せた。船長たちは個別の宿舍を割り当てて泊まらせた。ヒュセイン・アーはスルトンの後は国の高官たちに通された。そこで私の粗品を贈った。この世の王都イスタンブルに 41 日間滞在した。水兵たちは 41 日間名誉ある王都を巡って楽しんだ。とうとう出発した。スルタン・セリムはアルジェの船を見るために海岸の別荘への表敬訪問を命じた。私の船は全ての大砲を鳴らして名誉ある偉大なる王に別

れを告げた。ハジュ・ヒュセイン・アーは別れの挨拶のためにスルタン・セリムの御前に出向いた。7回地に口付けして、スルタンを敬った。スルタンはヒュセイン・アーに一通のスルタンの勅令書を与えた。彼の手によって書かれた勅令書は私をアルジェのバイレルベイに任命していた。こうして私は名誉ある国のバイレルベイとなった。私に渡すためにヒュセイン・アーには宝石の付いた剣、金糸入りの着物、バイレルベイの軍旗が与えられた。スルタンはヒュセイン・アーにこう言った。

「レイスよ、この剣をハイレッディン・ベイに届け、名誉と品位を呈するように。ハイレッディン・ベイに着物を着て、軍旗を決してそばからはなさずに勝利の聖戦を行え。私の(p49)祈りは全て **berakatı sizinle bile**dir。神よ、アルジェの戦士全員の顔を直ちに 2 つの世界で清めたまえ。Amin, bi- hürmeti seyyidi'l- Mürselin !」

ヒュセイン・アーは、イスタンブルから出発して 8 日目にモラの南のコロンに港に着いて停泊した。港には 8 隻のヴェネツィア船と無数のトルコ船が停泊していた。ヒュセイン・アーは、ヴェネツィア船の海軍将校に丁寧な訪問を行った。彼は海軍将校にこう言った

「もはやアルジェのほかはスルタン・セリムの国である。ハイレッディン・パシヤはオスマン朝のバイレルベイである。私たちの歓待もスルタンの艦隊の一部なのだ。イスタンブルでどんなことが命令されようとも、私たちはそれによって行動する。あなた方がスルタンの友人ならば、アルジェの船を恐れるな。敵ならば、私たちは地中海をあなた方の居心地の悪い場所にする。」

ヒュセイン・アーはコロンから出発して 8 日目にアルジェにやって来た。こうしてイスタンブル - アルジェ間の道を 16 日かけた。私はデルハル・ヒュセイン・アーと、イスタンブルから戻った船長たちを呼んだ。私はスルタンの施し品をうやうやしく受け取った。口付けをして傍らに置いた。剣を帯刀して、着物に袖を通した。スルタン・セリムの名誉ある旗を自分の傍らの高いところに掲げさせた。私はほっとした。もはやスペイン人異教徒ですら私には匹敵しない。なぜならば、私の背後にはスルタン・セリムのようなこの世の統治者がいたからだ。私が何を望もうとも、スルタンの恩恵を私から妨げることはできなかった。夜に盛大な宴を開いた。チップを配って、娯楽を尽くすよう命令した。ヒュセイン・アーは私の望み以上に、そして希望以上に彼の任務をこなした。私は彼をアルジェで高い地位につけ、褒美をとらせた。

私たちの主な敵はスペイン人異教徒だった。これについては何の疑いもなかった。ジェノヴァのような他の異教徒国とも私たちは交戦下にあった。だが、一方では私たちのアルジェへの定住から力を得たアルジェ、チュニス、モロッコの統治者と王国へも戦わざるをえなかった。モロッコの大きな王朝であるモロッコのスルタンは統治を続けていたが、これは大きな国だった。しかし、近日内戦に突入して、秩序が崩壊した。北アフリカではモ(p50)ロッコ以外に重要な国はなかった。チュニスとトレムセンで統治を続けるハフシとアブドゥルバードゥは昔からの重要性を完全に失った。彼らは背後をスペイン異教徒に頼って、私たちとはひそかに、もしくは大胆に戦う道を選んだ。私たちがチャンスあり次第彼

らを始末することを彼らは知っていた。その訳は私が説明しよう

私たちは東地中海から西地中海に来ると、まずはチュニスに上陸してハフシ・スルタンと相互理解した。私たちのお陰でチュヌスの人々は金持ちになった。長い間秩序を失っていたチュニスの町は活気付き、余裕と贅沢に浸り始めた。チュニスのハフシ・スルタンは、私たちお陰でスペインとジェノヴァの圧迫から救われて、また私たちが贈ったもので国庫を満たした。私たちは彼よりも幸福で、よく神を知っていて、国にも品にも私たちの目が光った。そうでなければ、私たちがこれほどのチャンスを掴んだ時、私たちが望めば彼を排除する力があつた。そして、私たちがこの状況下にあつた時に、私たちはアルジェを征服し、チュニスをより大きな国にして、最有力キリスト教国家であるスペインとの情け容赦ない戦いに取り掛かった。もしムスリムが要求すれば、この容赦なき戦いにおいてチュニスの太守は私たちに援助するように。だが、チュニスの太守はオスマン朝の庇護下には入らずに、スルタン・セリムの **tabaası olmamızdan** もっと驚いた。彼はオスマン朝がこの世の王朝であることを知っていた。スルタン・セリムは2、3年のうちに 100 あるチュニスの国の大半を征服した。スルタン・セリムは貧しき国にも目を注いでいるのだろう。知らずにやって来ると、スルタンのベイレルベイつまりはチュヌスのスルタンの国よりもゆつたりした国と軍隊である、大勢のサンジャクベイがいた。スルタン・セリムのベイレルベイであつた私は、ヨーロッパの大半を支配するスペイン王カルロスを再三に渡って負かした。

このため、チュニスのスルタンと私たちの距離はどんどん開いた。単独では私たちに太刀打ちできぬことを悟ったチュニスのスルタンはスペインからの援助を求める一方、他方(p51)では土着のエミールを私たちに反抗するように駆り立てていた。駆り立てたものたちの頭にはトレムセン・アブドゥルバードウ王朝から降りた統治者もいた。この統治者は私に従っていた。だが、密かにスペインとの関係を構築することを躊躇しなかつた。

私はチュニスの太守がトレムセンのベイに書いた手紙を入手した。この手紙の要点をかいつまむと

「ハイレッディン・パシャと呼ばれる **izbandut** は兄オルッチよりも更に深刻な災いである。更に、今彼はスルタン・セリムに援助を仰いでいる。そのためにうぬぼれることに留まりがない。スペインを含めて、彼に匹敵するものはこの世に存在しない。スルタン・セリムはハイレッディンを家来だと考えてベイレルベイとパシャの称号と、宝石をあしらった剣と着物、そして旗を与えた。ハイレッディンはアナトリアから続く人員と物資の援助を受けている。用心すべきなのはここなのだ。協力してアフリカから一人残らずトルコ人を排除しよう。北アフリカに彼らが足を踏み入れてから 10 年がたち、トルコ人たちは今私たち全員に対して主人顔をしている。」

■ オスマン朝の領土が奪われたことは誰も聞いたことがない

全ての権力は偉大なるアッラーの手にあった。アッラーは祈ることを愛し、求めることを軽蔑する。チュニスの太守は私たちの宗教のこの心遣いを気にしていなかった。勿論大きな欠点があるので、神に軽蔑されていた。今、私がアルジェを手に入れることはこの世のどんな権力の範囲内にはなかった。なぜならば国は私のものではなく、スルタン・セリムのものであったのだから。今までにオスマン朝が国を取られることは誰も考えなかった。事実この国は中心にあった。誰もが現実を理解することにおいては愚かさを示し、頭を最大の困難に包み込む運命であった。神は私たちを愛していた。国へ私たちがもたらした神の恩恵の価値を理解していた。広いアルジェのエミール、一族をひとつの場所、ひとつの統治下に集めた。商業は私たちが来る前の数倍に膨れた。ムスリムはもはやスペイン人の(p52)弾圧から解放された。自由に、頭をまっすぐにして生活していた。¹²なぜならば、この世の最大の統治者は神なのであった。

これとともに幾つかの種族は激動と誘惑に取り付かれた。私は彼らのところに歩兵 6000 人と騎兵 6000 人を送った。私の戦士たちは警告を行う形で反逆者たちを罰させた。トレムセンでもかすかな抵抗があった。モロッコの王もトレムセンの件に対応していた。なぜならばトレムセンはモロッコの隣に位置していたからだ。トレムセンのアブドゥルバードゥ王家の中の紛争も国民の平安をめちやめちやにして、スペイン異教徒のパンに油を差し出した。この王朝のエミールであるメスウドはアルジェにやって来て、長兄に対する私の救いを求めた。私はメスウドのために 3000 人の騎兵と 1000 人の歩兵を加えてトレムセンに送った。なぜならば、トレムセンの太守が私に反抗して、あることないことを言っていることをスパイが私に知らせたのだった。彼をスペインの害悪から救い、この恩知らずに限度をわからせてやる必要があった。スルタンのもう一人の兄弟、エミール・アブドッラーはバフランに逃げてスペインからの助けを求めた。

■ トレムセンの報告書

メスウド兄弟は、ハイレッディン・パシャの **vafir** 兵とともにそこにやって来て、「どんな状況か見てみろ！」と言って、トレムセンの全ての名士を太守に譲った。太守は **akibet** 酷かった。即座に逃亡して、都から出て行った。彼はバフラン側のスペイン人の所に避難(p53)した。エミール・メスウドは紛争も戦争もないままに私のお陰でトレムセン王位につ

¹² 1962 年にアルジェが独立するまでに民族運動の最大の指導者であるアルバイ・ムハン
ドゥル・ハッジは、以下の生命を出した。「全てのことと、二つの国の成立に私たちはトル
コ人への借りがある。オスマン人が来た時私たちは海賊だった。数百年の間種族から・・・
分散していた部族を一箇所に集めて彼らを民族にした。この民族は 300 年間中央トルコ政
権下であって、協力する力を学んだ。トルコ人のお陰で私たちは民族という状態に到達し
た。」 <ヒューリエット紙 no5.121.3.8.1962.s5c>

いた。彼は私と戦士たちのために祈った。しかし、王位につき、彼の願いはかなった。もはや彼から命令するのは正しいことではなかった。

太守メスウドは、私の戦士たちには一人ずつに、アラブの志願兵には一人当たり 10 枚の金貨を与えた。私にも年度の税として金貨 5000 枚の金貨を送った。私は金貨をベイレルベイの金庫に送った。私は彼の送ったものの大半を船長たちに分配した。一部は自分の宮殿にとっておいた。太守メスウドに一通の手紙を以下のように書いて送った。

「今おまえはスルタンのおかげで祖先の王座についた。だがお前を王位から **mahrhm edenhaletten katı hazer eylrsin!** ムスリムを害悪から遠ざけるように。エミールが田舎に出て行かぬように今期を示しなさい。毎年税には 1 日たりとも遅れてはならぬ。スペインの異教徒とのいかなる関係も絶対に私は行わない。というのも、スペインの異教徒はお前に復讐の機会をうかがっているのだから。お前の二人の兄はバフランにいて、スペイン人の手にあるのだ。お前が、彼らが王位につくことを望まぬならば、警戒を怠ってはならない！」

しかし、メスウドは王位についた日から弾圧と不正を始めた。**Atalarından böyle görmüştü**。彼が手紙を読んだ後にビリビリに引き裂いたことも耳にした。彼はこの行動がいかなる災難をもたらすのかについて、のん気で無知だった。彼が国民を襲ったことを兄アブドゥッラーが耳にした。彼は私に頼み込んでこう言った。

「スルタンよ、ご覧になりましたか。あなたは私を祖先の王座からおろして、私に神の恩恵を示さない恩知らず者を即位させた。今彼に対する反乱がおきた。どうかどうか、私を王位につかせて下さい。そうすれば、命ある限り私はあなたの僕です。」

(p54)彼の弟メスウドからどんな利益を得たとしても、このアブドゥッラーから程には利益を得ないことは明らかであった。しかし、今アブドゥッラーを許してメスウドに対抗することを許した。この頃私は 22 隻の船でアルジェのモスタガネムの都の外洋にいた。私はモスタガネムを易々征服した。ここはスペイン支配化のバフランに近かった。私がまだ **Mostaganem** にいた時に、エミール・アブドゥッラーがやって来て私と面会した。彼は私の服に口付けをして懇願した。私は彼に 1000 人の水兵を与えてトレムセンに送った。私はスペインから自分たちの船で運んだ 2285 人のイベリア半島の移民をモスタガネム側に定住させることに追われていた。私は彼らに仕事と土地を与えた。彼らは大変文化的な人々で、誰もが 1 つ以上の技術を持っていた。

■ 戦争計略

私が報告を受けた時アブドゥッラーはトレムセンに来て都を支配していた。彼の弟メスウドは恐れて籠城し、25 日間耐えた。・・・・・・・・・・

「彼らは私たちが城を捨てて逃げたと思っている。このアラブ人はすごく横暴な人種だ。彼らは私たちが勝とうが負けようが気にせず、トルコ人が逃げたという略奪の欲求によっ

て私たちの所にやって来たのだ。その際には私たちは彼らを叩きのめし、城を取ってエミール・アブドゥッラーに渡して私たちは戻る。」

同じようにこうなった。「おい、トルコ人どもが逃げ始めているぞ！」と言った城内の太守メスウド側のアラブ人達は水兵の背後に降りてきた。水兵たちは回れ右して突進し、大部分を切り倒した。なぜならばこのアラブ人達は戦闘技術を持たない民族だったのだ。彼らは砂漠での略奪行為と軍隊の戦争を混同している。戦闘技術を持つスペイン人異教徒ですらトルコ人水兵に負けてきたので、**hangi akılla bilinmez**、このアラブ人異教徒たちは辺りかまわずにトルコ人に立ち向かい、ばらばらになった。なぜならば、彼らにとっては人間の心はほと(p55)んど価値がないのである。奴隷身分を知り、用心するところで「全てはアッラーによる」と言って愚かに死んでいった。若くいい馬に乗ったものや、中には勇敢なものもいる。しかし馬の馬具ですらきわめて初歩的である。そして最大の敗因は、集団で戦う戦法を全く知らないことだった。

こうしてトレムセン城は水兵の手に落ちた。太守メスウドは、夜闇の中 5-10 人の男とともに逃走した。彼がどうなったのかはわからない。以後彼の名も評判も聞かれなかった。愚かな男の結末はこうなのだ。メスウドが誰であろうとも、この世の王のベイレルベイたる私にはかなうものか！彼よりも何百倍も偉大な支配者のスペイン王カルロスですら私と故人の兄オルッチ・ベイに敗北していた。

このメスウドはこのように下劣で不誠実な男だったので、城で私の水兵に対抗して配置し、主人のために魂を捧げた 6000 人のアラブ人に対して何も言わずに逃げた。更に主人の逃亡を知らない哀れなものたちは、数時間水兵たちに抵抗したが、最終的には降参した。

隊長たちはこう言った

「私たちはベジャイルのスルタンであるハイレッディン・パシャに齒向かったわけでは断じてない。ハイレッディン・パシャは私たちの主人であり、トルコ人は父である。メスウドの恐怖からあなた方に対して武装したのだ。彼は私たちを、スペイン人異教徒を呼ぶことで脅迫した。私たちの中にはオルッチ・ベイとともに多くの戦いをした戦士がいる。私たちを許してください。私たちの情愛はあなた方から来るのだ。」

このトレムセンの戦いで私の兵は計 5000 人のアラブ人を切らざるを得なかったが、降参した者たちを許した。金曜日に礼拝の場で海と陸の王スルタン・セリムの名が読み上げられた。シェリフの名が刻まれた硬貨が作られた。水兵たちは太守アブドゥッラーにお暇を告げた。太守アブドゥッラーは水兵たちがもう暫くトレムセンに留まることをお願いした。(p56)水兵たちはトレムセン、つまり新スルタン任命後の都にもう一日滞在する許可のないこと、すぐにアルジェに帰る必要があることを述べた。だが、アブドゥッラーの要望のためそこに 100 人の水兵を残した。アブドゥッラーは私の兵を目に入れても痛くないほどかわいがった。彼は自分が食べるのと同じものを水兵たちにも出させた。

残りの 900 人の水兵は、アルジェに太守アブドゥッラーが送った金貨 20000 枚と贈り物を持ってやって来た。

「Şimdi halde sözü insan sözüne benzer、だが、思うのだがこれも即位すると弟のように変貌するのだろうか。」

船長はみんな笑った。私はトレムセンの一件の後はイブヌル・カーディの件に着手した。イブヌル・カーディはアルジェのアラブ人エミールの大部分と私に忠実であった。チュニスのエミールは彼を私に対する反乱に扇動したが、彼は侮辱的に拒絶し、彼のようにチュニス・ベイにトルコ人へ降参することを持ちかけた。今この切れ者のアラブ人は死に、代わりに ヴェレディ・イブヌル・カーディと言う愚息が後を継いだ。彼の最初の仕事はチュニスのエミールとともに私に反抗する連合を作ることだった。彼らはこういった

「連合してトルコ人連中をアラブ人の海岸から追い出そう。」

この無益な、ヴェレディがチュニスのスルタンに送った手紙を私は手に入れた。彼の父が死んでもう 2 ヶ月になった。チュニスの太守はこう書いていた

「お前と連合してトルコ人の根を根絶しよう。「ハイレッディン」というトルコ人をアルジェから追い払おう。代わりに私が太守になる。その時あなた方は **vafir** 私が世話する。私の父はトルコ人をととても好んだ。しかし私がトルコ民族程に愛する民族は他にいないのだ。」

私はイブヌル・カーディとチュニス・ベイの兵士たちの間の手紙を入手して、私に反抗する計画をする陰謀を知った。12000 人の兵でチュニス・ベイの所に進軍した。樫と栗の木で覆われたところから平野に出た。私はチュニス・ベイを遠方から私の同盟者のイブヌル・カーディに銃撃させた。チュニス・ベイの兵は蜘蛛の子を散らすように逃げ、(p57)チュニス・ベイはつかまった。彼を私の前に連行した。多くの忠告を与えて解放してやった。しかしもしも彼が私を捕らえていたならば、どんな殺し方でもって私を殺していたか私は知っている。アフリカ中が、私の示した慈悲が気に入った。

この戦場で私は 300 丁のテントを手に入れ、これらをアルジェに送った。さらに 5 日間戦闘を行った平野に留まった。そこは凄く美しい場所だった。あらゆる場所で枯渇することのない様な水が音をたてていた。おいしい獵用の鳥もいて、しばらく楽しんだ。私は帰還命令を受けた。とても険しい峡谷を通ったので、2 人の騎兵も並んで通れなかった。実はイブヌル・カーディは私たちをここで襲撃する計画を立てていた。突然攻撃を受けた。私はこのようなことは想定していなかった。私たちが攻撃されたところは地の利が悪かったために私は大損害を受け、多くの水兵が死んだ。イブヌル・カーディは 5 つのトルコ人の首を持ってきた者には金貨 1 枚を約束していた。このため反乱アラブ人は **canlarını dişlerine takmış vuruşuyorlardı**。この戦闘は 3 時間半続いた。結局私は峡谷を抜けてアルジェにやって来られた。計 750 人の水兵が死んだ。これをイブヌル・カーディという **haramzadenin yanına komamaya ahdettim**。神意では、チュニスのベイの様な支配者は打ち破って捕らえ、イブヌル・カーディの様な反逆遊牧民に対しては勝利することができないのだった。

全ヨーロッパの王が私の名を「バルバロス」と思い出して震えている時に、一人の反逆者が私たちを襲撃したことはアルジェで無秩序を生み出したイブヌル・カーディの誇りを

この上なくした。「私はハイレッディン・パシヤを負かした。おそらく近いうちに彼の首を取るだろう。」と *öğünürdü*。彼の周辺は大混乱になった。500 人のトルコ人を捕らえた。私はイブヌル・カーディがトルコ人たちを抑圧して、風車の石運びに使っていることを耳にした。私は彼が捕らえたトルコ人を残したこと、もしくは結末がもの凄く恐ろしいことになることを知らした。暫くは私の注意を反らした。なぜならば、これらを再び救い出すのなら最初の仕事として彼から恨みを得るに尽くすことを説明したからだ。他方ではジャンベの人々を全員解放した。

(p58)「このトルコ人たちのアルジェでの仕事はあるのか？ここはアラブ人の国だ。全滅させてくれよう。と味方集めに帆走していた。」

■ 裏切りの水兵

自分をスペイン人の奴隷身分を私が救うことを望む幾人かの気楽な恩知らずどもが、この召集に従った。私の下には 12000 人のトルコ人水兵がいたが、これらの大半は船上、つまり地中海にいた。キリスト教徒の攻撃に対して用心深くなる必要があった。この状況において、私は全ての反逆者の所に全ての水兵をつぎ込むことはできなかった。このような時、私たちの中から一人のトルコ人もアルジェでは捕らえられぬようにと思った。カラ・ハサンと言う一人の水兵は私を投げ倒して私の後を継ぎたがっていた。思うに、彼は鳥ほどの脳でもって私ができないことをするだろう。私はカラ・ハサンがイブヌル・カーディと通じていることを知った。私はこの謀反人を追放した。しかし、私に大きな倦怠感が訪れた。このアルジェをよく整える必要があった。イブヌル・カーディはアルジェの太守の背後にいた。しかし、私がアルジェを放置しておいたならば国は再び乱れ、どこも一つずつスペイン人異教徒の手に落ちただろう。イブヌル・カーディはアルジェの統一、スペインに対抗する知能、勇気、軍隊、権力を持っていた。他の軍隊には船すらなかった。スペイン人たちが来襲し際、地中海を真っ暗に覆う異教徒の *amadalar* にどうやって対抗したものか。私たちはアルジェには来ないで、定住者の習慣、異教徒たちを見ると蜘蛛の子を散らすように逃げた。100 年来以上アルジェには国家、政権というものが何もなかった。異教徒たちはこれを神の恵みとして、海岸の最高の港を手に入れた。今、私たちが受ける苦労の全ては、一握りの愚か者のせいで浪費しているためであった。私たちがこの国に連れてきた商人や金持ちは, *biz çekilir çekilmez oradan yok oldu*。だが、賢く短気な者たちは, *bu hakikatten gafley ediyordu*。私は一定期間アルジェを放置して国の奥に引っ込み、海賊行に従事し、陸の事に忙殺され(p59)なくすることを考えた。アルジェの人々は国をどのように統治し、どのように運営し、どのようにして守つたのだろうか？数年前にもあったように使者を度々送って、私が戻ることを懇願することは目に見えていた。その時に私は戻り、もはや私たちをアルジェから追い出すことは誰にも出来なかった。というのも、兵と国家統治はトルコ人特有の能力であったのだ。

■ イブヌル・カーディの反乱

ついに私が待っていたチャンスが到来した。イブヌル・カーディは、40000 人の兵士で攻撃に移った。だが、私は備えも、予想もできていた。更に、イブヌル・カーディの会議には私のスパイもいた。彼らが何を話し、何を計画しているのかを私は毎日知らされた。私は 10000 人の水兵を反乱者の下に送り込んだ。昼下がりまでの激しい戦いとなった。私は 2000 人の死者と 2000 人の負傷者を与えたが、反乱者全体を使い物にならなくした。更に、700 人程が逃げ出した。残りは死ぬか捕虜にされた。反乱者の指導者に留まったイブヌル・カーディの家来、つまりアルジェのシェイヒュル自治体は私たちの手に落ちた。神に呪われたものたちを 4 つに分けて、それぞれの都の門に掲げさせた。Ta ki alem ibret ala ! 反乱を制圧した後、首謀者のうち 185 名を手を縄をして私の前に連行してきた。私はアルジェ中のウラマーを集めた。こう言った。

「ウラマーの方々よ、この反乱者についてイスラムのシャリーアの指示はどうなっておりますか？」

年老いた一人のウラマーがこう答えた。

「パシャよ、お前とその兵隊には向かった罰はシャリーアにおいては死である。なぜならばお前はこの国の王スルタン・スレイマンに代理をしていて、彼のベイレルベイであるのだ。私たちの国に *lütuf ve hizmetine sayılmakla tükenmez*。お前は私たちが異教徒の害悪下で頭を垂れて暮らすことから救った。私たちの国に豊かさと裕福さをもたらした。どんな政権にも私たちが目にしな(p60)かった公平さを、お前と故オルッチ・レイスの改革によって目にした。今この 185 人のあわれな一部の *müfsitler* の口が封じられて大きな罪を行った。だが、*inayet sendendir*。その多くはスペイン人異教徒に対して戦った戦士なのだ。今、彼らは過失に陥った。許して、奴隷身分に受け入れよ！寛大とはこれである。」

私は水兵の隊長の所に戻った。

「お前たちは何と言う？」と私は言った。

隊長たちは私にこう言った。

「パシャよ、あなたはより良く知っている。だが、私たちは宗教家ではなく兵士だ。全ての行動をイスタンブールのこの世の王に説明する義務がある。今は慈悲や恩恵の時ではない。この反乱者たちが私を捕らえたならば、何をしたらろうか？それは彼の自白によりはつきりしている。今私たちが彼を許したならば、凄く悪い見方となる。偉大なる北アフリカで私たち一握りのトルコ人である。ここはアナトリア数個分に匹敵する広大な国だ。数千人のトルコ人がこの国を得ようと骨折っている。私たちの上では、スペイン人異教徒のようなヨーロッパ最強国がチャンスをうかがっている。偉大なる神のためにこの反乱者の首を切ってください。Tedbiri budur。」

■ アルジェを断念する

船長たちの話のほうにより分別があった。私は185人の反乱者の首を切る命令を下した。このように命じたことをとても悲しく思った。更にその夜も悲しんで眠れず、悪夢を見た。しかし、国の利益がこのことを要求したのだった。だが私は反逆者たちの所持品や家には手をつけなかった。これは広い国では厳しくは守れなかった。私たちはビクビクしていて、しばらくは立ち上がれなかった。だがこれは *istikbal vededen bir tedbir değildei*。ある国の国民が私たちを必要とせず、満足もせず、*bize yakışan oyduki*、私は退散した。ひとつの国の統治は兵が有力者と争うことで可能なのであった。十分になったら、国民よ、私たちを支援せよ。しかし民衆の中に不満感があるのならば、それは国が放棄する必要があった。ある時から私はこのこと(p61)を考えていて、今明確な決定をした。私たちが退散してからはアラブ人がアルジェを統治できないことは分かっていた。スペイン異教徒に対して配置することはさておき、私の退散によって商業生活をストップすることから皆が多大な害を受ける。アラブ人は国家の秩序を整えることもできない。私が去った後アラブ人有力者は一人ずつ脱落して、民衆に打ちのめされるはずであった。最終的にアラブ人は、唯一の解決策として、相当な恩恵でもって私をアルジェに呼ぶことにした。このことは私の信仰心のごとく明確だったのだ。この晩私は夢の中でオルッチを見たのだが、このことを私が決定したことが正しかったことの印と考えた。

ある朝アルジェの港に停泊した 25 隻の船に水兵全員と、その家族、品々を積み込んだ。他の船は地中海を航海中だった。私はこれらの船に、アルジェ港ではなくジジェッリの港に戻るようにと命令していた。水兵全員が岸に集まった。彼らは皆、自分はスペインの海へと航海に出るのだと思っていた。だが、女性や品物まで船に積み込んでいるのを見ると大きな当惑が現れた。人々の大部分は私たちが去ることを悲しんだ。更には船に乗り込む際にこう叫んでイブヌル・カーディを呪った。

「明日スペイン人異教徒がやって来たならば誰が私たちを救うのだろうか？」

イブヌル・カーディは私に手紙を送った。彼は大変あつかましくも、私の息子になること、私が彼の欠陥を許すこと、アルジェから私が出て行くことを望んでいた。私は受け入れずに、使者にこう言った。

「アルジェ城の鍵は *var efendine teslim eyle,sultanluk peşindeydi,gelsin memleketin başına geçsin*。こうしてムスリムを死なせた。どんな国を統治するのか？」

アルジェの人々はスペイン人異教徒だけではなく、スルタン・スレイマンをも恐れていた。アルジェの人々は、スルタンが彼のバイレルベイの出発を洩るアルジェの民衆に対してどのように振舞うのかということを考えて、眠れなかった。雑然とした中でウラマー代(p62)表団を私の船に派遣してきた。彼らは私たちが留まるようお願いした。 *Hatırlarını okşacı sözledim*。私は彼らの感情を考慮した言葉を述べはしたが、決定を覆すことはなかった。彼らは物憂げに船から離れて行った。

一日の航海の後私たちはジジェッリにやって来た。ここはアルジェ岸の美しい港だった。兄オルッチと一緒に最初に征服した土地のうちの一つだった。私たちが定住するためにやってきたことを知ったジジェッリの人々は祭りを始めた。今アルジェの都に流れる富と商業は、ジジェッリに流れることになる予定だった。翌日、アルジェ、更にはチュニスの全域からシェイフたちがやって来て私の手に口付けをした。彼らは自分たちが **Harife-i Ruy-i Zemin hazretleri** であるスルタンの僕であり、私がどのような命令を下そうともスルタンが命令を下したときのように **icabet edeklerini**、税を納め、兵を提供する旨を述べた。

「私たちは決してスルタンに齒向かわない。この不名誉は受け入れず、またスレイマンが偉大なことを誇りに思う。アルジェで起きたことと私たちは断じて関係ない！」と言った。

私はジジェッリには長居せずすぐに航海に出て、シチリア海岸にやって来た。シチリア王国の首都 **Palerma** を砲撃した。9 隻の船を拿捕した。その中には 40 の船倉一杯の小麦、大麦、オリーブ、オリーブ油、乾パン、木材、そら豆、米、コーヒー、生地、絹織物、鉛があった。木材は多くのことに役立った。

ジジェッリに大きな兵舎と邸宅を建てさせた。36000 人分の小麦を貧しいものたちにかなりの安値で売った。小さな造船所を造らせて、3 隻の船を造船所に置かせた。同じ年の夏に再び船を航海に出した。私はジジェッリに留まった。私の船はヴェネツィア湾に向かって、3 隻の船を拿捕した。そのうちの 1 隻の中から¹³10000 ドゥカート金貨が出てきた。数百人の捕虜を手に入れたが、これらのうちの 60 人はムスリム奴隷だったのですぐに解放した。この航海は 23 日間続いた。24 日目に私の船はジジェッリに戻った。手に入れた品の 10 分の 1 を貧者に配布して、(p63)残りは売った。水兵全員の手には 185 ドゥカートの金貨、更には 5 丁の銃、4 丁の拳銃、8.5 カンタルの鉄、18zir のヴェネツィア産ラシャ、225zira の絹織物が行き渡った。戦利品はこれほど豊富だった。北アフリカ中から商人と船の所有者が商売と品物の売買のためにジジェッリに押し寄せた。私は自分用に 26 人漕ぎの巨大だが快速な一隻の船を造らせた。新しい船を他の船と競争させてみたところ、全ての船を追い抜いた。冬が到来したので船を陸に上げさせた。

翌春、船に油を塗って修繕、修理を始めた。15 隻で海に出た。まずはジェノヴァ湾にやって来た。14 日間この海岸を巡って 21 隻の船を拿捕した。全ての船をジジェッリに向けた。次にメッシーナ海峡を抜けてヴェネツィア湾に入ると 3 連隊の艦隊を見つけた。艦隊は風のごとく私たちの前から逃げたが、追跡して追いついた。その船はどうやらシナン・レイスの船のようであった。シナン・レイスは私の船にやって来て手に口付けをし、うれし泣きをした。私たちは大分長いこと会ってなかったのだ。シナンを後ろに従えてヴェネツィア湾を出た。9 隻の異教徒の船を再び拿捕した。こうして 1 月の間に手に入れた船は 30 隻となった。ある船はラシャ、1 隻は太目の絹糸、1 隻は蜂蜜、1 隻は小麦、1 隻は唐辛子を積んでいた。一隻は兵士で満載だった。

¹³ 今日の購買力でおよそ 600 万ドル

■ アルジェが揺れ始めた

この間にかつての船長の一人であるコルドール・レイスもジジェッリに3隻の船でやって来た。彼は10000 ドゥカート金貨を提供した。私はそれらを宝庫に収めさせた。一週間もたたないうちにジジェッリの港に船長たちが……。私たちがこうしていた時にアルジェからの知らせがやってきていた。

アルジェの都の人々は短期間で私たちの価値を理解し、都の治安と安全に habel gelmis、イブヌル・カーディに反抗する揺れが増していた。結局人々は代表団を送ってイブヌル・カーディにこう言った。

(p64)「ハイレッディン・パシャを招くことは大いに私たちの利益になる。パシャは完全な方であるので、ムスリムが快適であるようにと言って広大なアルジェの土地を残していった。このようなことを今までに一体誰がしただろうか？あなたに関するお願いがあるので、パシャをもう一度ジジェッリからアルジェに呼ぼう。あなたはもう一度部族長に戻ってください。」

イブヌル・カーディはこのような返答をした。

「おい、愚か者どもよ！お前たちはハイレッディン・パシャがなぜアルジェを残していったのか考えたのか？私を恐れたがためであるぞ。」

「スルタンよ、私の知るハイレッディン・パシャは神以外に恐れるものはいない。そうでなければ、……。パシャがアルジェを残していったのは決してあなたを恐れたためではなく、何か思うところがあったのだ。」

イブヌル・カーディは激怒して、カラ・ハサンに……。アルジェに呼びたがる代表団のリーダーであるアラブ人の宗教家をその場で直ちに処刑させた。

この事件はアルジェの都に私たちが戻るのが近づいていることを示していた。だが、もうしばらく待つ必要があった。というのも、状況が好ましく私たちにとって有利な方向に転換し、イブヌル・カーディの影響力は徐々に弱りつつあり、日に日に人々の支持を失っていたのだった。都の統治は実質カラ・ハサンの手中にあった。アルジェには枢隻の船があったが、水兵がいなかったために航海には出なかった。船は非常に繊細なものだったため、短期間で傷んでしまった。船には相当な心遣いが必要なのだ。船がだめになってしまうと、都には商業と名のつくものは何も残らなかった。こうして、私がアルジェの都を発ってから3年の月日が流れた。アルジェからやってくる代表団の数は増え始めて、彼らは私たちがアルジェに戻ることを望んでいた。

(p65)この間、シナン・レイスは9隻の船で地中海遠征に出て、12隻の異教徒の船を拿捕した。ジブラルタル海峡にも足を伸ばしたシナン・レイスは、スペイン南海岸のイベリア半島にたどり着いた。800人のイベリア半島の住民を船に乗せて、スペインの弾圧から救い、彼らをアルジェに連れて行った。全員に土地、家、……を与えた。だが、私はシナンを不安の面持ちで見た。

「シナンよ、調子はどうだ？」と私は言った。

「御機嫌いかがですかパシャ。私は悩んでいます。あなたと私たちのアーである故オルッチ・ベイは千の苦悩と自己犠牲によってアルジェを手に入れた。今、北アフリカ最良の港であるアルジェの港は恩知らずのアラブ人の手の中にある。彼らはこの港から自己犠牲を学ぶことも、私たちを受け入れることもない。私はイベリア半島から戻る際にアルジェに立ち寄ることを望みましたが、砲火で出迎えられました。大砲を黙らせて、神の恩恵によって、都を手に入れることが私の……でした。許可してください。イブヌル・カーディという奴を捕らえて見せます。昔のようにアルジェの都で暮らしましょう。」

彼らはアルジェから私たちを呼び、そこで待っていた。とうとう私はシナン・レイスと呼んでこう言った。

「レイスよ、……、私たちにアルジェへの道が開かれた。この冬はジジェッリで私たちが越す最後の冬になるならば……。神が許すのならば、来春に私たちがアルジェの都に行くことは……。もはやアルジェにはイブヌル・カーディを求める者は一人も残っていなかった。更に……、アルジェから代表団がやってきて私たちを都に……。あまりのためらいにもううんざりであった。鉄は頃合に叩く必要がある。着手すべき時だった。お前をここに残し、私の家族、船、水兵を預ける。私はアルジェに行く。そこから私がお前にどんな形で命令しようとも、それに従って行動しなさい。」

シナン・レイスはこのように言って出て行った。

「偉大なるパシャよ。」

その冬私はかなり働いた。船を編成し、大砲を修繕し、毎日があっという間に過ぎた。(p66)春がやってくると……戻った。アルジェの都と、国内の他の場所から再び代表団が来始めた。みな、私がアルジェの都に戻って国の統治権を手にするように懇願していた。代表団の一人は私への贈り物として書き表せない程に美しい朱色の雌馬を連れてきて、私に大層喜ばれた。

私たちはジジェッリを離れた。私の下には 12000 人の水兵がいたが、そのうちの 4000 人は騎兵で残りは歩兵だった。ジジェッリにはシナン・レイスと 300 人ばかりの水兵を残した。道中、私の後には何百、何千の遊牧民の騎士が加わった。彼らは私たちと一緒にアルジェ入りすることを望んでいた。私たちが都に大接近した時、イブヌル・カーディの部下たちと出会った。威嚇するために、即座に攻撃を命じた。800 人を切らせた。

■ イブヌル・カーディの死

イブヌル・カーディは、私がアルジェに接近していると知ると恐怖で唇がカラカラになった。実際彼の下には 12000 人の騎兵と 8000 人の歩兵がいたが、この兵士が私に武器を向けることに意欲的であるかは疑わしかった。意欲的な者ですら、その力は私たちを阻むのに十分ではなかった。結局、イブヌル・カーディはある夜に奇襲でもって運に任せるこ

とを望んだ。私がアルジェに3軒の邸宅とテントを建てた時に彼は奇襲した。だが、185名の兵士と97匹の馬を失って退散した。私の下には一人の死者すらいなかった。朝になるとイブヌル・カーディは再び攻撃を行った。彼は兵士が戦闘を行うように見えて、基本的に自分の命を守るために時には逃げ、時には山の背後に隠れていた。要するに、極めて奇妙な戦い方だったのだ。戦闘は夜まで続き、イブヌル・カーディ側の司令官カラ・ハサンー彼は以前の私の水兵として私に反乱を起こした一が死んだ。このため、イブヌル・カーディにはもう力が残っていなかった。彼は退散を望む一方で、……。シェイフは反乱者の一族を処刑して私に送った。イブヌル・カーディが乗っていた雌馬に100ドゥ(p67)カートを払って、シェイフを褒め称えた。馬は非常に価値あるものであったので、1000ドゥカート払った。

イブヌル・カーディが死ぬと、彼の兵は武器を捨てて降参した。この哀れな者たちを虐待することに意味はなかったので、私は全員を許した。解放してやると、彼らはどこかに行ってしまった。一部の者たちは私の庇護下に入るために大変丁寧に頼み込んだ。私は受け入れた。この定住者たちを整理するのには大した能力は使わなかった。彼らは従順とは何たるかを知らなかった。ある国の一員として暮らすことの力と恩恵を学ぶことができなかった。こうして、あるものはこちらにやって来て、あるものは去って行った。だが、アナトリアから来た私の水兵がいたために彼らはイブヌル・カーディの庇護下に入ったのだ。オスマン朝の人々の顔は誇らしくなった。みなやって来て首を *büktüler*、私の前で止まった。トルコ人たちは定住者のように地にひれ伏すことすら知らないのです、この行為が同意の意味となった。私は早急に決心する準備があったが、昔からの水平に対して一瞬戸惑った。幾人かは *mazide* 多大な奉公をしてとても役立つことを示していた。その中にはスペイン人船長の首を切って、船を拿捕した人々もいた。昔からの仲間である数千人の水兵も私の背後で *saf saf duruyor*。彼らは不安と心配の面持ちで私が出す指令を待っていた。これらを許可することにおいてはいくつかの不都合があった。一つに、私はこの私の親切がイスタンブルでどのように対応されるのかを知っていた。なぜならばこの水兵は私個人の所有で、スルタンに反旗を翻したとみなされていた。だが、一時訪れた内部からの心情により私は言った。

「全員を許す。」

彼らは武装を解いてひれ伏した。全員の目が涙でいっぱいになった。Mahcubiyetle yerden 武装を解いてひれ伏した。私の後ろにいる水兵たちにも満足の表情があった。私が昔の仲間を許したことを喜んでいるのだとわかった。この決定が妥当であったことは後の紛争で立証した。私に許された水兵は多大な自己犠牲を払って過去の罪を覆うことに努めた。ほとんど全員今は戦死者として死んでいる。神のご慈悲がありますように！」

■ アルジェ入り

(p68)万事の後、行軍命令を下した。一時間後に大きなアルジェの都に入った。全ての貴族が城壁の外の surlarの外へやって来て、私の決断に喝采した。大規模な歓迎の間に私は通りを渡って以前の自分の土地にやって来て、そこに泊まった。シナン・レイスに私の船と家族を連れてくるよう命じた。

シナン・レイスは35隻の船でアルジェから出た。彼はアルジェに入ると全ての大砲を鳴らして都に挨拶した。私もアルジェの大砲を鳴らした。

私はアルジェ全域に秩序を保証する仕事に置かれた。トレムセンのベイであるアブドゥッラーは、躊躇しつつも私がトレムセンからやって来ると、自分の名前を硬貨に刻ませ始めて、スルタンの名は硬貨から除外された。私は彼に以下のように手紙を書いた。

「直ちに硬貨を **Halife-i Ruy-i Zemin** の名で刻印し、税の義務額である 300000 ドゥカートをアルジェに送るように。預言者のカリフであるスルタン・スレイマンの名を効果から消すことにより、お前は大罪を犯した。すぐに **tecdid-i iman** しろ。そうでなければお前をイブヌル・カーディよりもひどい目にあわせてやる。」

エミール・アブドゥッラーは私の手紙を受け取るや否や破いて投げ捨てた。このため、私はアブドゥッラーの息子エミール・ムハメッドを支持することに決めた。エミール・ムハメッドは彼の父親に反旗を翻した。2000 人の騎兵で山を登った。彼は父を破ってトレムセン王位につくことを望んでいた。私は一隊を整備してトレムセンに向かった。途中でアブドゥッラー・ムハメッドもやって来て私の手に口付けをして私の軍に加わった。どうやらアブドゥッラーはトレムセンから出て私たちの所に来ているようだった。 **Mazuna mevkiinde karşılaştık**。私はアブドゥッラーの軍を易々蹴散らした。反逆者であるトレムセンのエミールを捕らえて、私の前に連行した。私はすぐに処刑させた。彼の息子ムハメッドに着物を着せ、トレムセンのベイにした。私は 400 人の水兵を添えて彼をトレムセンに送った。エミール・ムハメッド(p69)は彼の父が貯めた税負債である¹⁴90000 ドゥカートを 400 人の水兵に渡してアルジェに送った。トレムセンの人々は新しいエミールに満足した。

この間私の水兵がイブヌル・カーディの甥フェルハットを捕まえて、私の前に連れてきた。フェルハットは許しを願い、私は許した。彼は部族長に復帰した。そこから 20000 ドゥカートを送って、忠実な僕であることとおじの反乱には一切関わりの無いことを示した。しかし、彼はおじの反乱に参加していた。私はフェルハットと会談した。私の許しがなければ **Kabiliye** 山から下りることなく、毎年アルジェに 100 枚の金貨、らくだ 1000 頭、羊 2000 頭、ラバ 100 頭、乗用馬 20 頭を送らされることになるはずだった。

アルジェから戻ると私は艦隊を遠征に派遣した。全体の指揮官にシナン・レイスを任命した。まず 6 隻の艦隊が戦いから戻った。私は実りある遠征となることを一晩前から夢で見っていた。6 隻の船が 6 隻の異教徒の船を従えてやって来た。異教徒の船のうちの 1 隻は火薬、鉛、砲弾、60 門の青銅製の砲を満載していた。私はこのことを非常に喜んだ。なぜ

¹⁴ 5400 万ドル

ならば、武器庫は蓄えが不足していたのだ。大砲は全て¹⁵18 オッカか 24 オッカの重さがあった。2 番目の異教徒船からはピッチ、タール、柱、丸太が出てきた。3 番目の船からは砂糖が出た。別の船にも価値ある品々が一杯だった。最初の艦隊の後、別の艦隊も豊かな戦利品と一緒にアルジェに戻った。35 隻の船のうち 1 隻も損傷しなかった。このため神に決意の感謝を行った。

スペイン人異教徒はアルジェの港の 300 メートル外洋の岩場に強固な城を築いた。彼らはそれを「ペニョン」と言っていた。この城には数百の衛兵と何門かの大砲がすえてあった。城の司令官ドン・マルティン・デ・ヴェルガスは年老いた *asılzade* で、以前から名が通った船長の一人だった。スペイン人異教徒はここに余分な兵士は配置しなかった。というのも、城は岩場の中の一彫り分のスペースしかなかったのだ。飲み水すら *Balear* 諸島か (p70)ら送らせていた。昔からスペイン人異教徒はここからアルジェ港を砲撃して、アルジェの人々に望むことをさせていた。今、彼らは私たちへの恐怖からへまをやらかした。だが、再び港の外洋のこの岩場をスペインの手に残す措置には適さなかった。私はドン・マルティンに城を譲って撤退するように持ちかけたが、彼は拒絶した。このため、私は砲撃を開始した。私たちの大砲は 20 日間昼も夜も城に砲撃した。¹⁶結局私は岩場に出た。ドン・マルティンは 100 人の兵士とともに一時 *dögüstükten sonra* 城を引き渡した。

■ 異教徒を大砲につめて打ち放った

こうして私はペニョンを手に入れた。以前スペイン人たちはアルジェの都のモスクでアザーンを唱えている時にモスクの尖塔を大砲で狙って破壊していた。この件は全くの気まぐれで行っていた。私たちがアルジェに行くと彼らはこの遊びをやめて、このことを大いに悲しんだ。大勢の尖塔を破壊し、ムアッジン¹⁷の首をはねたものを渡し尾前に連行した。

「おい、異教徒度よ、お前は強き名射手だった。お前は一本の尖塔を破壊し、1 人の首をはねた。今、大砲の打ち方がどんなだか見るがいい！」

私は異教徒を大砲につめて海に打ち放った。副官の 10 人の射撃手の首も切らせた。ほかの者たちは鎖につないだ。

この厄介な岩場は私たちには全く必要なかった。アルジェの地下倉庫の 30000 人の捕虜を集めた。岩場を、地下道を吸えて追放させた後、岩場と港の間を埋め立てさせた。港の入り口にも大きな人工防波港を作らせた。この時アルジェは守備力のすばらしい港となった。

私はペニョンの岩場の城を手に入れてスペイン王カルロス¹⁸を激怒させた。彼はこの知らせ (p71)せをもたらした将校の首を切らせてこのように言った

¹⁵ 1 オッカ=1288 グラム

¹⁶ 1529 年 5 月 2 日。この時スルタンはウィーン遠征中で、エディルネにいた。

「城を手に入れることは、私のように¹⁷偉大なセニョールのような帝国のものなのだ。バルバロスのような海の盗人がどうやって私の城を手にするのか？フランス王のような統治者を捕虜にしてマドリードの牢に入れた私は、この海賊よりずっと偉大なのだ。原因は将校と海軍将校がなさけなさであった。お前たちは面目を失った。みな早々に立ち去れ！」

昔から私の習慣は捕まえた異教徒の将校、船長、知事、僧、芸術家たちを私の下に呼んで彼らと話すことであった。1人の捕虜を尋問する様ではなく、1人の友人と談笑するように話し、この方法で良い情報を得た。時折、ヨーロッパの人ですら誰も知らない城の秘密でさえ、この方法で聞き出していた。実際、地集会のあらゆる国々に私のスパイがいた。しかし、捕虜たちと話して情報を得ることの方が時としてより有益だった。捕虜はカルロス王が今バルセロナにいて、ジェノヴァに向かって出発する決定をしたことを語った。ジェノヴァ共和国はヨーロッパの多くの国と同じ様に、カルロス王の支配下にあった。カルロス王の有力な海軍将校アンドレア・ドーリアはジェノヴァにいた。

ペニョンの岩場が私たちの手に落ちて海と一体化したことを知らなかったスペイン艦隊は、城に運ぶ重要物資を持ってきていた。彼らは城を見つけられなかったので、誤った場所に来てしまったと考えた。この考えをやっと正した時には私の船によって包囲されていた。武器と重要物資満載の9隻のスペイン軍艦は全てアルジェの人々の目の前で15隻の私の船によって拿捕された。これは長い間スペイン人にはもはや *destursuz* アルジェ海岸に近づけないことを示す事件となった。スペイン人船員の多くは剣で殺された。335人が降参してアルジェの地下倉庫に送られた。

この間にシナン・レイスは病にかかったので、今年の航海の指揮官をシナンに代わって(p72)アイドゥン・レイスにした。アイドゥンは海の事情と指揮能力においてシナンより優れた戦士であった。私は彼を呼んでこう言った。

「アイドゥンよ、今年の地中海遠征にはお前が行くのだ。ジブラルタル海峡まで行き、スペイン人異教徒には絶対にスキを与えないように。帰りにはイベリア半島の海岸を手に入れ、¹⁸グラナダ山脈へ避難したムスリム同胞を船に乗るだけ乗せられて、生きたままアルジェにつれて来い。 *Duam berakat seninle biledir*。警戒を怠らないように。」

「偉大なるパシャよ。」と言ったアイドゥンは別れを告げて私の下から離れていった。彼は10隻の船で港を出た。¹⁹ジブラルタル海峡を航海中に5隻の異教徒の船に出会った。強大なガレー船で、激しい戦闘になった。全ての船が拿捕された。アイドゥンは捕らえたガレー船の中に水兵を配置してアルジェに送った。航海に出て15日目に早くもこの5隻の戦利品が港に入った。非常に美しい戦艦だったので私はとても喜んだ。一方アイドゥンは航海を継続していて、南スペインのあらゆる都と町に立ち寄って砲撃し、戦利品と捕虜を得て、

¹⁷ ヨーロッパ人がトルコの王に与えた名。“大トルコ”と言っていた。

¹⁸ *Siera Nevada* 山脈。スペイン最高峰<3841メートル>はここである。スペインの圧迫から逃れたスペインのムスリムの主要な避難所。

¹⁹ ジブラルタル海峡。地中海と大西洋を結び付けている。アルジェの都の750キロメートル南西にある。

見つけ出したムスリムを救って戦艦に乗せた。船はもはやムスリム難民で一杯になって、針を落とす隙間すらなかった。

スペイン王カルロスは、アイドゥン・レイスが多くのイベリア半島の人々を船に乗せたことを聞くと、最も偉大な海軍将校から「ポルトンド」という名の異教徒をアイドゥンの道を阻む任につけた。ポルトンドがこの件に成功すれば、100000 ドゥカート of 褒美を得ることになっていた。スペイン海岸のある場所でポルトンドは、優れた艦隊によってアイドゥン・レイスの艦隊を制圧した。アイドゥンは傍らにいた偉大な船乗りのうちのコズダール・サーリフ・レイスと知り合った後、良い戦闘と良い戦略を作れるように、イベリア半島 (p73) 島の移民を海岸に下ろさせた。彼はスペイン人との件を終えたら戻ってきて船に乗せるといったが、哀れなイベリア半島の人々の **akılları başlarından gideyazdı**。実際多くが女子供で、彼らは悲嘆の中でなき始め、船を降りたがらなかった。アイドゥン・レイスは何とか彼らを降ろさせた。というのも、一隻の船に非戦闘員、更には女子供が見とめられたならば、結末はひどいことになり、戦闘はうまくいかないのだ。海軍将校ポルトンドが大接近した。アイドゥンとサーリフ・レイスは直ちに敵の方に向かった。激戦となった。怪物のような 7 隻のスペイン船は拿捕された。非常に乱暴な異教徒で、ムスリムに対してありとあらゆることを行ったポルトンドと船長全員が死んだ。こうして異教徒たちが「悪魔のソリ」、トルコ人たちが「異教徒のソリ」と言ったアイドゥン・レイスは、狐を巣から追い出すほど細かい知能と有名なサヒル・レイスの助けで大勝利した。375 人の異教徒が捕虜にされた。残りは **kamilren** 剣で殺された。ムスリム移民は救われた。海岸で心配しながら解散を見ていたイベリア半島の人々は再び船を手に入れた。こうして艦隊はアルジェに着いた。

アイドゥンは私のところにやって来て手に口付けをした。私は彼を、この時には死んでいたシナン・レイスの代わりに艦隊の総督にした。サヒル・レイスは彼の次官にした。アイドゥンをイスタンブルに送ることに決めた。実は彼は若い頃はイスタンブルで艦隊の船長をしていたのだった。スルタン・ベヤジットは彼を専門家としてエジプトのメムルーク・スルタンの下に送ったのだった。アイドゥンはエジプトからアルジェにやって来て兄オルッチの部下になった。

私はイスタンブルに行くのに 10 隻のガレー船を準備した。全ての船を花嫁のように装飾した。どの船にも 200 人の水兵が乗り込んでいた。漕ぎ手は一番力の強い者の中から選抜した。300 人の捕虜を分割した。これらはアイドゥンがスレイマンに差し出す予定だった。ガレー船のマストには隅から隅までヴェネツィアの金が金箔されていたので、太陽が照った時の荘厳さは言い表すことができなかった。かなり遠くからでも輝きは判別された。船長たちがやって

(p74) 来て、私の手に口付けをした。その後、大砲を鳴らしながらアルジェの港から出て行った。

■ アイドウン・レイスがスルタンの御前で

アイドウン・レイスはしばらくしてイスタンブル入りした。彼は全ての大砲を鳴らしてスルタンに挨拶した。ガレー船からは 300 人の奴隷が降ろされた。みな金糸の上着と高価な生糸で作られた **libaslar** を着ていて、戦利品を運んでいた。イスタンブルの都の上品な人々は大通りに群がって見物に出ていた。

スルタン・スレイマンはアイドウン・レイスをほかの船長たちと一緒に自分の下と呼んだ。私の手紙を受け取って読み、アイドウンに挨拶した。退出時にはアイドウンには 500 枚、アイドウンの傍らの船長たちには 300 枚、船長たちには 200 枚、船付イマームには 100 枚、その他の将校たちには 50 枚ずつの金貨が振舞われた。更に、アイドウン・レイスには非常に高価な剣、着物、双眼鏡が与えられた。水兵全員が造船所でもてなされた。アイドウン・レイスには **tayinat** が与えられた。アイドウン・レイスは全ての大臣と有力な船長を訪問した。1 ヶ月イスタンブルに滞在して、その後再びスルタンの御前に出た。スルタン・スレイマンは私に与えるため、アイドウンに宝石飾りの剣、短刀、金刺繍入りの着物、金刺繍の旗、2 つの大きなブリリアンカットダイヤ付羽冠を渡した。更には 20 人漕ぎの 3 隻のガレー船も与えた。今しがた造船所から出されたこれらの船は、見事に装飾されていた。とても美しい大砲があった。武器、弾薬、柱、タ、ピッチ、ロープのような品々で満載だった。品々の重さで巨大なガレー船がとつぷりと水に沈みこんで、ほかの倉庫、看板にすらねずみの這う所すらなかった。スルタンの午前から下がるとき、アイドウン・レイスのターバンには貴金属製の冠が置かれていた。彼は特に船と、船の積荷を喜び、幸せな気持ちで王宮を後にした。スルタンは私の艦隊がサライブルヌの前から離れていくのを見物に行くために夏の離宮に赴いた。艦隊は全ての大(p75)砲の空砲を鳴らしてスルタンに挨拶した後海に出た。

アイドウン・レイスは **Aylonya** と **Dorac** に寄りつつヴェネツィアに入った。暫く巡回した後、湾から出た。シチリアを通って **Balear** 島にやって来た。マヨルカ島から大量の捕虜と戦利品を得てアルジェに戻った。10 隻のガレー船でアルジェを出発したアイドウン・レイスはスルタン・スレイマンが与えた 3 隻のガレー船のほかに 15 隻を手に入れていた。彼が 28 隻の船で港に入るのを見ると私たちは皆大喜びした。手に入れられた船の大部分にはコーヒー、米、ラシャ、鏡、拳銃、銃が積んであった。

私たちは直ちにアイドウンを受け入れた。私はスルタンの手紙が入っている朱色のビードロ色の袋を、完全なる尊敬の念によって 3 度口付けして頭に置いた後に、開いて読んだ。それはこのように始まっていた。

「私の部下であるベイレルベイの戦士ハイレッディン・パシャよ。お前が送った 300 人の兵士はこのスルタンに喜ばれた。神がお前とその仲間にご加護と勝利を与え、この世とあの世においてお前の顔が高貴になるように。私が送った武器弾薬と物資ですばらしい装備を施して、地中海での私たちの敵と決心しているスペイン人異教徒に隙を与えないように。

私が与えた花輪はターバンにつけ、旗はガレー船に掲げよ。私の金糸刺繍入りの朱色の旗は、名誉と尊厳に反論の余地を残さない。」

スルタンの命令を、金糸の **mucibince** 刺繍入りの旗をアルジェのパシヤの門の前、つまり高貴なる所に掲げさせた。毎日太陽が沈む時に儀式と軍楽隊をつけて旗を降ろして袋に入れさせて、翌日太陽が昇るときに再び儀式とともに掲げさせた。航海にでるときには旗は私の船につけさせた。今年もアルジェの都とその周辺のあらゆる孤児や貧しい少年と年頃の少女を集めた。少年たちには割礼させて、娘たちは結婚させ、皆に施しを与えた。神は

(p76)善の道で費やした全ての労力と資源に対してそれ以上の恩恵を与える。このことを私は自らの人生を通して経験した。善の道においてどれ程の資源を費やしても、神はたちまちに 2 倍、3 倍に相当する恩恵を与えた。

■ 私は王たちの間で笑いものになった！

一方でカルロス王は「私は王たちの間で笑いものになった。」と海軍将校や陸軍将校を叱責して、誰も私たちに敵わなかったことで火あぶりにされた。会議にいたジェノヴァ人海軍将校アンドレア・ドーリアはカルロス王の前に跪いて言った。

「ご安心下さい王様。私が直ちに言って“バルバロス”という名の宗教敵を鎖につないで、あなたの前に連れてきます。お望みの方法で殺して、彼の兄オルッチのように地獄に送ってやればいいでしょう！」

このためカルロス王の顔はほころんだ。アンドリア・ドーリアには大きな信頼があったのだ。王はこのジェノヴァ人は結果を残すと思っていた。この会議とドーリアの発言の後すぐに私は情報を得た。ヨーロッパの多くの州に私のスパイがいたのだった。これとともに異教徒にもアルジェと他のイスラムの国々にスパイがいた。私はアルジェからの情報を漏らさぬように注意深く行動した。だが、スルタンの最も活気に満ちた市場の一つであるこの港から軍隊の情報が漏れることを完全に防ぐことは不可能だった。

アンドレア・ドーリアは私を捕らえるための幻想とともに航海にでた。彼の統治下には 20 隻のスペインのガレー船とジェノヴァのガレー船 10 隻があった。怪物のように巨大なガレー船で、私のガレオン船よりも大きかったが、私たちの船ほど快速ではなかった。私にはその時アルジェに 35 隻のガレー船があった。私はクルドール・ムスレッディン・レイスへ艦隊の戦闘準備を命じた。というのも、ドーリアが **Balear** 諸島からマヨルカまでやって来たとの情報を得たのだった。だが、ドーリアはカルロス王に語った言葉にもかかわらず、アルジェまでやって来る勇気がなかった。彼はシェルシェルの港を攻撃した。この港はし(p77)かしながら数百人の水兵が守っていた。水兵はドーリアを見ると籠城した。ドーリアの兵がこの港と都の略奪に精を出していると、水兵は敵のこの不注意を利用して城から出た。ドーリアはこのようなことは予想していなかった。水兵は恐怖から城に入ったのだと

思っていたのだった。水兵は都に散った異教徒を別々に襲って梃で切った。こうして数百人が殺された。残りは船に身を投じ始めたが、1700 人がトルコ人の捕虜になった。私はドーリアがシェルシェルに兵を向けたことを知るや否や、40 隻の船でアルジェの港から出てシェルシェルに舵を取った。ドーリアは私の行動を知ると直ちにシェルシェルから離れた。しかし私は敵の後衛艦隊に追いつくことができた。ムスリムの捕虜たちは、今がチャンスだ、とばかりに「アッラーよ！」と言って逃げて鎖から開放された。私たちの側からは 300 人以上の水兵が戦死したが、敵の全 8 隻の艦隊を拿捕した。

私は道中拿捕した敵船とともに 60 隻の船でシェルシェルにやって来て投錨した。この 60 隻の船のうちの 7 隻はジェルベからやって来たシナン・レイスの艦隊だった。私が計算させたところ、異教徒の手から計 2200 人のムスリムの漕ぎ手が救出していた。全員を解放した。この一部を私の部下にして、一部にはお金を与えて故郷に送った。敵船から私たちが得た異教徒の数は 1900 人だった。中にはヨーロッパの人々が「海軍将校」と呼んでいるものや、高い階級の船長もいた。全員漕ぎ手にした。しかしシェルシェルでは数時間だけ留まった。アルジェから出発した 3 日後には再びアルジェに戻った。

■ アイドゥン・レイスが大西洋で

私はアンドレア・ドーリアを捕らえなかった。強力な艦隊でアイドゥン・レイスを追跡に派遣した。アイドゥンはセブテまでやって来て、更にはジブラルタル海峡を渡って大西洋に出た。しかし敵には出会わなかった。このため引き返して Balear 諸島のうちのマヨル(p78)カとスペインの地中海沿岸を攻撃した。3000 人以上の捕虜が船を一杯にして、バルセロナ港の近くに入った。バルセロナのすぐそばには大きな修道院があった。スペイン王が毎年やって来てこの修道院を訪問することが伝統であった。アイドゥンはここを制圧した。80 人の修道僧と 36 の宝物庫を手に入れた。純銀のキャンドルの重さは 25 カンタルあった。アイドゥンはこの襲撃で本当にすさまじい打撃を与えた。合計 55 隻の巨大な船異教徒の船でアルジェに入った。ドーリアのシェルシェル遠征は十分に返礼させられたのだ。

来訪した船によってアルジェの都はインドの国々の都以上に **nümne oldu**。承認は 1 アクチャだった商品を 10 アクチャで売って金持ちになった。アルジェの刑務所の捕虜の数は 16000 人に上った。私たちの漕ぎ **çakılı** 手奴隷、家庭で奉仕する奴隷はこの数字に入っていない。この捕虜のうち最も良好なものを漕ぎ手に分配して、スルタンの歓待の漕ぎ手にするためにイスタンブルに送ることに決めた。アイドゥン・レイスは 15 隻のガレー船でイスタンブルに出発した。

アイドゥン・レイスは出発してから 27 日目にイスタンブルに着き、スルタン・スレイマンの御前に出た。スルタンは私の手紙を自ら読んだ。アイドゥンは大臣やほかの有力者も訪問して、全員に私が送った贈り物を渡した。彼は大いなる栄誉と歓待を受けた。スルタン・スレイマンはアイドゥン・レイスを御前に呼んで、自ら彼に話しかけた

「アイドゥンよ、私はアルジェのベイレルベイであるハイレッディン・パシャの働き全てに満足させられた。お前に 5 隻の船を与えよう。船にどれほどの荷を積みようとも、どれだけ必要であろうとも、大砲、道具、そして残りの船の装備に使う者を積むようにカプタン・パシャに命令した。お前たちには特に、新しく鑄造された大砲が必要だ。取れるだけここから取るがいい。また、何人かの大砲技師も与えよう。アルジェの我が艦隊が非常に(p79)強力で、常に戦闘に備えているように。私が得た情報によれば、カルロス王はアルジェに対して非常に悪しき企みを持っている。決して警戒を怠ったり油断したりしてはならない！」

アイドゥン・レイスはイスタンブルから発って 41 日目にアルジェに戻ってきた。彼は 15 隻のガレー船で遠征を始めさせ、スルタン・スレイマンから 5 隻のガレー船を得て、道中に 7 隻の異教船を拿捕した。帰路ではいくつかの異教徒の町を襲って、700 人の価値ある捕虜を得た。

アイドゥンは私にスルタンの手紙を渡した。私は手紙が入っていて、オスマン朝の色である朱色の袋に 3 回口付けをして頭に乗せ、手紙を取り出して読んだ。私はすばらしい命令を暗記した。その後、スルタンが自ら私に与えた着物、クロテンの毛皮、宝石をあしらった時計と剣、戦旗を敬いの念とともにアイドゥン・レイスから受け取った。

この時カルロス王は大変困難な状況下にあった。弟のフェルディナント王がウィーンから助けを求めているのだ。というのも、スルタン・スレイマンがハンガリー国境をフェルディナント王に対して使用禁止にしたのだった。カルロス王は見たところ私たちと戦う力は十分ではなく、再びトレムセンのベイに反乱を起こさせた。トレムセンのベイに大金を送り、再びアルジェの太守の座を確約した。実際に王は彼であったので、彼は所有する不動産をほかの人に約束した。カルロス王は何度試みても手に入らない国をむやみにそこら中に不当譲渡した。しかしトレムセンのベイはこの *vade kandi*、そして反乱を起こした。私はデリ・メフメット・レイスを 40 隻の船とともに地中海遠征に派遣した。私もトレムセンに進軍して、モロッコ国境の大きな町（トレムセン）にやって来た。かすかな抵抗にあったが、トレムセンは逃げた。彼は宗教家を送って許しを乞うた。私は、自ら私の所にやってきたならばおそらく許すだろうと言った。彼は来た。滞納中だった税金の金貨 110000 枚を渡し、私の足元にひれ伏した。

「おい異教徒よ、イスラムに改修しろ！なぜならば、お前は偉大なる宗教、私たちの敵(p80)になびいて、ムスリムのカリフでこの世の王たるスルタンのこの国における代理人である私に剣を向けたのだから！」

トレムセンのベイは *kelime-i şehadet getirip tecdid-i iman etti*。離縁された妻は再び婚礼の犠牲にされた。

私がトレムセンにいた時にデリ・メフメット・レイスは 40 隻の艦隊でスペイン艦隊に遭遇した。35 隻中 29 隻のスペインの異教船が激しい海戦の末に降参して、そのほかの船は逃走した。このトルコ人の大勝利がバルセロナにいるカルロス王の耳に届くと、彼は悲痛で

途方に暮れた。実際、ドイツでスルタン・スレイマンに負かされた悲しみで彼は口もきけなかった。

■ 私の艦隊が 21 度目のスペイン遠征に出た

この遠征に力を得たイベリア半島のムスリムたちはスペイン人に対して立ち上がった。山から下りてきた 80000 人のイベリア半島住民はスペイン人異教徒の大軍を乱した。スペインでのムスリムの蜂起の報を受けるやいなや私はデリ・メフメット・レイスを 36 隻の船で救援に送った。イベリア半島の岸にやって来たメフメット・レイスは反乱を支援し始めた。それまでに私の艦隊は 21 回の遠征を行い、全ての遠征で数千人の男、女、子供をスペインの砲火と剣から救い、北アフリカに送った。この遠征の大部分において艦隊の指揮は私が取った。アイドゥン、シナン、サヒル・レイスも幾度か遠征の指揮を取っていた。神よ、全てに同意したまへ！このスペイン人異教徒は他の西ヨーロッパ人とは違っていた。非常に残虐で、血を好み、一人自慢する犬の群れなのであった。スルタン・スレイマンは父である故スルタン・セリムと祖父である故スルタン・バイエジット二世のように、このイベリア半島の太守にできるだけ援助を保った。この紛争中に私はスルタンからの勅令をたびたび受けた。

(p81)ある日、スルタン・スレイマンの部下であるシナン・アーがアルジェにやって来た。スルタンの手紙を取り出して私に渡した。私はすばらしい手紙を、敬意を表しながら受け取って 3 回口付けをし、頭に置き、開けて読んだ。スルタン・スレイマンはこう言っていた。

「アラブ人のアルジェの鞍、バイレルベイである戦士ハイレッディン・パシャよ。お前の知るように、スペイン王に向けた遠征軍を私は求めている。私の命令とは、使用度の低い所を見捨てて、イスタンブルに戻ることだ。Eğer muhafazaya kadir ademin yoksa bildiredin!」

私は手紙を読むと直ちにシナン提督に言った。

「スルタンの使者殿、私は直ちにイスタンブルに戻り神聖なるスルタンの下に顔を出します！」

私は直ちに用意を始めた。スペイン王カルロスは、スルタンが私をイスタンブルに呼んだことを知るとひどく慌てて、大將校アンドリア・ドーリアに私の進路を断ち切るように厳しく命令した。これに関しては、私もとても強力な艦隊でイスタンブルに戻る必要があった。そうすれば、地中海のどこかでドーリアと対峙して身の程をわきまえさせることができるのだ。アルジェにわずかな軍を残せば、数万人のキリスト教徒の捕虜を換金していくことは可能だった。このキリスト教徒の捕虜の保持にはメフメット・レイスが責任を持った。私は親戚であるメフメット・レイスを呼んで、彼に必要な命令を与えた。私のいない間に捕虜をしっかりと保持することと、注意すべきことについて話した。

しばらくして、この世の王都イスタンブルに行くためにアルジェから出航した。艦隊から 26 隻のガレー船を選んで、残りはアルジェと西地中海に残した。神の恵みにより、地中海で 18 隻の異教船を拿捕したので、イスタンブルに 44 隻の船で入る運にめぐり合った。

私の下には 18 人のレイスがいた。みな地中海で高い名声を持つ船乗りであった。地中海 (p82) を横断中に、スペイン人異教徒に属するイタリア南海岸を攻撃することはなかった。スルタンはスペインと交戦状態だった。私はまず **Sarduna** 島の西海岸に出た。その後北に向かってジェノヴァの前にやって来た。そこからイタリアの海岸線をたどりながらメッシーナ湾に入った時に、18 隻のスペイン艦隊とであった。激しい海戦の後に 18 隻を拿捕して予備の船にした。こうして私は「スペイン遠征が我が望みだ！」と言った偉大なスルタンを大喜びさせる勝利を収めたことによる希望の中にいた。

アンドレア・ドーリアと言う名以上に偉大な異教徒の海軍将校はというと、この間に **Mora** の海岸にたどり着いていた。彼は私の勝利を聞くと度肝を抜かれた。彼は **İyonya** 諸島に逃走したので、私もそこに行った。だが、ドーリアを捕らえることはできなかった。一体、彼は地中海のどの隅っこに洞窟を見つけて潜んでいたのだろう。その後、ジェノヴァに逃げたと知ったので、25 隻の船をドーリア追跡に送った。この艦隊はドーリアの 7 隻からなる艦隊に出くわした。加えられた攻撃によって、2 隻のガレー船が降参し、5 隻が逃げた。私は **İyonya** 諸島から南下して、**Mora** 海にやってきた。ケマンケシュ・アフメット・パシャは海軍提督だった。彼はスルタンの艦隊の一部とともに **Mora** の南西の **Navaris** 港に停泊していた。2 つの艦隊が退治すると、大砲で挨拶した。私はアフメット・パシャと会い、一緒にスペインに行くことを決めた。

²⁰冬の素晴らしい日にイスタンブルに着いた寒さにも関わらずイスタンブルの上品で幸福な人々は見物できるように、海岸に山のように集まった。おそらく 20 万人いただろう。全ての砲を何時間も鳴らしてスルタン、王都、この都の知識と上品さと親切さが世界で評判名人々に挨拶をした。18 人の名声ある船長と提督たち、そして残りの水兵たちと漕ぎ (p83) 手たちから飾りつけた小船に乗って海岸に出た。²¹歓声を上げる人々は喜びと愛情で挨拶した。

行列の先頭には 200 人の捕虜が歩いていた。彼らの手には金、銀製で、その全てがヨーロッパの有名な宮殿から持ち出してきた分捕り品を運んでいた。その後 30 人の **firenk asilzade** がやって来た。彼らはヨーロッパの名声ある海軍将校、陸軍将校、知事、貴族たちであった。中には王の親戚もいた。この後に金と銀の袋でいっぱい袋を背負った 200 人の奴隷、さらに後からは 200 人の子供の奴隷が従った。子供たちの頭と首は宝石で埋まっていた。彼らの肩には金と銀の糸が引かれた大変高価な生糸の玉があった。この一団を、ヨーロッパの様々な国に属する最も美しい 200 人の娘が続いた。彼女たちは最も高価な生

²⁰ 1533 年 12 月 27 日

²¹ この時代において “**aklis tutmak**” は “**yasa! Var ol!**” のような歓迎をしていることを意味した。手を叩いて拍手する行為は知られてなかった。

糸でできたドレスを着ていて、非常に高価な宝石も着けていた。その後やって来た 100 頭のラクダのキャラバンはぎっしりと戦利品を積んでいた。このキャラバンの後を、アフリカで最も珍しい動物から構成されるキャラバンが続き、金と銀の鎖でつながれたキリン、ライオン、ヒョウ、更に沢山の動物と世話する物を運んでいた。

この一団の後、私と船長と家来たちが進んでいた。しかし私たちは質素な格好をしていた。こうしてトプカプ宮殿にやって来た。私はスルタンの宮殿の門にたどり着いたので幸福だった。私が聞いたところによると、凱旋団を見て育ったイスタンブールの人々ですら私が見せた豪華で、生き生きとして、カラフルな行列は見たことがなかったようだ。神が真実を知っている！

翌朝私と 18 人の船長はスルタン・スレイマンによってスルタンの御前に通された。スレイマンは私と 18 人の船長一人一人の手に口づけする形で、私たちに目に見えぬ好意を示し(p84)た。これがどれ程強い好意であるかをはっきりするためには、ヨーロッパの王たちの最高の大臣の *eteklediklerini* を思い出す必要がある。

■ 海軍提督

謁見式は堂々たる内容だった。スルタンの儀式が儀式特有の作法で集められた。大臣全員が揃って、スルタンの両側に並んだ。ただ一人、アレppoに在る大宰相イブラヒム・パシヤがいなかった。68 日前にイラン遠征に行くためにイスタンブールを出発していたのだった。

スルタンは、私が持っていった *acizade* 贈り物に礼を言うために身をかがめた。そして私と船長に着物を着せた。これはすばらしいことで、今日までうれしい思い出である。スルタンはこう言った。

「パシヤよ、私はお前を海軍提督にしたい。私はお前がスルタンの艦隊をどうやって指揮し、どんな勝利をあげるのか見てみよう！アルジェのベイレルベイの地位もお前に残そう。お前が望み誰かを代理にしてアルジェをお前の名で統治するのだ！だが、この件は全てアレppoに在る大宰相イブラヒム・パシヤと会う必要がある。直ちに馬を飛ばしてアレppoに行け。戻った時にまた会おう！」

儀式の後、私は一人でスレイマンと会った。スルタンはスペインを西地中海で叩くことを命じた。一度ドーリアについて語ると、*nefsimi zaptedemedim*。

「スルタンよ、ドーリアがどんなに酷い奴であるのかを神聖なあなたの口が言われるのですか？」と私は言った。

突然私は自分が行った無知を理解し、恥じた。スルタンに対してこのように話すことはありえないのだ。とても寛大なスルタンは微笑んで、大目に見ることをほのめかした。私は安堵した。数日イスタンブールに滞在した。私は軽快に命令を出した。10 日でアレppoに(p85)やって来た。人の話によれば、今までにイスタンブールからアレppoの道を 10 日でこな

したものは聞かれたことがないらしい。ブルサとコンヤでのみ一泊した。他の夜は酷く疲れれば馬から下りて適当な場所で 1, 2 時間眠り、そして起きた。コンヤへ着くと **Mevlana Celaleddin Rumi** 政権の適当な立場の者を訪問した。

10 日間の後やっとアレppoにやって来た。大宰相イブラヒム・パシャが滞在している宮殿に出向いた。パシャはスルタンと同年代の 40 歳台で、上品で、親切で、とても頭の切れる男だった。アレppoに滞在していた丸二日間彼とヨーロッパの政治状況、スルトンの艦隊の動きについて語りあった。彼は私が海軍提督であることを示す勅令書を私に渡して、背には着物を着せて、道中の無事を願った。

再び 10 日でアレppoからイスタンブルに戻った。私は世界で最も偉大な艦隊の提督になったので計り知れぬ喜びの中にいた。この様な偉大な艦隊であったので、ヨーロッパ中の艦隊が協力しても沈めることはできなかった。

■ 私はもはや世界で最も偉大な艦隊の提督であった

私は直ちにイスタンブルの造船所に走った。オスマン帝国には多くの港町に造船所があったが、大規模なのはハリッチにある造船所だった。この造船所に匹敵するものは世界のどこにもなかった。どの造船所もここほど滑走路に船を置くことはできず、労働者も多くなかった。思いつく限りの **sanat erbabi** が存在していた。労働者の多くはキリスト教徒の奴隷だった。だが無報酬ではなく、給料をもらって働かされていた。給料を貯めた奴隷は誰かにそれを払って、自由になり、故郷に戻った。職人と技術者は全員トルコ人だった。像全所で働く者の数は 20000 人を下回らなかった。要望を受けると、1 年以内でヴェネツィア(p86)艦隊に匹敵するものを建造し、整備することが可能だった。実際に、イスタンブル造船所の名声は世界に鳴り渡った。だが目で見て中に入らねば、大きさの程はわからなかった。こうして造船所は、これほど裕福な国家によってあらゆることを行うこと、神の許可によって成功することが可能であった。私はイブラヒム・パシャに、すでに発見された新世界への遠征を私たちが組織したならば利益をあげられることを述べた。しかし、彼は遠方の海での仕事はないこと、地中海とインドの海を手にするだけで十分であるとの返答をし、許可しなかった。

私は造船所での地位において艦隊の整備、新しい船の装備に従事している一方で、イスタンブルを回っていた。全てのスルタンと大臣の墓を訪問し、オスマン朝の **mübarek ruhlarına fatihalar okudum**。

私が目にしたあらゆる場所で必要なもののある人に必要なものをもたらしした。人々に伝わった私たちの評判は、私たちより先にイスタンブルに到達していた。人々はあらゆる場所で私たちを知っていて、地中海とアフリカでの戦闘についても知っていた。イスタンブルの人々は私をすごく好いていた。私も彼らが好きだった。まだ私が訪れていない国も少しあった。海峡の町に行き着いた。どの界限でもまるで天国からの勲章を与えたようだった。

私はボスポラス海峡のマルマラよりの場所に土地を持って、私の墓を海辺に作らせることにしよう。

私が艦隊提督に就任したことは、ヨーロッパで大いに影響があった。特にカルロス王はかなり狼狽した。私は春が来ると、スルタンの艦隊からの 80 隻でイスタンブルから出航して、メッシーナ海峡にやって来た。メッシーナ海峡イタリア側の岸ではレッジョ、シチリア島側の岸ではメッシーナ港があった。私は両方とも占領した。16000 人の捕虜が船を一杯にした。捕虜の数は艦隊の乗組員の数を超えた。この遠征で合計 18 の城を占領した。18 の城の鍵、16000 人の捕虜、425 箱の戦利品を 40 隻のガレー船でイスタンブルに運んだ。私は 40 隻のガレー船とともにもうしばらく地中海にとどまった。

(p87)スルタンは私に満足した。大宰相イブラヒム・パシヤも満足した。だが、身の程知らずの上嫉妬しやすい家来たちは「スルタンのあの所業を見たまえ、海賊を海軍提督にしてしまった！」という陰口をたたくことを恥じなかった。こういった陰口をたたくもの多くはその人生で城一つ、小船一隻拿捕したことのない者達であった。しかし、スルタン・スレイマンが毎年、毎月、毎日私に一層親切にし始めると、この陰口は時とともに後が続かなくなった。嫉妬する者は嫉妬の中で留まって、外に出られないのだ。

私は海軍提督として出た初遠征でシチリアの後サルディニアに、そしてそこからアルジェとチュニスに行った。チュニスのベイは混乱して、支配下の町を残して砂漠に逃走した。私はチュニスの町に入った。国中を征服した。南のカイレバンの町にやって来た。再びチュニスの町に戻った。チュニスのベイは、何百年来この国と、一時は北アフリカを支配したハフシ王朝の出身だった。すぐにカルロス王に救いを求めた。

私はカルロス王がチュニスにやって来るとの知らせを受け、準備した。その冬中に何席かの船を西地中海のスペインの国々を攻撃するために派遣した。サルディニアに向かった船は 12000 ドゥカート金貨、475 人の選び抜いた捕虜、その他の戦利品とともに帰還した。ついにカルロス王が自ら指揮をとる大艦隊がチュニスの前に現れた。艦隊にはカルロス王が支配する全ての国々、スペイン、ドイツ、イタリア、オランダからの何万もの兵がいた。

カルロス王は 500 隻の戦艦と輸送船でバルセロナ港から 17 日でチュニスにやって来た。彼はチュニスの都を取るためにハルクル・バード城を落とす必要があった。城は最も優秀な船長のうちのシナン・レイスが防衛する予定だった。包囲が始まった。異教徒の軍隊はカルロス王自らが指揮を執り、艦隊指揮はアンドリア・ドーリアが執った。シナン・レイスは 120 門の大砲を持ち、敵は数百の陸用と海用の大砲を持っていた。シナン・レイスは、敵に対して 3 度船から huruç 活動を行って、6000 人の喪失を与えた。私はチュニスに (p88) て、チュニスのベイであるメブライ・ハサンに対して警戒した行動をとっていた。私の下には 12000 人の兵士がいたが、これらの半分は兵役の法則によれば戦闘を知らない、土着の心を持ったものたちで、戦闘が怖気づくとみな逃げ出し、さらには敵と結びつくことを問題にしなかった。私の望みはハルクル・バード城を可能な限り耐えさせることだった。というのも、私はイスタンブルに緊急の連絡を行って、スルタンの艦隊に直ちに到着する

よう命令を下したのだった。艦隊が到着すれば、カルロス王は二つの砲火の間にあって混乱すはずだった。カルロス王もこのことを知って、少し前にハルクル・バード城を落とすために最大の損失を決行していた。ハルクル・バードは、丸々ヶ月耐えた。ヨーロッパの最大の軍隊に対してこれほど耐えられたことは大きな成功だった。シナン・レイスは、**huruç** 活動の中で **Sarno Dukas** や **Monderia Markisi** のような最も有名なスペイン人司令官を殺した。メブライ・ハサンも、1600 の騎兵と 8000 頭のラクダに積んだ保存食と軍需品とともに私の下にやって来た。私は二つの砲火の間にいた。ハルクル・バード陥落の日、陥落を知るとチュニスの都の人々に反乱指令が与えられた。

予想通り、私の支配下の 6000 人のアラブの奉仕人はこうした弊害のある行動によって裏切った。というのも少し前に南に退散しなくてはならなかったのだ。こうして奉仕人はカルロス王に取り入るため、私が 6000 人の水兵とともに城壁の前にやってきた時、彼らは刑務所を開放して 10000 人のキリスト教徒の捕虜たちを解放した。中にはトルコ人を好み、このような愚行を行うほど信仰に寄っているものもいた。しかし、**sözde** 統治者メブライ・ハサンのスパイは、チュニスの都で雲行きを怪しくさせて、スペイン人の国をトルコ人から救うためにチュニスにやって来たこと、メブライ・ハサンがカルロス王と同盟を組んだことを口から口に広めて、スペインが都を手にしたならば **bir tek Müslüman'ın burnunun kanayacağını söylüyordu**。こうして、この敵の環境の中、都の中の 10000 人のキリスト教徒の捕虜の保護の一方で、他方では異教徒と戦うことは不可能に見えた。ちょうどこの時、ハルクル・バード城が陥落した。だ

(p89)が、シナン・レイスは生き残った水兵とともに救出されてチュニスの都にやって来て、私と合流した。老齢な船長のこの成功はあらゆる認識の上を行った。私ですら残虐な敵に対してのシナンと水兵たちの生存はあきらめていた。ハルクル・バード陥落の後さらに 6 日間チュニスの都を防衛して、敵に多大な喪失を与えた。シナン・レイスはハルクル・バードからつれてきた水兵とともに私の軍隊は 9700 人になった。この軍隊でカルロス王の 30000 人の軍隊、500 隻の船、何百という大砲、私たちのところへ北上してきたメブライ・ハサンに対抗することは不可能だった。さらに、ハルクル・バードにあった 40 門の大砲と重大な量の物資も敵の手に渡っていた。メブライ・ハサンはカルロス王の野営にやってきて、異教徒の王の靴に口付けをした。このため大勢のアラブ人軍も私たちに対抗して招集され始めた。最初の大係名攻撃で私は 2500 人の犠牲を与えた。残った 7200 人ではもはや戦えなかった。²²ちょうど夏の真っ盛りであった。天気はもの凄く暑かった。

最後の移動を行った。戻るとチュニスの人々は都の門を私たちの鼻先で閉じた。もともとジャーフェルという名で新しくムスリムになった異教徒は、刑務所の門を開けてキリスト教徒捕虜たちを都に放し、これらはチュニスに従った。私は大変恐ろしい敵陣突破を行った。地上にも空にも「アッラーアッラー」という声が響いた。水兵たちの叫び声は雲に反響して戻ってきて、敵の心臓を震えさせた。大部分がマラシュの住民である水兵たちは

²² 1535 年 7 月 21 日

数千人が死んだ。偉大な神は知っているが、私も彼らの中に入りたかった。自分の命が助かったことをそういった観点から満足した。というのも、ヨーロッパの有力な貴族の中には私が鎖につながれるのを見るためにチュニスまで苦勞してやって来た者たちがいたのだった。彼らのこの望みは実現で見ぬまま終わった。私はアッラーが自分の命を救ってくれたことに感謝するために、当然かなりのムスリムの恨みをカルロス王の下にすえる予定でいた。私の下にはアイドゥン・レイス、シナン・レイス、そして一騎数千力の水兵が残った(p90)ていたが、敵の戦線を順々に裂いていった。私はチュニス湾に完全に到達した。シチリアの南西に見える **Beledul-Unnab** 岬にやって来た。ここで 14 隻おガレー船が私を待っていた。ちょうどこの時にアイドゥン・レイスが溺死した。トルコの国家が今日までに輩出した最も偉大な故人は、ケマル・レイスの下で育ち、兄、そして私のもとでヨーロッパ中に響き渡った名声にいたった。 **Tanrı makamını Cennet eylesin !**

■ チュニスでの十字軍戦士の蛮行は大変恐ろしかった

チュニスの都はアフリカで最も大きい町のひとつであった。十字軍はこの大きなムスリムの町に入った。30000 人のアラブ人を虐殺して、10000 人の女子供を捕虜にした。モスク、メドレセ、墓が破壊された。王宮、離宮、家々は略奪された。図書館の何万もの書物が焼かれた。最も珍しい芸術作品が消えてしまった。私と船長たちを捕まえられなかった恨みを異教徒は哀れなムスリム住民にぶつけた。特にスペイン人は愚行を率先した。72 時間の略奪と虐殺の後カルロス王は廃墟と殺戮場と化した惨めな町に入った。馬の蹄は、通りから排水溝のように流れる血で真っ赤になった。

この間チュニスの町とその周辺は、ハフシ家の人々が実際にスペイン人の手にわたった。国の南と東海岸の全域には私たちがいた。チュニスの町のこの支配は 10 ヶ月間続いた。しかし、絶対に私たちはここに戻ってくる。私はチュニスからアルジェにやって来た。32 隻の船でアルジェから出航して、バレアル諸島に到達した。私はマヨルカとミノルカを略奪した。マヨルカとパルマの港から 5500 人の捕虜を集めた。その後セブテ海峡のオクヤヌスに辿り着いた。ポルトガル南方のファロ港を破壊した。

(p91)ファロの海で巨大なポルトガル船を手に入れた。船は 76 門の大砲、乗組員 300 人、数百人の漕ぎ手がいた。インドからやって来ていて、とても高価なインドの物資のほかに金貨 36000 枚を運んでいた。船がそれほど大きく、また美しかったので沈めるのは忍びなかった。予備としてアルジェまで持ってきた。アルジェには長居せずに、イスタンブルにやって来てスルタンの御前に行った。スルタン・スレイマンは特別会議で **yalnız başlarına kabul duyurdum**。私は全ての遠征の話をした。スルタンは真珠の数珠、輝く印章、宝石のついた金の時計、3 羽の高価な鳥で出来た贈り物を受け取った。その後大臣たちを訪問した。彼らにも贈り物を贈った。戦利品の中から宝物庫の分け前である 5 分の 1 を差し出した。私は造船所にやって来て職務についた。不在期間の仕事についての情報を得た。造船所の

技術長官を呼んだ。再び 30 隻のガレー船造りの手はずを整えるよう命令した。この間にスルタンと一緒に遠征に出る予定であった。私はスルタンの艦隊の指揮をとった。スルタン・スレイマンは軍隊の指揮を執って陸からアドリア海岸にやって来た。

遠征はヴェネツィアおよびスペインに向けてであった。スルタンの願いはヴェネツィアからコルフ島を、スペインからイタリアの南東のオルラント港を手に入れることだった。アドリア海に入ると、ヴェネツィア艦隊の大部隊を目にした。直ちに攻撃に移って 14 隻のガレー船を沈め、16 隻を拿捕した。残りは逃げた。大臣とベイレルベイたちは指令船にやって来て勝利を祝福した。スルタンは陸から、私は海から艦隊とともにイスタンブルに戻った。翌年エーゲ海でヴェネツィア人異教徒の手に残った最後の島々、ケルペ島とカショット島を征服してギリット海岸を焼き、ヴェネツィアに和平を強制した。しかし何よりもまず、エジプトのイスケンデリエからやって来たサーリフ・レイスの艦隊を、アンドリア・ドーリアから守る命令を受けた。

サーリフ・レイスは、エジプトから「インドの宝」をもたらした。この宝は偉大なインドの統治者 Gucarat シャー バハドウル・シャーによってイスタンブルに持ってこられた。(p92)バハドウル・シャーは、インドの海でポルトガル人を掃討するために私たちの救いを求めていた。私はイスタンブルから出発して 6 日後に、エジプトのベイレルベイである大臣スレイマン・パシャが大艦隊でインド遠征に出るためにシュベイスから出発した。アンドリア・ドーリアは、私を除くとサーリフ・レイスを一番憎んでいた。思いもよらぬ大胆不敵さ、他に見られない洞察力、海兵としての天分才によって、サーリフは全ての異教徒の支配者と海軍将校を怖がらせていた。今サーリフが膨大な量の宝をイスタンブルに運んだことを聞いたため、ドーリアは大艦隊でサーリフの艦隊を追跡し、一石二鳥で捕らえることを望んだ。サーリフは 20 隻の船を持っていた。しかしドーリアは私が 40 隻のガレー船でサーリフと合流したことを知ると、災難に首を突っ込むことをあきらめて、習慣であるために地中海の隅に逃げた。

ヴェネツィア人から 28 の島と 7 の城を征服した後、全部に衛兵を配置して国家に加えた後、私はアーウルボズにやって来た。20000 人の捕虜を手に入れて、これらをイスタンブルに送った。ここで、ほとんど全てのヨーロッパ艦隊がアンドリア・ドーリアの指令下に召集されたことを知った。20 席の船でトゥルグト・レイスを偵察に派遣した。だが、トゥルグト・レイスがよこした情報を待っているのは耐えられず、アーウルボズから出発した。モラの南からたどり着いた。私がモドンにやってきた時十字軍は、コルフの海に召集されていた。私はモドンを発った。モラの海岸を南から北に抜けてアルタ湾に入った。この湾の北西の端にプレヴェザ城があった。湾の入り口はかなり狭かった。プレヴェザ城のオスマン朝の大砲を黙らせることなくしては—これは相当難しいのだが—どんな敵も、その船がアルタ湾に入ることは不可能だった。他にはスペイン、ヴェネツィア、ローマ教皇庁、フローレンス、マルタ艦隊といったような、カルロス王召集してアンドレア・ドーリアの指令下に与えられた艦隊はその規模の大きさは、私の人生の中で一艦隊としては見た

ことも聞いたこともないほどで、歴史の本で読んだこともなかった。異教徒には 600 隻以上の船があった。このうちの 308 隻が戦艦で、120 隻が最大の手漕ぎ船だった。艦隊にはオールを漕ぐ何万もの漕ぎ手のほかに 60000 人の兵士が乗っていた。何隻かには 2000 人以上の兵士がいた。浮遊城のように海の上に漂っていたが、その動きは重々しかった。私(p93)には 122 隻のガレー船があったが、輸送船はなく、外洋での戦闘において援助する船の見込みもなかった。漕ぎ手のほかには 20000 人の水兵がと狙撃手がいた。こうして、両者の漕ぎ手の数を合わせると 120000 人になったが、これまでに人類が海上で相対したことが見聞きされたことは、他に思いつかない。

船長たちは、大提督の司令室に招集された。私は全員と相談した。トゥルグト・レイスのように最も大胆な者、サーリフのように最も頭が切れるものですら、十字軍が早々に立ち去って出て行くまで湾から出ずにいることを主張した。私はこの考えを受け入れなかった。実際、敵は私たちに 3 倍、もしくは 4 倍は優れていた。だがこの優位性を私たちの艦隊を最良の形で動かし、指示を与えることで補うこと、さらには勝利することは可能性がないとされていた。見聞きした規模において同盟艦隊が私たちと対峙することは私たちにとって破滅ではなく、幸運の恩恵であった。実は私は敵から隠れて海岸を十字軍に開放していくことはできなかった。こんなことをしたならば、明日どの面を下げてスルタンの御前に赴くことができよう？

■ プレヴェザの海戦

トゥルグットが指揮する艦隊を従えて私は湾から出た。私が湾の中に潜んでいると考えたアンドレア・ドーリアは、このようなことは予想していなかったのでひどく驚いた。戦闘状態をとれるよう、その日の戦闘は受け入れなかった。北東に向かって漕ぎ出し、戦闘(p94)状態になった。²³翌朝再び向かい合った。私はスルタンの艦隊の両翼の中央の、真ん中先頭に位置取った。司令室には息子ハサン・レイスと精神的な息子であるもう一人のハサン・レイスがいた。老齢のシナン・レイス、ジャフェル・レイス、シャバン・レイスがいて、中央先頭にはチャナッカレのサーリフ・レイス、左翼には偉大な知識人であり詩人でもあるセイディ・アリ・レイスが、後衛には呼び艦隊の先頭にトゥルグト・レイスがいた。ムラド、サドウック、そしてギュゼルジェ・メフメット・レイスは、トゥルグットの指令下にいた。

敵が多く、多くの観点から私たちよりも優れていたのに対して、私たちにも幾つか優れた点があった。最も重要だったのは、私の艦隊の全ての船とガレー船に私が指示を飛ばしていて、どんな命令も同じ時に一番離れたガレー船によってすら実行されることだった。敵の状態はこの反対だった。ドーリアは他の船と部隊にすら命令を下していなかった。実は敵艦隊はお互いの言葉が通じず、お互いにねたみあう類の人々が艦隊から出現していた。ヴェネ

²³ 1538 年 9 月 28 日

ツィアの偉大な海軍将校 **Vincenti Capello** と教皇の艦隊の指揮を執ったのは **Marco Girmani** で、ドーリアを好いていなかった。もう一つの私たちが有利な点は、大砲であった。私たちの大砲の射程は敵のそれよりも長かった。このことを一時も忘れることなく私の艦隊を敵から適度な距離を置いておけば、私たちの砲弾が異教徒の帆柱を破壊する一方で、彼らの砲弾は私たちの船の何アルシュンも前で海に落ちて、異教徒の船長は怒り狂った。しかしながら、彼らはどうすることもできなかった。こうした時にドーリアはおかしな状況になっていることを理解して、彼の艦隊にもっと私たちに接近するよう指示を飛ばした。だがこの命令は軍事演習が始まったときには手遅れだった。私たちは敵の艦隊をだめにした。更なる優位性は、私たちの船の軽さと快速なことにあった。敵のガレー船よりもより素早い私たちのガレー船は、易々と射程圏内に出入りできて、異教徒の船を好きな角度から攻撃できた。その他の有利なことは、私たちの水兵はかなり軽装で、武器が相当軽い点にあった。鎧で覆われた異教徒の騎士や戦闘員たちの手には **kalıdırıncaya kadar (p95)haklarından geliyorduk**。最後に、最大の優位性は、信仰の力において神が偉大であることだ。

■ ドーリアがうろたえた

戦闘が始まって以来南風が凄く強く吹いていて、私たちのガレー船に対して逆風だった。**Kuran-ı Kerimden ayet-i kerimeler yazlı varakları derya üzerine serptirip Cenab-ı Hak ‘ın ben aziz kulundan bugüne kadar esirgemediği lütf, merhamet ve inayetini niyaz ettim**。私の祈りは受け入れられた。風はまず弱まって、その後方向が変わった。

私が述べたように、私の行動の基本的に虜で、その行動を私の行動に合わせて変更する、計画を生かせないドーリアはあたふたした。彼の歓待は散り散りになった。頃合がやって来た。後衛のトゥルグトに異教徒の船の背後に下って引き止めることを命令した。敵が 2 つの砲火にさらされると、ドーリアは退却命令を下した。夕闇が迫っていた。ドーリアは全ての船の灯を消すように命令した。この命令は、艦隊にとって不名誉であるばかりでなく、不吉でもあった。しかし暗闇を利用したドーリアは、大艦隊の半分にも上る船を私たちの手から救って逃げた。単独で逃げた船の中には、私たちの弾丸が届いた船は殆ど一隻も無かった。カルロス王のヴェネツィア・ドーチェとローマ教皇の援助によって私たちに対抗して派遣させた艦隊の半分は海のそこに沈んだ。この艦隊は多分地中海と多くの国々を私たちから奪うはずだったのだろう。更に異教徒の支配者たちは、トルコ人のどの国がどの支配者に属するのかを決めていて、スルタンの国を妄想の中で分割していたのだった。

戦闘は 5 時間続いた。しかし何隻かの私たちのガレー船が沈んだ。トゥルグトはしばらく暗闇の中で敵を追跡して何隻かの傷ついたガレー船を拿捕した。私の息子ハサン・ベイを、**(p95)幸運な知らせをスルタン・スレイマンに届けるために直ちに派遣した**。ハサンは 17 日でスルタンの下に到達した。ボーダン遠征からエディルネに戻ったスレイマンと、ヤン

ボルの離宮で会った。スルタンの御前に出て、手に口付けをした。スルタンは会議を招集した。私が送った戦勝報告の手紙をアッラーに恩を捧げるしぐさで、足元で読んで聞いた。スルタン・スレイマンの上で沈まぬ太陽の国家において勝利の名誉な祭りをを行うことを命令した。

私は勝利を収めたスルタンの艦隊をイスタンブルに引き連れてきた。イスタンブルの人々は盛大な歓迎をした。イスタンブルに数日滞在してからスルタンにお会いするためにエディルネに行った。勝利の詳細を逐一中断しながら説明した。

翌年私は艦隊を指揮して再び遠征に出発して、アドリア海に入った。私の息子ハサン・ベイと彼の義理の父トゥルグト・レイスはヴェネツィアからノヴァ城を征服していた。ヴェネツィアは降伏して、多くの島と城を私たちに残し、莫大な賠償金を払って和解した。

■ カルロス王の裏切りの提案

カルロス王はプレヴェザ以降トルコ人を外洋で打ち負かす望みを捨てた。彼はアルジェで私がベイレルベイの代理として選んだ養子であるハサン・ベイの手からこの北アフリカの国を奪おうと計画した。少なくともハサン・ベイが 30 隻の船でジェベリタルック城を手に入れることはスペインの土地で **köprübaşı tutması**。カルロス王は絶望的なほど滑稽なことを企画していた。彼は私をだましてオスマン帝国、スルタン、イスラム、そして私の一族に対する背信することを望んだ。

彼が密かに私に送った手紙で「お前のようなアルジェの王である男がオスマン朝の平凡なベイレルベイに身を落としているのはもったいない。スルタン・スレイマンの庇護下から離れるならば、お前を紅海と大西洋の間のアフリカ大陸全土の唯一の正当な支配者とみなそう。更には私と同盟を組むことをも望む。ただ私たちの仲間になって、オスマン朝と縁を切る。それだけだ。」

この不名誉な行為を私はスルタンの議会に知らせた。そして少し前に共にイタリア遠征に出た大宰相ダーマツト・ルトフィ・パシャはこのように言った。

「パシャよ、私はのんきにしていはいけないと言いました。なぜならばカルロス王はこの絶望的な計画がうまくいかないと理解すれば直ちに別の計略を練るはずです。私の不在を利用して一度アルジェに行くといいです！」

ルトフィ・パシャは暫く考えた後、こう言った。

「パシャよ、あなたはカルロス王について私よりよく知っている。人生をカルロス王との戦いとともに過ごしてきた。あなたは警戒とは何であるか、アルジェがいかにして守られる必要があるのかを私より熟知している。艦隊も持っている。しかし、私はカルロス王の裏切りの誘いに直ちに拒絶の回答を与えるのではなく、じらせる限りじらすことを提案します。結末がどうであれ、じらすことが必要です。」

このため、私はカルロス王が私との交渉において責任を負わせたアンドレア・ドーリア

に連絡させた。不明瞭な言い分を伝えて、王の提案を議論に備えた。しかし、この件はイスタンブルで行うわけには行かない、スルタンの耳に入ってしまうので。私はカルロス王の大使を私の代理人である息子ハサン・ベイに送らせた。ドーリアは異教徒が誰であれオスマン帝国に背くことを思っでどんなに喜んだらうか！

私はハサンに必要な命令を密かに送った。カルロス王の大使を引き止めて、この間に国を大規模な出陣に備えておくように書いた。暫くしてカルロス王の大使がアルジェにやって来た。これは **Alonso do Alarkon** と **Kaptan Vergara** という名の二名の異教徒と、ロメオ医師という名のオスマン朝国籍のユダヤ人だった。暫くの話し合いの後ハサンは、二(p98)人の異教徒をアルジェから追い払った。しかしユダヤ人はオスマン朝国籍であるために逮捕してイスタンブルに送り、イエディクレに投獄した。カルロス王はこの苦い経験の後もはや空虚な幻想にじらされないことが必要だった。しかし西ヨーロッパ人がどれ程賢くとも、トルコ人には及ばなかった。後からハサンが私に書いた所によると、今回はハサンにアルジェの王位を提案したようだ。さらにはハサンを背信に扇動するために **Vahran Umumi** 知事に **Kont Alkodet** を任命した。私は **Alkovet** を知っていた。彼は狂信的なスペイン人異教徒であるとともに、実際は大胆な老人で、私の息子兼代理人が血族と国家を裏切らないことを分かっていた。しかし、奴が何を使用とも、命令は常に偉大な場所からやって来ていた。私はハサンに **Kont** をどのような方法で引き止めるのかを要求することを手紙に書き、この件においては大宰相と意見が一致していた。ハサンは **Kont** にこう言った。「お前は私がアルジェをスルタン・スレイマンから断ち切る力があると思って私にこのような提案をしたのか？確かに私は王に仲間入りしたい。だが、このようなことのために一歩を踏み出した場合、アルジェのトルコ艦隊の数千の水兵が私を鎖につないで船に捕らえて、イスタンブルに送ることになる。一方、カルロス王が強力な軍隊と艦隊でアルジェに来たならば、私は都を防衛することはできないし、ここにいるオスマン艦隊も壊滅する。お前たちは都を手に入れたのか？全ての国はお前たちの物だ！」

Kont とドーリア、そして強大なカルロス王がだまされることに向けて私は少々ほのめかした。だが私が見たところ、私と息子が裏切ることができるように望むこの男たちは、ハサンのこの提案を真剣に捉えて無鉄砲な行爲に出た。私はハサンに、アルジェで可能な限りカルロス王をけなして、その後スルタンの艦隊でイスタンブルからやって来て異教徒の船を全て海に沈めるように手紙を書いた。私はすぐにはアルジェに行くことができなかった。なぜならばスルタンの艦隊が西地中海で目撃されれば、カルロス王が大胆にもアルジェにやって来るどころか、恐れて最も強固な城に籠城してしまったのだから。プレヴェザ(p99)遠征からカルロスのアルジェ遠征までの間過ぎた 3 年委譲の間、カルロス王はこの様な政治的不名誉を引きずって暮らしていた。

スルタン・スレイマンが 9 度目の遠征からイスタンブルに戻った時、カルロス王は所持するヨーロッパの大陸の半分から集めた軍隊をアルジェに派遣する準備をしていた。彼はアルジェを手に入れば、北アフリカでのオスマン朝支配が根底から揺らぐことを期待し

ていた。十字軍の艦隊には 516 隻の船があつて、そのうちの 274 隻はガレー船で残りは戦艦だった。65 隻の巨大なガレー船は特に恐ろしく、一つの城のように海に浮かんでいた。十字軍の船には漕ぎ手の他に 12230 人の船乗りと 23900 人の陸軍兵、合計 36230 人の戦闘員が乗せられていた。更に援助網もあった。カルロス王自ら指揮を執るこの遠征の結果においてアルジェが手に入れられることの疑いすらされず、ヨーロッパで最も有名な海軍将校、陸軍将校、asilzadeler、王たちが傍らで勝利に参加するために大きな期待を示していた。スペイン、ドイツ、イタリア、Flaman,Maltız の asilzadeler のうち最も偉いものがカルロス王の傍らにいた。

■ カルロス王の手紙

ハサン・ベイには 600 人のトルコ人水兵と 2000 人のアラブ人の忠実な騎兵がいた。彼の艦隊を全滅させられないように、アルジェの海から発たせることを強制し、自然に水兵の多くも船に乗って行ってしまった。²⁴カルロス王がアルジェに向けて出発した日彼はハサン・ベイにトルコ語で以下のような手紙を送った。

「お前が目にしたこの軍隊に対峙するには、もう一人のお前の Gran Senyor の軍ですら力不足だ。目を見開いて微塵もないほどの賢さがあるならば、剣を出して、お前の頭にハンカチを結び、アルジェの城の鍵を私のところにもってこい。私の前で口付けをして許しを願うならば、お前の命を救おう。私はスペイン、ナポリ、シチリア、オランダ、ベルギー、(p99)アメリカの王であり、ドイツ皇帝である。お前の父であり主人であるバルバロスですらチュニスでは私の前から靴も履かずに逃げ出した。私に武器を向けるような無鉄砲な行為にだまされないように。でなければイエス・キリストの愛に、お前の全ての部分をアルジェの城の塔につるしてよろう。」

私の息子のカラ・ハサン・ベイはこの様に返答した。

「城と国は私の物ではないのであなたにあげよう。だがスルタン・スレイマンの国をお前に与えてこの世とあの世で bednam olamam。あなたからの pervam は微塵もないのだから。お前は人生を私の父ハイレッディン・パシャから打ち負かされることによって過ごしてきた。偉大なる神は必ず私に勝利を与えるはずだ！」

カルロスは大群の兵士とともに城に攻撃を仕掛けた。だが、初日にこのような抵抗を受けて驚いた。夕方までに疲労した兵士をテントに入れて、翌朝再攻撃を仕掛けるために撤退した。何とおあつらえ向きな夜だ！何が起きようともこの夜に決行するはずだった。兄オルッチが何千ものアナトリアとルメーリ出身の仲間たちと一緒に戦死して国土に加えたアルジェは、私の手に残るのか、それとも異教徒の手に落ちるのだろうか？全ては今晚明らかになる。

²⁴ 1541 年 9 月 20 日

異教徒たちは翌朝アルジェを手に入れる考えで船にある何百もの樽入りワインを持ち出してきた。彼らはそれを飲んで楽しみ、酔いつぶれた。アルジェの城へ避難していた 600 人には恐怖の念は微塵もなかった。

ハサンは騎士の格好をしたスパイを敵のテントに送り込んだ。私たちの水兵の中にはスペイン語や他の異教徒の言葉を母国語のように話すものは大勢いた。さらには 10 年以上スペイン船で漕ぎ手をしていたものもいた。彼らは状況を直ちにハサンまで伝えた。私の息子が理解したのは、何かが決行できるのならば、それは今夜行ふということだった。そうでなければ翌朝は酷い状況になる。ハサンは水兵と志願兵を、山を迂回して異教徒の野営の背後にやった。月は雲の陰に隠されていた。真っ暗な夜だった。雨が降り始めて、徐々(p101)に強まっていき、テントを破るほどに強く降り始めた。ついに天気は嵐になった。この兆しは全て神が私たち戦士とともにいることを示していた。私の水兵たちは敵の鼻先までやって来た。しかし、敵の目は単に夜闇と嵐によってふさがれているだけではなかった。彼らの目には神によってお気楽のカーテンが引かれ、敵は酔っ払いのようにテントの中で酔いつぶれていた。見張りたちは嵐の強さによって見張りの場所から離れてあちこちにもぐりこんでいた。おお、偉大なる神よ、あなたはどこでも偉大です！あなたの一握りの戦士は、カルロスの異教徒の大軍と海を埋める艦隊に対して勝利するだろうか？これは神よ、あなたの恩恵次第です。

■ 「偉大なるトルコ人がやって来た」

アッラーは・・・の顔を見せ始めた。ゴマから卵ほどの大きさの雹が降っていた。テントに避難しない異教徒はいなかった。海は *cuş-u huruşa gelmiş*、荒れた。異教徒の艦隊では、船を沈めないように大規模な活動を始めていた。

ちょうど真夜中にハサン・ベイは敵の軍隊を *taruma etmeye başladı*。「イスタンブルからバルバロスが、偉大なトルコ人がおそらくやって来た！」と叫んだ異教徒のうちの 3000 人は水兵の剣によって死んだ。異教徒たちは朝まで寝ることができず、疲労困憊の状態で太陽が昇るのを見た。しかし、再びやって来た一日は彼らの力にプラスとなるような結末は何ももたらさなかった。カルロス王は、興奮と躊躇、恐怖の中にあって、常に水平線にスルタンの艦隊が見えないかと不安がっていた。だが、私の息子カラ・ハサン・ベイの状況も良くはなかった。アルジェの人々は数年前のチュニスの都の有力者を思い出していて、トルコ人が降伏へ余儀なくなることを望んでいた。どちらかが安定を示せば、そちらが勝利するはずだった。カルロス王はこの安定を示すことはできなかった。徐々に荒れる天気は異郷の地にいる異教徒たちにはアッラーの怒りのように映った。

(p102)カルロス王は兵士に艦隊に戻ることを命令した。敵が敵陣から出て海岸に群がって船に乗り込むのを見たハサンは、攻撃に移った。異教徒が退散するのを見て、気が狂ったように喜んだアラブ人たちはすでに勇気付けられていて、

何千人もが戦利品への気持ちから志願兵として水兵に加わった。異教徒の兵士は空腹の上のども渴き、疲労していた。カルロス王ですら私が海上のどの方面から出てくるだろうかと恐れているのを察した異教徒の精神力は完全に折れた。敵は自分たちがどこにいるのかもわからず、沢山の失敗をした。ハサンは嵐の間中攻撃を行った。敵船の策具の半分以上は嵐によって陸に収まっていた。水兵は異教徒を **teker teker bağlamaya yetişemeyip**、数千人を縄で縛ってアルジェに送った。更にはカルロス王が残した全ての大砲、武器弾薬、軍需品も運んだ。

こうして 20000 人の異教徒が嵐でおぼれるか、水兵たちの剣によって殺されるか、捕らえられた。敵の **armada** には 4000 頭以上の **safkan** 騎馬がいた。これらのうちで溺れ死ななかったものは、保存食を切らした異教徒によって切られて食された。これらは何千アクチャでも手に入らないとても美しい馬だった。全ての大砲は水兵の手に渡った。恐怖の中に佇んだ敵は、固まって抵抗した。敵の武器と弾薬は湿って火がつかなかった。甲冑を付けた異教徒たちは、雨でぬかるんだ地面に沈んで、進めなかった。アルジェの海岸を、何千アルシュンもの長さに渡って、目の届く限り異教徒の死体、家畜の死骸、船の破片が覆い尽くしていた。十字軍は、軽症な負傷者ですら船に乘せられなかった。全員水兵の手に渡った。アルジェの都はこの戦利品で一層豊かになった。陸軍将校、海軍将校、**dukalar**、王子、伯爵、騎士たちとアルジェ制服を見物にやって来たヨーロッパの宮中で最も上品な女と娘たちが捕虜になった。ドーリアと **Kortez** は必死に生存者を救助した。この **Kortez** という残酷な男は、新世界において大勢の人々を火で焼いたことから非常に神に呪われた (p103) 異教徒であった。彼はアルジェを新世界と思ってここに苦悩を持ち込みたかったのだ。ああ、どこかのムスリム国家がこの残虐漢の手に渡ったならばどんなことになるだろうか？ 見本は数年前のチュニスにおいて示している。

■ 皇帝は馬を食らった

ドーリアは、ハサン・ベイの水兵の上にガレー船の上から弾丸を降らせたが、これは水兵たちを更に怒らせる以外の何の役にも立たなかった。十字軍のガレー船には数千人のムスリムの漕ぎ手がつながれていた。だが、1800 人はハサン・ベイの努力の結果海の上に集められて救助された。ドーリア自らが乗った指令船ではヨーロッパ人とジェノヴァの異教徒が体を他の船に投げ出して **halas etti**。

十字軍の状況は言葉では言い尽くせないほど酷かった。カルロス王は、ヨーロッパの半分を所有していたが、計り知れないほど高価な馬を切らせて、うまそうに食べた。彼はアルジェから逃げる際に頭の上の王冠を取り去って生みに投げ捨てた。スルタン・スレイマンに苦心して **ordusunun başına geçmek istemişti**。だが、スルタンのように兵隊が充実した国家ではなかったのだ。彼はその生涯において単独で軍隊を指揮することはなかった。軍隊のことも海の知識はなかったのだ。カルロス王はしばらく囚われの身だった。だが、

彼を守るマルタの騎士たちのお陰で、またハサン・ベイの兵が少なかったために救出されて脱出した。

十字軍の紋章は 13 日間アルジェの肥沃な大地に残ったが、台無しになるのに十分な日数だった。スペインとイタリアの港を、オスマン朝の剣が残った狼狽した十字軍で一杯にしてあふれかえると、ヨーロッパは悲しみで血の涙を流した。私の息子ハサン・ベイにはこの勝利の後に「ガーズィー」の称号が与えられた。この勝利のしばらく後に私はアルジェにやって来た。カルロス王は私がこんなに早くやってくるのを予想していなかったので出遅れたようだ。私は戦場になった海岸を歩き回った。ハサンの階級は海軍のサンジャクベ(p104)イだった。スルタンでもなく、大宰相でもなく、宰相でも、更にはベイレルベイでもなく、一人のサンジャクベイがヨーロッパでこの何百年間で最も偉大な統治者を狼狽させたことは、あらゆる歴史において偶然なされる事件ではないのだ。このカルロス王は、フランス王フランソワのような偉大な統治者を数時間の戦闘の後に捕虜にしてしまった統治者だった。

その後私の息子ハサンは、アルジェの海で沈んだ異教徒のガレー船から 150 門の大砲を出した。海から引き出されたこの大砲は修繕してアルジェに持ってこられた。あまりに沢山の捕虜がいたので、この中から一部を贈り物のようなものからあちこちに分配された。奴隷市場の価格は大規模に下落した。ハサンは、スルタンと私に向けた贈り物を 30 隻のガレー船を一杯にしてイスタンブルに送った。アルジェを出航してから 21 日後にガレー船はイスタンブルにやって来た。これは多くの西ヨーロッパの王たちを嫉妬で狂わせた艦隊だった。イスタンブルの人々は祭りを催した。艦隊の先頭にはデリ・メフメット・レイスがいた。

メフメット・レイスはまず私たちを訪問した。私の手に口付けをした。私は彼の様子を尋ねた。彼は私にハサンの手紙を渡した。私はそれを読んで満足した。メフメット・レイスの前に落とした。私はスルトンの王宮の入り口である Saray-ı Humayun にやって来た。私たちの後から 30 人の船長と一群の水兵がやって来た。水兵はスルタンに渡す贈り物を運んでいた。全員金糸で覆い尽くされていた。

■ スルトンの造船所では数万人の労働者が働いていた

スルタン・スレイマンは、私とともにメフメット・レイスと船長のうち有力な 4、5 人だけを御前に通して、他の者たちは外で待っていた。私はハサン・ベイの手紙を渡した。スルタンは他所の作法を用いて自ら手紙を開いて読み、顔が明るくなった。船長たちに金貨(p105)200 枚、水兵には金貨 100 枚、御前まで通ったものに着物を与えるように命令した。ハサンが漕ぎ手として送った 1000 人の異教徒が特に喜ばれた。ハサンにベイレルベイとパシャの称号を与えた。生きているうちに私の息子のこの幸福を見て、私の目は涙で濡れた。なぜならば、私の階級もまたベイレルベイだったのだ。

アルジェの水兵たちの一部は初めてイスタンブルにやって来た。多くはアナトリア出身で小さな **karyeler** からアルジェに渡った子供たちだった。大都市からやって来たものたちは少数だった。彼らはイスタンブルを見ると驚き、ボアジチと宮殿を巡った。スルタンの造船所では数万人の人が数百隻の船を建造するために蟻のようにうごめいているのを見ると、驚きで言葉を失った。彼らはこんなにも強力な国家の一員であることをアッラーに感謝した。私は水兵たちを良く見かけた。食べ物ではビョレッキとバクラバを切らさなかった。船長たちは、イスタンブルの邸宅を好む金持ちの邸宅でパシャのようにもてなされた。アナトリアから水兵に登録されるために多くの若者がやって来た。私はこれらの中から海の知識を持った 300 人をアルジェに送った。他のものは海の知識を学ぶために造船所に配置した。5 隻のガレー船を入り口付近にまで武器や船の物資を満載にしてアルジェに送るようにデリ・メフメットを促した。メフメット・レイスは 35 隻の船でイスタンブルを発った。スルタン・スレイマンは見物するためにサライブルヌに行った。ガレー船は全ての大砲を鳴らしてこの世の王に別れを告げた。船は 17 日でアルジェにたどり着いた。

スルタンは数日後にハサン・パシャに更に 5 隻のガレー船を送った。個人使用のためには宝石で飾られた剣、一粒ダイヤの指輪、軍旗と着物を送った。この間に私の息子は、公式に“ガーズィ・カラ・ハサン・パシャ”となった。ハサンは私に贈り物として 500 人の奴隷を送った。こんなに沢山の人々をどうしたものか？私は全て国家に寄進した。

(p106)一方でカルロス王は何ヶ月も教会にこもっているとの報を受けた。更には不安によって死ぬとの **şayi** すらあった。

²⁵私の活動記録はここで終わりにしよう。私に宗教、国家とスルタンに **azizane** を奉仕するために多くのチャンスを与えて下さった神へ感謝することでもってピリオドを打つ。

²⁵ バルバロス・ハイレッディン・パシャはこの後 1543-44 年にフランス遠征にでたが、この活動記録にはその話題は欠如している。彼は 1546 年 7 月 4 日にイスタンブルで死んだ。ベシクタシュにある彼の墓では、何百年もの間トルコ艦隊が航海の度に何百もの大砲で挨拶した。今日でもプレヴェゼの奪還年の日に国民と軍隊の儀式が行われている。英雄 **Rauf Orbay** ですら「間違いなく私はバルバロスの生まれ変わりである」と述べていることは、トルコ人が国家の偉大な船乗りに対して抱いている感情の深さを示しているのだ。

【補足編】

戦士ハイレッディン・パシャは、アンドリア・ドーリアを **Muton Koron** の前で捕らえて 29 隻の船を手に入れた。アンドリア・ドーリアは単身船で逃げて救出された。

アンドリア・ドーリアの敗北と狼狽がスペインに届いた日、スペイン王がドイツ王を支援するために送った 6000 千人を異教徒が切り殺した知らせもやって来た。

暗い知らせの二つともが突然一日のうちにやって来たために、異教徒は絶望と喪に沈んだ。彼らは犬のように吼えて、豚のように鳴き始めた。どの罪にも **nale** と悲鳴を上げる者に驚いた。

それはドイツでスルタン・スレイマンが切り殺した 6000 人の兵への悲しみなのか、それともアンドリア・ドーリアが奪われた 29 席の船へ対する悲しみなのか？

その結果異教徒の絶望と喪は限度を知らず、まるでいかだの上にいる犬になっていた…。偉大なる神よ、常に悲哀と運命を増やして彼らの頭を重くしたまえ。そしてムスリムである私たちの上には常に勝利をもたらしたまえ。きっとそうでありますように。

異教徒たちはハイレッディン・パシャについてこう言っていた。

「尊敬する人々が **hisir hisir hismarya ugrayasi** バルバロスの手から私たちの状態はどこにたどり着くのだろうか。私たちがアルジェにいる時には復讐できなかった。少なくとも

今や彼はスルタンに認知され、将校になった。彼は今後 **azizler** に送る以外私たちの手には方法が無い。」

彼らは復讐すること以外の望みをあきらめたのだ。その後こう言った。

「アルジェを取るために用心深く考えようではないか。もしも私たちがアルジェを手に入れたのならば、バルバロスは彼が聞いたところで心配があっさりと砕け散る。」

スペイン王は司令官と船長たちの言葉に道理を見出した。その後アルジェに向けた航海の準備に取り掛かからせた。

■ モソネグロ・カラ・ハサン・アー

スルタンの命令が必要なためハイレッディン・パシャはアルジェのスルタンを犠牲にして帝都イスタンブルにやって来た時彼の傍らにはカラ・ハサン・アーがいた。

カラ・ハサン・アーはすばらしいムスリムであり、**mu'min** であり、知識人であり、**fazil**、**tavaru** な行動の明快な **bahadir** 人物だった。実際胴体の長いことから **ufarak kit'a** であった。だが、一羽のノスリであった。**Bahadirlikta** ととても有名だった。ハイレッディン・パシャの息子であり、腹心の友でもあった。多くの困難な問題において彼の考えと措置に相談していた。物事を知っている人であったのだ。気前がいいことにおいては、**Hatem-i Tai** のようであった。誰かに恩恵を施すのならば貧しいものにも行った。常に公正なために物事をコーランに照らした。要するに、高德な人であったのだ。

ハイレッディン・パシャはイスタンブルに行った後アルジェを指揮した。秩序と規律が増した。アルジェの中は戦利品と奴隷たちで一杯になった。異教徒の海岸を破壊した。

ある日海岸で多くの異教徒の中から 2、300 人の異教徒が頭に草で編んだ飾りをつけてやって来て、王にハサン・アーからの苦情をこう言いたてた。

「国家の王よ、私たちはハイレッディンがイスタンブルへ行って偉大なセニョールに将校になりことを聞くと、とても喜んで幸せになった。それはキリスト教徒の敵バルバロスに私たちが救われたということだ。だが今バルバロスの代わりに即位したモソネグロ、つまりカラ・ハサン・アーは、バルバロスを呪った。バルバロスは再びキリスト教徒を海上で捕虜にして、殺さなかった。このモソグロネグロは「アルジェには異教徒はいない。私には奴隷は必要ない。」と全員の首を切ってしまった。」

これを聞いた王の理性は吹っ飛んでしまった。

「この悪魔め！ 直ちにその頭をすりつぶしてくれよう。これをバルバロスのような有名で名声の持ち主になることを放っては置かぬ。と言うのも、竜は蛇から生まれるというのは真実だからである。バルバロスが有名で名声の持ち主となったことは全て私の怠慢によるのだ。一人の海賊が何になると言っていた一方で、最後には偉大なるセニョールの將軍となった。もともとは少なくとも一つの大きな流血沙汰で、私の心はそれほど燃え上がらなかった。私たちは再び基本に戻ったと言った。だが、この最初の世代は明らかでない。

ミディッリの島から海賊が **gidisi!**」

カルロス王はこう言いながらパシヤについて、彼の心の熱情にふさわしくないへつらいを食らった。

この異教徒の息子は異教徒のことを知らないので、**ol devlet u darati nam u sani** 神が与えた…。そして **tuizzmen teas ve tuzillu men teas**。これを知らない人々は自身の **fisk** に一杯の考えの **hesep** な主張である。

■ スペイン王アルジェの前で

カラ・ハサン・アーが異教徒を処刑した情報が異教徒の側にうわさで流れると、**gayri** アルジェに更に注目した。

「聖徒たちの援助によって私たちがアルジェを手に入れたら、私はモソネグロという悪魔を処刑して宮殿の門に貼り付けてやろう。キリスト教徒を処刑するとどうなるのかをあの野蛮人どもに教えてれ。」

こう言って **laf u guzaf** の取り入れを保障した。

448 年、大掛かりな準備を行って、春がやって来るとアルジェに向かった。

ラビー1月の25日目にスペイン艦隊がやって来て、**Temitos** の前で停泊した。王までもがやって来ていて、こう主張していた。

「ハサン・アーの首をこの手で切るのだ！」

だが人間の思ったようには事は運ばない、すべては神の思し召しだ。結局このように言った。

「もしも口で言われたことが手でなされていれば、貧しいものは残らずスルタンになっただろう」

異教徒の艦隊は朝までなんとか居座った。こうして、大艦隊でアルジェに入ることはなかった。全部で400か500の帆柱があった。船の柱はまるで **kabalik** のように **Temnitos** の海を覆った。

カラ・ハサン・アーを見ると、ムスリムの色（顔色）は変わった。彼らはこう言って、かなり狼狽していた。

「今から直ちに私たちの状況をアッラーにゆだねた。果たして神からの **inayet** はあるのだろうか！」

その時カラ・ハサン・アーは大掛かりな集会を開いた。兵士たち、ウレマーそして都の人々の中から大人も子供もみんな集まった。

■ カラ・ハサン・アーの話

ハサン・アーは、ライオンのように立ち上がって、彼らにこう言った。

「息子たち、兄弟たち、父親たちよ！お前たち全員は今までの間あらゆる **sadlik** と快樂の中にいた。易しいことの全てが困難で、困難なことの全てが易しいのはあたりまえだ。今、異教徒の神に呪われたものたちがやって来て、私たちの州の前に投錨して停泊したならば、私たちも当然行うことは以下である。仮に私たちが今日一日でこの世にやってきて、再び今日一日で美味な液体を飲んであの世に行くことを知っていたなら。 **Hadisi serife** 命令したことによると、人は自身をこの世においてあたかも客人のようにみなすことが必要なのだ。この世にやってきたものが寿命という名の液体を飲むことは確実なのだ。神によれば、全ての者は死を経験し、神がそれを定めている。永続なのは神だけであり、ほかの何者もないのだ。

だからこうであるのだ。今日に品物も食料も子供も見ることなく、直ちに一生懸命にアッラーの同意のために **din'il mubin ugruna cihad-i** 見返りを求めない。正しく私たちが全滅するまでお前たちのために働こう。イスラムの教えに神の恵みを！ 私たちの死は戦死であって、私たちは殺される聖戦士なのだ（？）だが、救いの手を差し伸べるのは神である。お前たちとともにこの救いを見てみよう、敵の多くには見せないでおこう。というのも、少数の兵士で大勢の兵士を壊滅させることは、あらゆる物の所有者たる神の大昔からの習慣なのである。

恐れることはない。神に届くものは私たちへ救いの手を差し伸べるものたちである。ここは聖なる土地である。スルタンのアルジェの監視人はたくさんいる。偉大なるアッラーの助け、ムハンマドの助け、正統カリフの恵みのもとに、目に見えぬ取り巻きたち、出来合いの取り巻きたちの偉大なる助けに **berekati** によって異教徒たちにこうした姿を切って、偉大なるスルタンとハイレッディン・パシャが私たちに施しと褒賞をしてくださるように。そして私たちの後からやってくる兄弟の **tevarihlerimizi** ……。同じように **kabiller** こう言った。「…………。」

カラ・ハサン・アーはこのように言った後、述べたような **kavlu** 決定のためコーランの開扉の章をよみ、そして手で顔を叩いた。

Divan savulup isli isine gitti. Barcu barular uzerine pay olundular.

■ 兵士のような準備がされて

アッラーの助けがこのようであったので、**divan** によって以前に心の中にあった恐怖は、カラ・ハサン・アーの忠告の後にイスラム兵の中から出て行った。彼らの心は明るくなった。夜は **Kdir**, 昼間は新年の祝いになった。

異教徒の艦隊があるのだろうか、それともないのだろうか、どうしても重要なことにはたどり着かなかった。

「一つの害は全体を蝕み、一つの裏切りは全体を裏切る。」こういう言葉がある。（？）

戦士カラ・ハサン・アーの忠告の含まれた意味はイスラムの兵士をイエスのように蘇ら

せて、新しい世界に至らせた

ハサン・アーも立ち上がり清めを行い、立ったまま二度の礼拝を行った。

ことを容易にする神からのイスラム兵への助けを聞くと「アッラーよ、イスラムの異教徒に対して **kavi kill!**」と顔を地面に向けて叫んだ。

そしてこう祈りを捧げた。

「ああ、神よ！ 私はあなたの親愛なる僕です。私にイスラムの敵である異教徒のところで恥をかかせないでください。誇りをもてるように お助けください。」

その後 **Fetiha-i serif** は、コーランの不名誉の章・・・までを読んで顔を叩いた。そして立ち上がってこう言った。

「偉大なる神の名の下に、私はアッラーに頼って、異教徒との戦いを目指した。」

彼は武装して剣を腰にさした。預言者ムハンマドが仲裁を取って、**burcu barular** に出た。・・・と用意で忙しく、中心には秩序と規律を与えた。

城の塔に向かってイスラム旗が立てられて、太古が鳴らされた。「神は偉大なり」の声によって世界がこだました。要するに、兵士のように準備がされて、ライオンのように敵を待っていたのだ。

狼狽した敵もまた船から小船で洪水のように陸に散らして兵を配置させた。彼らは塹壕を掘ってモグラのように中に入った。

別の船からは石の爆撃がイスラムの城の塔に雨のように降り始めた。聖戦士たちもまた敵の **hasirin uzerine** 砲撃を雨のように降らせた。

この日、異教徒の船数隻を沈めた。なぜなら、異教徒の船は殊の外砲撃下に入っていたのだ。異教徒たちは。アルジェの城の塔には **hirtalli** 大砲がないとって無視をしていたが、ハイレッディン・パシャはその城の塔を極めて **muhkem** にして、**hirtalli** 大砲を設置した。40 門、36 門、20 門、12 門、8 門 **hirtal** といった具合で大砲があった。

この日砲弾と爆撃の打撃下に数隻の船が海に沈められると、異教徒たちは直ちに砲撃範囲から出て遠方に停泊した。かれらの大砲はアルジェ城の塔までは全然届かなかった。

ことがうまく運ばない神に呪われたスペイン王はこう言った。

「そのモノネグロというトルコ人のこの **rikolugunu** 気に入った。しかし、初めからバルバロスを賢い人物としてその傍らにすることについて言えば彼は賢い人物ではない。彼は少数の人とともに私に反抗することを望み、城の塔の上で見物している。明日私があの塔を **goklere agdirdigimda**、その時はどうしてくれようか。」

王はハサン・アーと一緒にしばらく喜んで、興じた後こう言って憤慨した。

「もしもこのネグロの悪魔が賢かったならば。私がここにやって来たのを見れば直ちにアルジェの町の鍵を手に入れ、その端にハンカチをつけて私の足元にやってきて許しを請うていた。この結果私は彼の罪を許しただろう。それにもかかわらず、彼をどんな形であれ救う方法はない。彼がキリスト教徒を処刑したことから私も彼を自らの手で処刑することを誓った。このようである一方で謝罪して、身の程をわきまえることによって再び処刑さ

れることから免れて、一定の事とともに彼の州に行くことをおそらく許した。だが、今私が彼に何かをすれば、世界の末日になるまで人々に知れ渡るがいい。」

彼のそばにいた司祭たちはこう言った。

「国家の王よ、何はさておきあなたは以前一通の手紙を書いて送った。その結果どうなったでしょうか？もしもあなたが言ったようにアルジェの鍵を、首につけて、胸に焼印のある（？）足元に持ってきて謝罪するのならば、私たちは何も言わない。逆になるならば、私たちは……。特にあなたが望むようにやつの罪を処置する。あなたのように偉大な名声を持つ王に何ができようか？やつは賢い考えにたどり着かないのでこうするのです。そうでなければ、あなたがこの征服者としての権力にそのうえ偉大なる統治者（**Gran Senyor**）ですらあるならば、おそらく耐えられない。カラ・ハサン・アーは血にまみれた！」

悪魔の司祭たちは、神に呪われた王がそれほど高い地位を与えたので、脇にスイカを抱えることもできなかった（？）。その時こう言った。

「あなたは正しいことをおっしゃる！トルコ語でハサン・アーに手紙を書いてください！」
手紙が書かれて送られた。

■ スペイン王の手紙

手紙には以下のように記されていた。

「スペイン王から **kuvarnadoru** カラ・ハサン・アーへ。

私の手紙がお前に届いたら以下のことをわきまえて注意して、目を見開け。もしもお前の頭が絶望ならば、口にハンカチをつけて、アルジェの町の鍵と一緒に持ってきた後に足元にひれ伏せ。おそらくこの方法でお前は罪が免除されて、処刑されずに済むだろう。というのも、私が聞いたところ、お前はキリスト教徒の奴隷を海で探して捕らえていて、アルジェには捕虜が大勢いて、私の捕虜には老人はいない、私には名声が必要だ、と首を切って処刑したそうではないか。私もお前の首を自らの手で切ることを聖徒たちの前で誓った。お前が自らやってきて謝罪し、私の足元にひれ伏すことなしにはお前を救うことは不可能だ。その時にはおそらくあらゆる手立ての中から **necat** を探して、いくつかのことによってお前を救い、お前は自分の国に帰ればいい。

だが、私が何とかアルジェを落として手に入れたならば、お前は助からない。お間の兵士全員も保障しよう。お前にいかに名声が必要だろうとも、私もまた必要なのだ。私がいかに強力な力を持っているのかを知っているだろう。すべてのキリスト教徒に **sehin sahim**, そして **tac-i Nusirevan** の王冠を頂き、すべてのキリスト教徒国家のための政権をつくる。私はお前の主人ハイレッディンをチュニスから靴もはかずに逃げ出させた男だ。さあ私をよく見るがいい。この偉大な力でもってこちら側にやって来た後は目的のアルジェを手に入れるのだ。私はアルジェを手に入れることなく引き返しはしない。兵士も食料も物資も十分にある。まるで不可能なことは無いようだ。さて、これらのことがお前に知られ、そ

のことによって私を恐れよ。これより後は知らなかったという口実は聞き入れな

王の使者はこの手紙を運んで戦士カラ・ハサン・アーに渡した。カラ・ハサンは会議を招集した。戦士たちは彼の前でイマームに手紙を読んでもらった。みなに内容が知れ渡った。拒絶の手紙が書かれて再び使者の手で持ってスペイン王に送られた。

返事はこのように述べられた。

「おい、永久に神に呪われ、**sermedi** 豚であるスペイン王よ、お前の手紙が来た。そしてその中でお前が食らった **pohlarin** すべてがこちら側に知れ渡った。今私は名声と会話「？」でもってお前にアルジェを与え、お前のように **kalpten dahi pervam** はない。**Elinden geleni ardina koma**。もしもお前が偉大な力で酔いしれているならば、私は万物を無から有にするアッラーの **azimussana** にゆだねる。お前が知っているように、少ない兵で多くの兵を打ちのめすことは秘密を知っている神の太古からの習慣である。異教徒と対峙して **cenk u cidal ve harb u kital** をすることはイスラムの名誉と尊厳であり、……。お前のようにものすごく自惚れた振る舞いを続ける神に呪われし者は、アルジェを奪う目的でやって来て神の助けでもって敗北して、後悔と狼狽の念の中顔を暗くして後ろを振り返りながら立ち去るのだ。**Hazret-i Kibriya** から私は望む、お前がだめになるように！というのも、傲慢の敵は、復習者であり偉大な王である神なのだ…。お前は **bildiginden kalma!**」

■ カラ・ハサン・アーのスパイ

カラ・ハサン・アーの手紙がスペイン王に届いて読まれると、怒って手を叩き、稲妻のように歌い、異教徒は震え上がった。王はこう言って **kute kut cengi artirdi**。

「ネグロのじじいめ、私はお前にかなわぬ男ではない！」

しかし、カラ・ハサン・アーのスパイがいて、異教徒の軍隊に潜伏していた。どんなことでも見られることは出かけていって、報告した。

ある日、異教徒の盛大な祭りがあった。異教徒たちはその日船から小船にワインの樽を出して、その夜は飲み食いして朝まで楽しみ、笑い、興じた。翌日も議会は行き場がなくなった。彼らは豚のように、**hotlayip** 寝転がった。

Hatirlarina asla こう言ってやって来なかった。

「私たちがこうして酔っ払った状態で寝ているときに、おそらく今夜ネグロ・ハサン・アーがやって来て攻撃するなんて誰が思うだろうか。」

彼らはこう思った。

「トルコ人たちは私たちが恐れるあまり、城の塔から一步出ることもできないのだ。」

戦士カラ・ハサン・アーは、異教徒の状態を必要なだけ情報をつかんでいた。直ちに勝機とみて戦士たちを **mesveret** した。

少数の精鋭で戦闘経験があり、大胆な兵士をそろえた。夜中から朝に近い時間に密かに城から出た。ハサン・アーが先頭に立った。山道をたどった。月はなく真っ暗だった。

山の道からたどり着き、休むまもなく敵の軍隊のところに出て行った。神はその夜逆風をふかして、異教徒の上には真っ暗な霞がかかっていた。何も見えなかった。雨も **destiden okulur** ように隙を与えなかった。

これはアッラーによるイスラム兵への援助の印だった。異教徒を見れば、ある者は眠そうで、ある者は酔っ払った犬のように寝ていて、豚のように **hortlayip** 寝転がっていた。こんなであったので、彼らは状況がわかってなかった。それにもかかわらず、戦士たちは銃を撃つほど異教徒に接近していた。

神意では、異教徒の側では大雨が暗闇、嵐、稲妻とともに降り注いで目が開けていられない一方、イスラム兵の側はこれらのことはなかった。イスラム兵たちは異教徒を見ていたが、異教徒たちはイスラム兵を見ていなかった。

■ 奇襲

イスラム兵はこのように整然とやってきたので、足元で蟻をつぶすこともなかった。戦士カラ・ハサン・アーは少数の兵士の先頭に出て、すべてのことに彼が指揮を執った。誰も音を立てずに、みな集中していた。

彼らが望む場所にたどり着くと、こう言った。

「**Bismillahirrahmanirrahim, niyett-i gaza, kasd-i kafil!**」

ハサン・アーの **tufengini** からにすると、少数の兵士は突然……一掃した。異教徒たちは散り散りになった。

その後からは戦士は剣で切りつけて異教徒たち中心に入っていった。すずめの一隊にワシが、農民の畑に鎌で刈る人がどのように入ろうとも、異教徒たちをこうして殺し始めた。

異教徒たちはといえば、3日間飲み食いしたことと、酒におぼれたことから目は世界を捉えてなかった。武器によろいをガチャガチャぶつけて、自分たちが見つけられるまで戦士たちは異教徒の半分を壊滅させた。異教徒は全部で 35000 人いた。

異教徒の中に悲しみと驚きが湧き出た。彼らはお互いに殺しあい始めた。

最後の審判の日として、異教徒たちはどこにたどり着くのかを知らなかった。そのため「攻撃したければ、かつてにすればいい」と言った。少なくとも、攻撃されてどうしているかわからなくなった酔っ払いか三日間の夢うつつであるならば…。

ついに、明け方日が明けるまで戦士たちは剣を残さなかった。2000 人以上が異教徒の剣で殺された。400–500 人ほどは捕虜にされて羊の群れのように前のほうに集めさせた。これらを剣の **yelmanlar** で打って、歩く道に **kerterek**、無事に戦利品とともにやって来て塔に入った。

朝になって太陽が見えて、その光で世界を照らすと、異教徒たちは何を見たか！手遅れで、害悪の海が岸を越えた。このようであったので、異教徒の死体で丘ができていた。Kelle

dersen bostan kesimi gibi 足元では…

この状況を見ると、異教徒たちは非常に驚き、うなだれた。というのも、彼らの記憶にはオスマン兵が夜に塔から出て攻撃した記憶はなかったのだ。

「オスマン人たちは今の首を心配していて、捕虜になることを嘆いている。」

彼らはそのうぬぼれの心からこのように言い、食べること、飲むこと、音楽に興じることに夢中だったのだ。そしてこのように言った。

「たった今からアルジェは私たちのものだ！」

彼らは神がイスラムに味方することを思いつきすらせず、自身の数での優位性に頼ったのだ。

スペイン王もこれほど多くの兵士によって傲慢だった一方で、突然にこのように顔が暗くなった、といって怒ったことから、異教徒は萎縮した。

そしてこう言って恐怖した。

「これは良い兆しではない！」

■ 海は大混乱になって

しかし、再び異教徒のがんばりをあきらめずに船から再び兵士を出し、前以上に塹壕へ **balyemez** 大砲を引き入れて、その日は夕方までアルジェの上に雨のように砲弾を降らせた。

夕方のアザーンに近い時間に、空には雲が集まって稲妻が出始めた。強風とともに世界を暗闇が覆って、**bela berani** のように雨が降り始めた。短時間で洪水となって異教徒の塹壕を満たして、彼らは流れて海でおぼれた。

最後の審判だ、アッラーお助けを！神は怒りとともに恵みをもたらし、異教徒に向かって卵より大きな雹を降らせた。あるものの頭は陥没して、あるものの目が飛び出て、彼らは息を引き取った。彼らはどこにたどり着くのか知らなかった。

海は大荒れになって、大雨となった。異教徒の船はテムニトス湾の浅瀬に乗り上げた。そこでも多くの異教徒が死んだ。

500 隻の船のうちから唯一スペイン王が乗った **bastarda** を救出して、異教徒は顔を暗くして海岸に引き上げていった。

みなこう祈っていた。

「神よ！本当にあなたの恩恵は果てしない。孤児となったものたちを、常に、導きください。」

首領のカラ・ハサン・ベイは夜も眠らずに神に祈った。

「神よ！イスラムの兵士に援助して、**yuz akliklari muyesser eyle**。神よ！無力な顔の不幸な僕である私を異教徒の前で辱めないで下さい。あなたが吹かせた風と **din-i mubin** 至る聖戦のために私たちは **kusca** 献身しました。哀れな僕である私たちに救いと恩恵を与えたま

え。異教徒たちは数の優位性に頼っています。哀れな僕である私たちはあなたの十分な **keremine** を頼りにしています。」

彼はこう言って地面にひれ伏して祈りを捧げた。このようにして行った者の祈りを神が受け入れぬはずがない。神は旧約聖書でも「お前が望むものを与えよう。」と言っている。しかし方法を探すことを望んでいる。(?)

異教徒に洪水が襲い掛かると彼らはこう言った。

「怨念が **serrine** 取り付いた！」

神が怒ったということ以外に知らせはなかった。

■ 25000 人の捕虜

戦士たちは神への感謝と祈りを捧げたあと、戦士カラ・ハサン・アーの 10000 人の兵士とともに城の塔から出た。異教徒たちと対面した。アッラーの許可と、預言者の奇跡によってこのように異教徒たちに剣を広げたので、神よ、お助けください！雨は水を異教徒の血を混ぜて洪水のように流し、汚れた死体を海に送った。

生き残った者たちは戦士たちが抜き放った剣に立ち向かう力はなく、逃亡の面を取った。彼らはこう言って退散し始めた。

「私はお前を捕らえるためにやってきたが、どこにも手立てがない。私たちの前には石がやってきたのか、それとも先端が出て来たのだろうか。」

戦士たちが増えるとうるさく叫んだ。

「異教徒たちよ、どこへ行くのだ！お前たちは私たちの手によって、血の中で命つぎることになるのだ。」

こう叫んで異教徒を打ちのめしながら進んでいるときにハラシュ川が行く手を阻んだ。

川は雨のために荒れ狂う洪水のようであった。異教徒の先頭のほうにいたものたちは恐怖によって自ら川に飛び込んだ。誰一人助からずに、皆死んだ。推測では 10000 人以上の異教徒が地獄に行った。残ったものたちは川に飛び込むことはせずにこう言って戦士たちに降参した。

「**Myna sinyor!**」

戦士たちは異教徒を一人ずつ縛って捕らえて、アルジェに連れて行った。全部で 25000 人の異教徒がいた。

この異教徒の塹壕にあった大砲、浅瀬に乗り上げた船の材木と軍需品をアルジェに運ばせた。こうしてスルタンは、神と聖者の恵みにより、(異教徒に与えるべき)罰を、これまでの 10 倍にして実現した。偉大なる神が 最後の審判の日までの完璧さ、敵に対する勝利を与えますように。

つまり、このような喜ばしい出来事は、アダムの時代以来、はじめてのことだ。

■ イスタンブルへの勝利の吉報

戦士カラ・ハサン・アーはこの面目を一部始終記してスルタン・スレイマンへ手紙をだした。1000 人の異教徒の捕虜も漕ぎ手として分けた。さらに、スルタンとハイレッディンに贈り物をした。大臣全員にも **hep yollu yolunca** 贈り物を準備した。

これらをイスタンブルに持っていくために 30 隻の船に質のよい油をぬらせて、どの船にも 250 人の聖戦の騎士と若者を乗せた。どの船も整然と準備した。首都イスタンブルへ行く異教徒の捕虜を 30 隻の船に配分して、二人ずつひとつの・・・につないで、夜は手にも枷をつけて注意深く時間を過ごした。なぜならば、敵は好機を狙っていて、のんびりしてられないのだ。

ある日頃合に 30 隻の船はアルジェを出た。こう言って出航した。

「イスタンブルはどこだ！」

適した天気のお蔭で 21 日目に無事にイスタンブルにたどり着いた。その日イスタンブルの中は火をたいて祭りを行った。

やってきた 30 隻の船のセラスケリはハイレッディン・パシャの子弟であるデリ・メフメット・パシャだった。彼はハイレッディン・パシャと面会した。ハイレッディン・パシャは古き親友がやって来たのを見て大層喜んだ。

デリ・メフメット・船長は出て行ってカラ・ハサン・アーがハイレッディン・パシャに宛てた手紙と、さらにはスルタンに宛てた手紙を渡した。

ハイレッディン・パシャは当時海軍提督であると同時にアルジェの **Ocak** (太守?) でもあったので、この太守の仕事すべてについて彼に尋ね、彼にもできる限りの援助をした。彼は太守であることを誇りに思っていて、おそらく自身が生まれ育った国を好きだった。

■ ハイレッディン・パシャとアルジェの **Ocaklar** の前で

後に残ったハサン・アーのすばらしい功績に喜び、世界は彼のものとなった。デリ・メフメット船長はアルジェ州のことと、出来事を一つずつハイレッディン・パシャに説明した。彼は目から喜びの涙をそのすばらしいひげに滴らせて祈りを行った。

若者たちは純粋な金糸の服を着ていた。どの者の手にも一つの品が乗っていた。自身がアルジェ出身であることを誇りに思って、**surusl** 馬に乗り、同郷のアルジェの戦士たち前に行き行った。トプカプ宮殿のヒュマーユーン門の御前会議室への入り口と宮殿の中庭の中で停止した。

「アルジェの僕たちが閣下に拝礼にやってきた。」

スルタンの旗に向かってこのように上奏を読み上げると、スルタンは小部屋にやって来てアルジェの若者たちを見物した。その後全員に着物を着せて 100 枚ずつ金貨の心づけを与えた。船長たちには 200 枚ずつ与えた。

水兵たちが退出して行ってしまった後、何人かがスルタンの御前に通された。

ハイレッディン・パシャは先頭に立ってスルタンの御前に出た。彼はスルタンと対面した。ハイレッディン・パシャはスルタンに申し出ないままに会った。必要なことを行い、敬意を示した後にハサン・アーの手紙を懐から出して、スルタンに渡した。

スルタンは手紙を自ら開いて読んだ。異教徒がどのようにしてアッラーの怒りに触れて、どのようにして降参したのかの詳細が説明された。最後にはオスマン朝の存続を祈って親愛の念を示していた。

手紙が終わりまで読まれると、スルタンはほっとして涙を流しながら手を上げてアルジェの同志たち、ハサン・アーとハイレッディン・パシャのために祈りを捧げた。そしてこう言った。

「Berhudar ol 私の僕たちよ！実は medh すること以上である。アルジェの土地を放っておかないように。」

ハイレッディン・パシャはこう言った。

「スルタン閣下、・・・・・・。」

スルタンは以下のように言って祈りを捧げた。

「私の僕よ！私たちにもまた船の漕ぎ手として 1000 人の奴隷を恩寵して送り、この世とあの世で誇りをもてるように。」

そしてこうも言った。

「今私はお前を見て、ocagina どんな形で援助をするのか。お前は彼らに必要となることを知っている。アルジェの同志たちには私の造船所から必要なものは何であれ与えられることになる。」

スルタンは自ら手紙を書いて、ハサン・アーにアルジェのベイレルベイにした。宝石を添えた花輪、高価な剣、クロテンの毛皮、宝石をあしらった時計、旗、戦旗を送った。10 隻の新しい船を与えたことはどれにもまして完璧だった。

■ たくさんの愛に

アルジェの 30 人の船長たち全員には個別の邸宅が与えられて、国庫から兵士の食料が与えられた。ありったけのバクラバやビョレッキが送られた。水兵たちにも冬をすごす同じ施しがされた。

スルタンの命令によって 5 隻の船に油を塗って、兵士を招集するために地中海に送られた。中には周囲に旗を掲げて兵士を集めて、ボアズヒサルで待っていた。予想された数千人の新しい仲間が集められた。

ある日イスタンブルにある 30 隻アルジェの船に油を塗って、Ocak に属する軍需品を船に満載して準備がなされた。ふさわしい頃合にハイレッディン・パシャとスルタンにお暇

を告げて三度の祭りと **sadimanlik** を行った後に出航した。

スルタンはその日離宮にやって来て彼らの祭典を見物した。スルタンは手を掲げて **Ocak** と戦士たちのために祈った。

船は翌日にボアズヒサルについて投錨し、停泊した。新しい仲間を船に乘せられるだけ乗せて、多くの愛に満ちた多くの船でそこから出発した。

好ましい天気によって 21 日目に無事に戦利品とともにスルタンのアルジェにたどり着いた。その日は、祭りを行った。

翌朝多くの **divan** を集めた。デリ・メフメット船長がやって来てハサン・アーと対面して、機嫌を伺った。

デリ・メフメット船長はスルタンの手紙をハサン・アーに渡した。ハサン・アーはそれに口付けをして頭に置いた後ホジャに渡して読ませた。

スルタンの手紙は以下のものであった。

「イスラムのアルジェの西の保護者ハサン・アーよ。……。恵みあれ、この世とあの世で誇りをもてるように。常に敵に勝利するように。お前が、信仰深く、有能で勇敢だということを耳にしている。ふさわしいものとしてお前をアルジェのベイレルベイの地位を与えよう。幸あれ。10 隻の新しい船も **Ocagina** 与えた。そしてお前の戦いの褒章に花輪を送った、頭に頂くように。……。オスマン朝の存続を祈るように。お前にクロテンの毛皮、宝石の指輪、宝石をあしらった時計、宝石握りの剣、旗と戦旗を贈った。**Berguzar edersin**。剣は腰にさして敵と戦うといい。そして私たちを祈りとともに思い出するように。偉大なる神の援助者として手助けするように。」

■ Berhudar ol karimdas

この時戦士カラ・ハサン・アーはアルジェのベイレルベイになった。公正に活動して、ハイレッディン・パシャの時のように秩序と規律をもたらした。

ハイレッディン・パシャがカラ・ハサン・アーに送った手紙には以下のように書いてあった。

「**Berhudar ol karimdas**、前は私をスルタンの前で誇らしくした。偉大なる神はお前の……。この世にいる間は敵に勝利するように。お前が私に送った 500 人の異教徒はスルタンに贈った。」

ハイレッディン・パシャは、アルジェの知事ハサン・パシャに彼が送った贈り物のお返しに二倍以上の贈り物を贈った。**Ocak** のためには多くの軍需品を送った。仮にアクチャで売ったならば 1000 袋のアクチャでも十分でなかった。

ほかのオスマン朝の人々一人ずつからもハサン・アーに贈り物がやって来た。

翌日聖なる金曜日なので、戦士ハサン・パシャは正装してスルタンから **berguzar** クロテンの毛皮を上に着て宝石をあしらった花輪をターバンにつけた。宝石の指輪を指にはめて、

同じ日付の時計を **koyununa soktu**。旗と戦旗をパシヤカプに掲げた。純粋な金糸は美しく、一度見たものはそれをもう一度見たがった。これらはすべてスルタンのアルジェの知事ハサン・アーへの施し品としてやってきた。

ハサン・アーはこの豪華な出で立ちでやって来て座った。そこら中の知識人、**salihler**、戦士、船長、部族長、都の人々がやって来て、おめでとうございますと言った。

伍長たちはこのような声援を送った。

「オスマン朝万歳！」

そしてオスマン朝の繁栄を祈った。

その後 **sumatlar** を広げて食事や飲み水などを貧しいものに振舞った。人間以外は鳥から蟻にいたるまでいっぱいになった。砂糖のシャーベットと麝香のようなコーヒーが川のように注がれて、飲むように振舞われた。

老戦士ハサン・パシヤはこうして 3 日間継続してムスリムのために祭りを催した。そして三日間城の塔から大砲の祭典とともに **ciragan-i surur eyledi**。敵に血を準備させた。(?)

■ 王は苦痛でもだえ苦しんだ

スペイン王は自らが先頭に立つことによって、敗北と打ちひしがれた状態で異教徒の海岸にたどり着いた。戦士ハサン・パシヤにスルタンからアルジェのベイレルベイの地位が与えられたこと、これほどのスルタンの祈りと施しを受けたことを聞くと、このように嘆いた。

「私たちはバルバロスカラ解放されたと言っていた時に、再び害をこうむった。この男はバルバロスが代理として残した **surutat** だった時、私の様に偉大な名声と名誉を持つ王の強力な軍隊を魔術で持ってだめにした。**Salt basmizla gelip yerimizi tuttuk**。これほど悲しみを切り取る私たちの大砲が陸に残った。彼は陸に散らばって壊れた私たちの船の軍需品と、私たちの兵のうち捕虜になったものキリスト教徒を連れて行った。捕虜となり、それは恥ずべきこと。死んで行った者もいる。以前アルジェは一つであったので、もはや私の富とともに百倍力強くなった。彼らが私たちにこれを行ったことは……。ああ、なんということだ！」

こう言った神に呪われた者は苦悩に打ちひしがれて死んだ。彼の息子が代わりに王になった。

偉大なる神よ、異教徒を常にイスラムの恐怖の中において、陸でも海でも常に敗北と混乱をあたえてください。そしてイスラムの兵士は常に異教徒に対して勝利しますように、お願いします！そして神よ、スルタンのアルジェに終始秩序と平安を与えて、この世にとどまるものには引き続き与えますように。

■ ハイレッディン・パシヤの末日

さて、物語は戦士の首領たるハイレッディン・パシャのもとへとやって来た。

アルジェの知事ハサン・パシャが 30 隻の船でスルタン・スレイマンに贈り物をして、スルタンの祈りに到達した。アルジェを手に入れるとの主張とともにやって来たスペイン王を負かして混乱させた戦闘はスルタンを余計に喜ばせて、アルジェの臣下のために祈り、ハイレッディン・パシャにこう言って注意した。

「私はお前（の功績）を見た！アルジェの **Ocagim** 私の名誉であり誇りである。Ol Ocakla お前は誇りである。……。彼らに必要なものはお前が知っている。私の造船所から必要なものを彼らに与えなさい。」

こうした話は上述した。だが、……。

ハイレッディン・パシャは、この高尚な命令を受けて実際に自分が **Ocak** であることと、スルタンの同意によってアルジェの **Ocak** へ必要な軍需品をアルジェの船に満載した。その船も出港してアルジェに行った。

随分時間が経った後、裏切り者たちは影口を叩き始めた。……。オスマン朝の人々は集団でハイレッディン・パシャを好まずに嫉妬していた。そしてこう言い始めた。

「スルタンは彼にアルジェの **Ocak** にある程度のものを与えると言って、……。」

この発言が広まってスルタンの耳に入ると、スルタンはこう言って、集団を裏切り者たちを……。

「私の僕ハイレッディン・パシャがアルジェに何を与えようとも、私の許可が与えられた。彼が行ったことは私が承認している、誰もこの件に口をはさむな！」

人の支援者たるアッラーも, **var kiyas eyle ki ol ne sah ola, demisler.**

■ ハイレッディン・パシャの死

今やハイレッディン・パシャの陰口が大分記憶から遠ざかった(?)。彼は病気になった。言葉の害は薬にならない、という諺がある。

寿命がやって来て 3 日間死のふちを彷徨った後に死んだ
。。。。。。。

彼の聖なる墓はベシクタシュにある。生存中は海軍提督の開祖であった。というのも、偉大なオスマン朝において彼は最初の海軍提督であったのだ。彼はオスマン朝の海事と造船所に規律をもたらした。

。。。。。。食料をあたえ、貧しい人々が食べた。

Ruh-u serifleri sad olsun. 何度にもわたる発見と奇跡を経験した聖人であり戦士である人物であった。

Rahmetullahi aleyh.

